ハーフハートマジカルくのいちハイブリッド

著者
セレーネドリフト

日本に住み、景色を楽しみ、それを大切にする人を信じている人たちのために。

コンテンツ

物語の登場人物
第1章
第2章
第3章
第4章
第5章
第6章
第7章
第8章
第9章
第10章
第11章
第12章
第13章

物語の登場人物

物語の主人公、白原。白はハイブリッドウミガメのリーダーであり、妖怪界を救う使命を帯びています。

レイカ - シーラの妹で、グループの中では短気な性格。レイカは火を操り、重いものを持ち上げることができることで知られている。

智香は、グループの中では知的な天才で、真ん中の妹です。優しく穏やかな智香は、超能力を使いこなし、様々な発明品を生み出します。

マナコは末っ子で、グループの中では一番元気な女の子。可愛くて愛嬌のあるマナコは、動物と話したり、植物を育てたりするのが大好きです。

イキオイ -少女の養母蛇。イキオイは少女の子供たちを見つけてから14年以上もの間、育ててきた。

リン・ミュウ - 姉妹を助けた妖精の守護者。魔法戦士を探すために地球に派遣された。

アーニャは、女の子たちが仲良くなった白い鳩。ペットのノコ、ルヴィと一緒に木の上で暮らしていました。

カイダ - ヨバイビリー出身のトカゲの暗殺者。ロボットによる被害の追跡に協力する。

ピピミ - ロボットの侵略の際に生き残った骨董品店のカエルの店主。

ルル - ココベリー出身の蜘蛛のスパイ。妖怪失踪事件の証拠を探すために雇われた。彼女の役割は、捕らえられた妖怪たちが兵士のように従順になっている原因を突き止め、治療法を見つけることだ。

メッチャン - ウィキアから逃亡したロボット。メッチャンは少女たちがC.L.I.から逃げ出した時に初めて出会い、彼女たちの帰還を助けた。

プリズム - ズブニア出身のピンク色のフリアン人エイリアン。オキマ族に捕らえられ、バトルサーカスの闘技場で奴隷として使われていた。

シャドウサイド - モンスターの軍団を組織し、世界を征服しようと企む邪悪な敵。彼女の使命は、全人類を滅ぼし、ウミガメの少女たちを捕らえて血を吸うこと。そのため、彼女は地球の強力な支配者となるだろう。

カナコ - ウミガメを飼育し、その血からハイブリアを抽出した人間の科学者。元々はC.L.I.で働いていたが、シャドウサイドの計画を知る。重傷を負い、亡くなる前にウミガメたちを岸まで救出せざるを得なかった。

第1章

森には妖怪が棲んでいると言われています。神々や小さな精霊と呼ばれる存在です。妖怪と呼ばれるこの森には、かつて世界のほとんどの地域でしか存在しなかった日本の怪物たちが棲んでいます。彼らは、毛も毛皮もない、人間と呼ばれる奇妙で複雑な生き物に隠れています。

妖怪は恐ろしい怪物だと言う人もいます。ほとんどは人間の姿をしていますが、中には動物の姿をしたものもいます。あるいは、奇妙な目、鋭い歯、そして動くための手足を持つ物体の姿をしたものもいます。誰もが妖怪を恐れ、追い詰めてきました。

しかし、すべての妖怪が危険なわけではありません。妖怪は、妖怪から守ってくれた人々に幸運と幸運をもたらす存在です。そして、愛する人を偲んで、お守りを捧げるために、人々は妖怪を崇拝しています。妖怪はおとぎ話の中にしか存在しないと誰もが言いますが、実際には、妖怪たちは自分たちの世界とは異なる、生命と奇妙な生き物に満ちた世界に生きていたのです。

時々、「聞こえますか？森に妖怪がいるに違いない」と言う人がいます。しかし、大人の中には、ただ動物が落ちてきたとか、木の枝が落ちてきたとか言う人もいるかもしれません。妖怪とは、彼らが見た神話上の存在で、人の心の奥底から悪戯して木々に隠れているだけなのです。

でも、彼らにとって、いや、私たちこそが、実は人間ではない。私たちは、海ではなくジャングルの奥深くに住む、カメ女なのだ。森に住んでいるのに海に住んでいないのは不思議だろう？私たちは昔、14年間森に住んでいて、すべての生き物の守護者なのだ。魚の尻尾を使って、水を得た魚のように、素早く優しく川を泳ぐ。私のそばでは、マナコとトモカが、それぞれ独自の超能力と生命力でそれに倣う。最後に、レイカは、森の半分を破壊し、森の生命を滅ぼそうとしている、裏切り者の人間のクズの匂いを嗅ぎ分けることができる。真実を言えば、私たちはコスプレのような衣装を着ているわけではなく、本物の妖怪なのだ。

私の名前はシロハラです。シラは白い王女を意味します。ハラという姓は起源と誠実を意味します。2つの単語を合わせてシラハラという名前になりました。私は彼らのリーダーとして知られ、一族の長女です。水を操る力があり、白鳥の翼を使って飛びます。私の足は融合し、変形

して水に触れると魚の尾になります。歌の力で病人や弱者を癒し、戦いに使います。私が手に持つ青いナイフは、木を切り裂き、あらゆる生き物の皮膚を切り裂き、一刀両断で相手を死に至らしめます。

悲しいことに、私は片目しか見えません。左目がどうなったのかは分かりませんが、母によると、孵化したばかりの頃に甲羅が眼球に刺さって皮膚に赤い線が一本入った傷跡ができたそうです。私は最初から醜かったわけではありません。金髪の肌と、肩に広がるウミガメの青い鱗のおかげで、私の体は甲羅で覆われ、翼は二つ、短い青い髪、そしてピンクの光が昇るにつれて目はピンク色になっています。私の力はどれも同じではありません。

次姉のレイカは副官です。名前は「美しい花」という意味です。彼女が自分の名前か何かを変えたいと思っていたので、ちょっと滑稽な名前です。彼女の炎にふさわしい名前に。でも問題は、彼女は話せないこと。そして、彼女の力は私が思っていたよりもずっと難しいということです。声帯を損傷しているため、彼女は口がきけないままです。彼女は火を操り、指先一つでジャングル中に野火を起こすことができるので、木々を燃やさないように黒い手袋をしています。私と同じように、レイカも両肩に赤いトカゲのような鱗があり、短い黒髪で、赤い目は閉じられています。水に触れると、濡れたものが落ちるととても弱ってしまいます。手足が濡れていると、火花を散らすことができません。でも、彼女にはもう一つ力があります。スーパーマンのような力で木を持ち上げたり、私たち3人を抱きしめたりできるのです。彼女の超能力は夜間にのみ発揮され、夜が明けると効果が薄れてしまいます。

トモカという名前は「素晴らしい友達」という意味です。トモという言葉は友達を意味し、そよ風に揺れる長い黒髪から、最も賢く美しい友達であることが多いです。彼女は自分で物を浮かせたり、バリアを使ってスパイクや銃弾から身を守ります。私たちとは違って、彼女は近視でボトルキャップ付きのメガネをかけています。メガネなしでは何も見えないからです。オタクっぽいメガネだけではなく、彼女の髪は長く黒く、肩には薄紫色の鱗があり、ユニークな尻尾と青い目を持っています。彼女はテクノロジーについて多くを知りませんが、奇妙な機械の使い方を学んだことは知っています。彼女はすべてが機能するように何かを作るためにたくさんの材料を集めましたが、最終的には、枝が折れたり、ウェブが外れたりするなど、うまくいかないことがあります。

最後に、一番年下のマナコ。彼女は一族の従者で、誰よりも明るい子です。マナは愛を意味し、コは子供を意味します。この二つを合わせると、彼女の名前は「愛する子供」という意味になります。彼女の特別な力は、生命を成長させ、自らの手で枝の爪を形成することです。オレンジ色のふわふわの髪、緑色の鱗、そして黄色い目は言うまでもありません。地面に触れる

と、蔓や枝が生えて敵を攻撃します。緑色の結界を作る時は、自分の周りの地面を棘のある球体に変えます。誰も触れたり、棘のある球体を動かしたりすることはできません。普段は、小さな庭で奇妙で美味しい果物を育てたり、野菜を育てたりしています。しかし不思議なことに、彼女は奇妙な虫とコミュニケーションをとることができます。レイカは虫が怖くて、それが苦手でした。

友だちになろうとする人間とは、決して接触したくなかった。中には、長年私たちを捕らえようとしていた黒装甲の兵士のように、悪い奴らもいるかもしれない。だから私たちは、どんな犠牲を払ってでも村から遠く離れた場所に身を隠していた。森は私たちの故郷であり、危険から身を守る場所だ。深い木々はいつでも私たちを隠れさせ、頂上まで登らせるのに絶好の場所だ。私たちはくノ一になるための訓練を受けた。私たちの宿命は、身を隠し、領土を守ることにある。

何年もの間、私たちは巨大な、古びた放棄された飛行機に住んでいました。その飛行機は、開いた穴に繋がれた、最も頑丈な木々と枝の間に挟まれていました。私たちが巣穴で休んでいる間、カエルの鳴き声と小さなホタルの光が夜空を照らしていました。

飛行機の鋼鉄はすり減っていて、ツルが周囲に生い茂り、古い壁に張り付いていた。ガラスは粉々に砕け散り、椅子のほとんどは場所を空けるために引き裂かれていた。辺りには骸骨が散乱していたが、私たちはそれを、人間のような何かが現れて襲ってくるという警告だと捉えていた。それでも、母がいなければ、私たちは決して死ななかっただろう。

「娘たちよ」と彼女は言った。「あなたたちは鍛冶場から戻ったわね。」

「ええ」マナコは嬉しそうに答えた。「ベリーとハーブをいくつか集めて、さらには悪党の人間たちを倒したのよ」

「娘たち、よく頑張りましたね」と母は言った。「あなたたちがどんな風に訓練されてきたのか、誰が熱心に聞いていたか知っています。だから、あなたたちがどうやってここまで成長したのか、お話ししましょう」

起源の物語は何度も聞いていたので、また聞けて嬉しかった。「忍者の技は速かったが、十代の心はまだ成長途中だ。我々はまだ影の中で生きている。君がどのようにして生まれたのか、その続きを聞かせてあげるよ。」

15年前、母が語ってくれた通り、ずっと昔のことですが、私たちは広島のそう遠くない研究所で卵子の中に生まれました。私はまだ幼くて孵化もしていなかったので、その研究所の名前は覚えていませんが、私たちを検査したいという人間の科学者グループによって、浜辺からここに連れてこられました。孵化する前から、私たちはとても冷たく産まれましたが、かつて友達だと思っていた人間たちが私たちを救ってくれました。彼らは私たちを受け入れ、小さくて柔らかい容器に入れて暖かくしてくれたのです。

出来事については何も覚えていませんが、私たちは実験室で、若くて親切な女性の目の前で検査を受けました。彼女は私たちを保温ランプの下で暖めてくれました。彼女は卵を一つ一つ丁寧にひっくり返し、反対側が冷えないようにして、私たちをしっかりと抱きしめてくれました。母は、この女性は美しく、私たちに愛情を示してくれたと言っていました。

この研究所は、未来の戦争に備えて奇妙な生き物の軍隊を作り、敵地で戦わせようと企む邪悪な幹部の所有物だった。科学者には二種類いる。白衣を着ているのは科学者で、そうでない者は未来的な黒い鎧「警備員」と呼ばれる服を着ている。警備員の仕事は、自分たちをスパイしている容疑者を捕まえることだ。

捕らえられた犠牲者は研究室に連れ戻され、科学者が彼らの血液に青い粘液を注入してグロテスクな動物の怪物に変えます。それらが十分に強ければ、彼らは訓練されて戦闘準備が整いますが、弱い場合は、血液を抜くために血液抜き機に送られ、この奇妙な光る青い粘液をさらに作ることができます。

この機械は、弱った兵士たちを中に入れ、ベルトで縛り付け、チューブと針で注射する。科学者が機械を起動させると、ミュータントから粘液を排出し、死に至らしめる。十分に弱体化した後、彼らは焼却炉に送られ、遺体を焼却される。残った粘液は、被験者をミュータント化させる場合に備えて保管されている。

母は鍛冶をしている間、兵士たちが私たちを捕まえようとしているのをずっと見ていました。私たちを見つけたとき、彼らが誰なのかは知りませんでしたが、兵士たちが私たちを探していたことは知っていました。青い粘液が私たちを創造し、それぞれのDNAの中には、私たちの動物界から作られた何千もの動物の血が含まれていました。動物界とは5つの異なる種の動物です。触ると、冷たく、温かい生地のように柔らかいです。ここに見える質感は明るく、内部で小さな泡が輝き、果てしなく漂っているのがわかります。

ある夜、私たちを育ててくれた若い女性科学者、クオロ・カナコが幹部の計画を耳にするまでは。彼女はモンスター軍団を解き放ち、全人類を滅ぼし、生きたまますべてを消し去ることで世界を征服しようとしていた。

カナコは幹部の本性を知り、プロジェクトへの参加を拒否した。証拠隠滅のため、彼女は研究室に火を放ち、化学物質を放出してすべてを燃やし尽くした。炎は建物全体に広がり、ほとんどの人命が失われた。それは実に恐ろしい出来事だった。

爆発で傷ついたにもかかわらず、母はなんとか私たちを抱き上げて川岸まで逃げ、私たちを小さな籠に乗せて川の流れに任せ、その後、カナコは黒装甲兵に撃たれて死んでいった。

母は警備員と、火災後に廃墟となった研究室で見つけた古い日記から、彼女の名前を私たちに教えてくれました。「カナコは勇敢な若い女性だった。あなたを守り、あんな風に安全な場所に連れて行ってくれたのに。悲しいことに、私は彼女に会って、あなたを救ってくれたお礼を言うことができなかった」

何日も経ち、私たちのかごは川を下り続け、浅瀬の岸辺に着きました。私たちは、暴風雨で赤ちゃんを失ったシマヘビに発見され、卵から孵った私たちは、ぬめりにまみれていました。

彼女は私たちを噛んだり飲み込んだりしようとはしませんでした。むしろ、私たちが爬虫類でもある最初の生き物だと気づいたのです。彼女の名前はイキオイ。力と精神を意味します。イキオイは私たちが孵化した時の泣き声を聞いて、雨の中で私たち一人ぼっちになっているのを見つけました。

彼女はゆっくりと籠を岸に引き上げ、尻尾を使って巨大な木の下の巨大な巣穴へと私たちを連れて行きました。蛇は好奇心旺盛でしたが、尻尾についた粘液に気づいたようでした。それがどこから来たのかは分かりませんでしたが、私たちを見捨てるわけにはいかないと悟り、私たちを育てることにしました。以前の子供たちを育てたように、私たちも育ててくれるでしょう。

翌朝、異変が起こりました。イキオイに腕が生え、体が大きくなったのです。まるで体の大きさが倍になったようでした。そして奇妙なことに、奇妙なハイブリッドパーツが発達し始めました。私は甲羅から白鳥の羽が生え始め、続いてレイカはコウモリの羽が生えました。マナコは顔の左側から緑色の突起が生え、切歯からは小さな猫のような歯が生えてきました。そして最後に、トモカは甲羅の下から大きなアホロートルの尻尾が生えてきました。

好奇心と現実に気づいた私は、イキオイが青い粘液が私たちを変えてしまったと言った。彼女は十分に大きくなったので、私たちが成長し続ける間、餌を得るために狩りをしなければならないだろう。私たちはとても甘えん坊で、食べ物を欲しがっては絶え間なく泣き叫んでいた。一年が経ち、イキオイはついに知能を身につけ、残りの私たちも自立し、完全に本来の大きさになった。私たちが完全に人間の特徴を示すようになったのは、本当に驚くべきことだった。

母は私たちを魅了しながら育て続けました。ある日、とても奇妙なことが起こりました。私たちのうちの一人が言葉を発したのです。初めての言葉です。すぐに私たちは皆、言葉を話し始め、完全な文章を完成させ、ついにお互いに話せるようになりました。

大変なことになって、巣穴に長くいるのは無理でした。というのも、私たちは大きくなりすぎたからです。そこで、もっと広い場所を探して森へ行き始めました。そして、放棄された飛行機を見つけて、それが私たちの家となり、よりモダンな空間になりました。

私たちはそれぞれに個性と運命を与えられている。私は水の中から海の生き物たちの音を聞き、それがどこへ導くのかを辿ることができた。マナコは夜明けとともに花が咲く音を聞き、手から一輪の花を咲かせることができる。レイカは、たとえそれが彼女の力でかき立てられるほど大きな炎であっても、火傷することなく手に持つことができる。そしてトモカは、周囲に奇妙な紫色の泡が生まれ、あらゆる物体を浮かび上がらせる間、瞑想することができる。

母は私たちを育てながら、研究室が焼け落ちて以来誰もこの建物に入ってこなくなったものを持ってきてくれました。母は、本やビーカーなど、私たちに合うものをいくつか見つけてくれました。

いきおいは私たちに訓練を始め、不思議な能力、魔力の使い方、そして制御の仕方を教えてくれました。スーツケースの中にあったとても古い日本の忍者修行書を使って、くの一になるための訓練を教えてくれました。武器を使わない方法、武器を使う方法、隠密行動の方法、そして何よりも重要なのは、瞑想によって忍者と一体になることなど、実に様々な方法がありました。

森を守り、悪者と戦い、地面に落ちたものを探し、服を探し、食べ物を探し、そして森の一員となる。私たちみんながやらなければならないことはたくさんあります。私は長男だったのでリーダーの役割を任され、妹たちは私の指示に従っていました。

しかし、私たちの力は完全に制御不能です。母は私たちに、魔法の力を使って人間に危害を加えてはいけないと言い、私たちは自分の力を制御し続けました。

私たちはチームとなり、英雄となる運命を約束されました。

「あなたたち一人ひとりはそれぞれに違うのよ」と母は言った。「知識、強さ、心、そして平和を分かち合う必要があるの。外の世界は危険よ。だから、外の世界の危険に気を付けなくちゃ。」

それが私たちの母の教えです。森の中では用心深く、優しい忍者、穏やかで平和な戦士でいなければなりません。これが私たちの森での生活なのです。

第2章

満月が森を優しく照らし、穏やかに光を放っていた。空にはきらめく彗星が横切った。家族と私は苔のベッドで眠り、穏やかな風に吹かれながら掃除をしていた。全身を苔に包み込まれ、片手を頭に当てていた。冷気がどんどん強くなり、肌が冷たく感じられた。

突然、近くで何か大きな音がした。私は驚いて目を覚まし、飛び起きて慌てて家の中を見回した。爆発のような音が響き、心臓がドキッとするほどだった。音はすぐ近く、しかも家からそれほど遠くない外から聞こえてきた。一体何の音なのだろう？姉たちもその音に驚いて目を覚ました。混乱し、驚いた様子だった。

「ねえ、お姉ちゃん」マナコはあくびをして、黄色い目を手でこすった。「今の音は何？」

音がどこから聞こえたのか確かめようと、窓の外を見てみると、頭上の森の向こう側から黒い煙が噴き出しているのが見えた。それほど遠くはなく、母が私たちを見つけたのと同じ湖からだった。

私たちはいつも、人間が「スイマー」と呼ぶ魚を狩って、食料としてここに持ち帰っています。姉たちもそれに倣い、あの音はどこから来たのかと不思議に思いました。「さあ、調べてみよう」と私は言いました。

私たちは、生い茂ったツタを頼りに、古い飛行機から降りて地面まで降り始めた。ツタはきしみ、うめき声を上げていたが、それでも私たちを導いてくれた。地面に降りると、煙の跡を辿り始めた。裸足で歩くと、森の床は柔らかく感じられ、木々の下からは月光が輝いていた。

茂みをかき分け、姉妹たちを道へと導いた。水源に近づいているのがわかった。岸に近づくにつれて、空気がかなり煙っぽくなってきた。湖の岸辺に着くと、足元に崩れ落ちたクレーターが見えた。そこには、黒く焦げた何かがあった。

「あれは何なの？」マナコは身をかがめながら尋ねた。「岩？」

智香が先に進み、ゆっくりとクレーターを降りて石を拾い上げ、注意深くその特徴を調べた。淡いピンク色の光を放ち、とても持ち運べないほど大きかった。ひっくり返すと、その重さは1トン近くあった。「まるで空から落ちてきた石みたい」

「家に持ち帰ってどんなものか見てみたほうがいいかもしれないね」とマナコさんは提案した。

「だめよ」と私は断った。麗花はうなずき、この石が危険だと同意した。「持って帰るわけにはいかないわ！お母さん、どう思う？」

「家に持ち帰るしかない」と智香さんは主張した。

ため息をつきながら、トモカが大きな石を運ぶのを手伝うしかないと悟った。私は石の端を掴み、持ち上げた。みんなで支えながら、石を持ち上げ、家まで引きずりながら運び、枕の上に置いた。石は思ったよりずっと重かった。1トンくらいあった。

息を整えた頃、母が私たちを呼び止めて説明を求めた。大きな音が聞こえて岸辺の岩を発見し、ここまで引きずり上げなければならなかった時のことを話した。イキオイは光る岩に滑り込み、しばらくじっと見つめていた。

「面白い石ですね」と彼女は言う。「でもどこから落ちてきたのですか？」

「空から来たのよ」マナコが声を上げた。

「あの石が何であれ、どこかから来たに違いない」とトモカは言った。「どこから来たの？どうして地球に落ちてきたの？」

「宇宙から推測しているの？」とマナコは推測した。

「馬鹿げている」と私は言った。「あの岩がどこから来たのか、私たちには分からない。」

「待って！」母が私たちを止めた。「私の考えが正しければ、この石は私たちにメッセージを送っているのよ。星が地球に落ちてきて4人に力を与えるという予言が現実になったという夢を見たのよ。」

「予言？」私は困惑しながら尋ねた。「どうしてそれが本当なの？」

「私は決して間違っていなかった」と彼女は言った。「それが私たちの運命だった」

その時、レイカが何かに気づき、私たちに見に行くように合図した。石にはピンク色のひびが入っていた。とても小さく、カブトムシほどの大きさだった。「あのひびはあの石には入っていない」と私は思った。地面に落ちた時にひびが入ったのだろうか？そんなはずはない。ゆっくりと石が揺れ始め、動き出した。私たちは驚いて後ずさりしたが、石が孵化していることに気づいた。

亀裂は広がり始め、ついには完全に割れてしまいました。私たちは目をそらし、明るい光から目を守りました。光が落ち着くと、岩が孵化しているのが見えました。

その岩の中には、人間の手のひらほどの大きさの小さな生き物がいるようだ。昆虫のような羽根が二つあり、その先には虹のように色づいた妖精のような髪型が続いていた。その生き物はピンク色の布で覆われ、それを支えている小さな緑の蔓が胴体に巻き付いていた。彼女は真っ白で、人間の小さな手足を持っていた。その生き物は身動きをしてゆっくりと目を開け、虫の目のような二つの巨大な紫色の空洞を見せた。

「わあ！」マナコは喜びの声を上げた。「本当に不思議な虫だね！」

「私は妖精よ」と、意識を取り戻すと彼女は言った。彼女はその感覚を振り払い、私たち全員に目を向けた。「あなたたちに会えるなんて信じられない。あなたたちこそ私が探していた人たちよ」

「私たちを探しているの？」私は戸惑いながら尋ねた。小さな生き物をもっとよく見ようとかがんだ。羽の生えた妖精と話しているなんて、なんだか不思議で奇妙な気がした。巨大な空洞は巨大で、両目の紫色の強膜だけがそれを隠している。「あなたは誰ですか？なぜ空から落ちてきたのですか？」

「落ち着いて。全部話してあげるわ」と彼女は言った。「私の名前はリンク・ミュウ。銀河を救うために魔法戦士の守護者を探しているの」

「どの銀河？」トモカは言った。「あなたを見たことがないし、魔法戦士って何なの？」

「みんなに信じてほしいの。人類はそれにかかっているのよ」と彼女は言う。「妖怪界のどこかで、邪悪な女が人間と妖怪を捕らえてミュータント化した妖怪の兵士に変え、人類を滅ぼそうとしているの。それだけでなく、地球全体を滅ぼすつもりよ！」

「何？」智香は息を呑んだ。「妖怪界が危機に瀕しているの？」

「ええ」リンは頷いた。「その通り。遠い昔、妖怪はどこか別の世界で平和と調和の中で暮らしていました。その時、妖怪が現れ、全ての妖怪を捕らえ、行く手を阻む全てを破壊するディストピア的な世界を作り上げました。人類は捕らえられ、時間とともにミュータントへと変えられていくでしょう。生き残るものは何もないのです。」

「彼女はどうやってそんなことをするの？」イキオイは心配しながら彼女に尋ねた。

「よく分かりませんが、私は少女たちを力強い戦士へと変えるためにここに召喚されました」と彼女は言った。「女神女帝が私を地球に召喚し、少女たちを助けるよう命じたのです。」

「それは私たちのことですか？」私は困惑しながら尋ねました。

「ええ」妖精はうなずいた。「世界を救えるのはあなたたちだけでしょう。でも、私の助けなしには生きていけません。この世界には戦士が必要なのです。」

「戦士とは何なのか私には理解できない」とマナコは言った。

「とても長い話です。魔法戦士たちは、かつて大地を守り、世界を悪から守り、そして悪を助けてきたのです。妖怪の女神は、宇宙を守るために戦士を必要としていました。だからこそ、私はあなたたちを戦士へと導く訓練を受けたのです。もちろん、あなたがたが協力したいというならですが。」

「本当？」私は息を呑み、元気を取り戻した。「私たちに手伝ってほしいんですか？」

「そうだ。この世界では戦士が減っている。だから、君を助けるためにここにいる。妖怪界を救うために、君に何かをあげよう。」

彼女は魔法を使ってハート型のブローチを4つ作り、私たちの手に渡しました。私のブローチはピンク、姉妹たちは緑、緋色、ライラック色でした。肌の下は冷たく、そしてとても強く、まるで自分の存在がそれを吸収しているように感じました。

「これは何ですか？」私は手の中のキラキラ光るハートを見下ろしながら尋ねた。「ブローチ？」

「これはあなたのハートクリスタルよ」と彼女は説明した。「『ハーフハートヒーロー！』って言うだけでスーパーヒーローに変身できるかもしれないわ。そして、それを起動すれば、パワーが得られるのよ」

最初は小さなブローチを見つめて戸惑いました。もし効果があったら、ブローチに触れた方がいいのでしょうか？少し不安でしたが、勇気を振り絞りました。「一体どういうことなのか分かりませんが、試してみましょう。」

それを胸に当て、軽く叩き始めた。すると、鮮やかな色の光が私たちを包み込んだ。私は驚きのあまり息を呑み、魔法が体中に広がるのを感じた。私の体全体が、ゆっくりと明るい布で覆われ、生命を吹き込まれたかのように花開き始めた。自分の体が浮き上がり、形を成し、予想以上に明るく輝き始めたのを感じた。

目を開けると、白いフリルのチュチュを着ていました。肩には青いシースルーの肩パッド、胸には青いクロップトップ、そしてハート型の宝石が二つ付いていました。腕には白い長袖を着ていて、手のひらの甲にはハート型の宝石が二つ付いていました。髪は鮮やかな青色に変わり、

ポニーテールにまとめられ、頭にはティアラが飾られていました。ティアラの周りは金色の装飾で、その上にはピンクのハート型の模様が綺麗に飾られていました。よく見ると、姉妹たちも同じように変身していました。

マナコの髪は大きなお団子にまとめられ、頭にはティアラ、首にはネックレスが付けられていた。ゆったりとした緑色のドレスには、肩に白い肩パッドが付いていた。トモカはライラック色のドレスに長い葉っぱを飾り、おさげの髪をリボンで結んでいた。そしてレイカは、黒い袖のノースリーブドレスに金色のブレスレット、そして赤い花のクリップで留めたヒーローのような髪型だった。

「そのドレス、すごく似合ってるわ！」リンクは嬉しそうに笑った。「あなたたちはまさにこの任務にふさわしい戦士よ。」

「信じられない！」マナコは、新しく変身したドレスを見て、嬉しそうに声を上げた。「私たち、すごく可愛い！」

「私の髪、本当に好き」と智香は、黒い髪が横に流れるのを感じながら言った。「すごく派手に見える」

「私たちは戦士だ！」私は嬉しそうに叫んだ。

「もちろんよ」とリンは微笑んだ。「その魔法の力は、あなたの旅を助けてくれるわ。シーラは水を操る力、レイカは火を起こす力、トモカは物を浮かせたり物理法則を使ったり、マナコは生命の植物を育てたり、他にも色々できるのよ」

「娘たちは本当に世界を守る覚悟ができているの？」母は心配そうにリンに尋ねた。「というか、まだ娘たちを手放す覚悟ができていないのよ」

「大丈夫よ」とリンは言った。「魔法が始まったら、お互いを信じることだけが必要なのよ」

生尾井は蛇のような目を心配そうに輝かせながら、私たちを見ていた。彼女の顔つきとは裏腹に、世界を救うために世界を旅させてくれるかどうか、私には不安だった。結局、リンの言うことは真実だった。妖怪界は危機に瀕しており、私たちはそれを救うために協力する必要がある。

「お嬢さんたち」と母は私たちの方を向いて答えた。「あなたたちが旅に出たら、とても危険なことになるわ。これから私たちの故郷では未知の世界に入るのよ」と母は警告した。「これから先にあるどんな危険にも気を付けて。怪物や人間、その他の罠が待ち受けているわ。お嬢さんたち、衛兵に捕まっちゃダメよ。彼らはあなたたちを襲って捕らえようとするわ。でも、この妖精があなたたちに力を与えたの。お嬢さんたちは、その力を使って戦うだけでいいの。私はよくあなたたちに教えたわ。今度はあなたの番よ。妖怪の世界を救って」

私たちはうなずき、母に頭を下げた。これは私たち二人の初めての旅。妖怪界を助け、邪悪な女による世界征服を阻止するためだ。

「それで、妖怪の世界についてですが」と私は話し始めた。「どこにありますか？」

「川辺へ向かわなきゃ」とリンは言った。「そこは妖怪の世界へ通じているはずよ。私も一緒に行くわ」

希望が喜びに満たされ、私は頷いた。「さあ、荷造りを始めよう、みんな」荷物を掴み、荷造りを始め、ドアから出て行った。私たち全員にとって、これからは長い旅になるだろう。行く手を阻む困難やモンスターに立ち向かうことになる。

「頑張ってね、お嬢さんたち」と母は手を振りながら言った。「この先に罠が潜んでいるわ。敵と戦う必要があるなら、ブローチを使って変身して戦えばいいのよ」

「もうすぐ戻りますよ、お母さん」と私は叫びました。

「きっとそうしてくれるわよ」と彼女は言った。

姉たちと二人で、慎重にツタを降り、リンの後を追って小道を進んだ。リンのきらめく光が森の奥深くへと続く道を照らしてくれた。辺りは朝のような活気に満ち溢れておらず、とても静かで穏やかだった。

ようやく立ち止まり、空き地にある池と、その周りを囲む四つの石を眺めました。キラキラと輝く美しい水面の中央には、巨大なピンクの蓮の花が咲いていました。それは本当に大きく、まるで柔らかくて温かいベッドで眠っているかのようでした。

「巨大な蓮があるとは一度も言わなかったわね」とマナコは言った。

「あれは蓮よ。妖怪の世界へ導いてくれるの」とリンは説明した。「ポータルを起動するには、石を押す必要があるの」

「本当にそこに行けるの？」マナコは尋ねた。

「もちろんよ」リンは頷いた。「この石のところへ行ってボタンを押すだけ。あなたの力を認識して、妖怪の世界への扉が開かれるわ。これから大きな旅が始まるのよ」

妹たちがそれぞれ他の子たちのところへ行っている間、私は石のところへ行きました。下を見ると、ボタンにシンボルが描かれているのが分かりました。花の形をしていて、とてもユニークで美しいものでした。私はそっと手を伸ばして押しました。妹たちも同じように押しました。魔法の粉が蓮の花の周りを舞い、私たちの周りで魔法が渦巻き始めました。

蓮の花が開き、魔法のような青い扉が現れました。その青い扉の中に、何かが見えます。世界全体が色とりどりの木々で彩られ、空はどこまでも青く、光はピンク、赤、黄色に輝き、まるで魔法のように、まるで生きているかのようでした。

「何年も使われていないみたいね」リンはくすくす笑った。「心配しないで。すぐに妖怪の世界に行くわ。さあ、行くわよ！」彼女はポータルへと飛び始めた。中に入ると、私は本当に少し怖かった。でも、準備はできている。私たちは世界を救うために新しい世界へ旅立つ。そして、希望と平和をもたらすのが私たちの運命なのだ。

第3章

マナコ視点。

分かるだろ？謎の粘液によって生み出されたミュータント、母蛇に発見されて森で暮らし、くのーになるための訓練を受ける。えっと、私の場合は？孵化したばかりの頃には、森での生活に慣れていた。姉妹たちと14年間、隠れて暮らしていた。森の生き物たちと意思疎通し、生命を操る魔法の力を持っていると知った時、私の中に思いやりが芽生え始めた。

ほら、まだ孵ったばかりの頃、森で迷子になったの。姉妹たちを見失うんじゃないかって、すごく怖かったの。好奇心が勝っちゃって、お母さんと離れて旅をするなんて。すごく怖くて、辺りをうろついてた。木々がまるで恐ろしい怪物みたいに見えたの。

たくさんのフクロウやコウモリに驚かされ、沼に落ちて泥だらけになってしまいました。でも、動物たちの群れに慰められ、家まで連れて行ってもらいました。その時から、動物好きが芽生え始めたんです。

ある出来事が起こるまでは、私たちの人生は完璧でした。私と妹たちは、リンク・ミュウという謎の妖精に召喚されました。世界征服を企む邪悪な女のせいで世界が危機に瀕していると警告されたのです。リンは、空から降りてきた妖精の女神に召喚されたと言いました。リンは、私たちが戦士の力を解き放つために召喚されたのだと言って、ハート型のとてもユニークなブローチをくれました。

「ハーフハートの勇者！」って言うだけで、魔法の衣装が手に入ったり、髪がふわふわになったりするんです。体中に力が巡る感覚は全くなくて、本当に驚きました。

姉のシーラは、水の生き物を理解する能力と、翼の力で空を飛ぶ能力を持つため、水を操る力を得ました。次女のレイカは、木の皮を燃やすことで火を操ることができます。しかし残念ながら、森中に火を撒き散らすことはできません。次女のトモカは、浮遊とテレポートができるプラズマ魔法の力を得ました。私は、植物や生命を操る力を得ました。普段は良い子で、ツタを育てているのをご存知ですよね。

でも、私の名前は実はマナコなの。ほら、愛しい子って意味よ。植物を作ったり、茂みから新鮮な果物を集めたり、とっても優しい子だったの。でも、それだけでなく、大きな花を咲かせる力も

持っていたの。でも、私たちの服は形を成して、とっても可愛くなっちゃった。信じられる？ごめん、ちょっと興奮しすぎちゃった。リンが妖怪界を滅亡から救うために先導してくれて、私たちは妖怪界への旅に出発したの。

湖に浮かぶ魔法の青い蓮を抜けて森に入ると、リンは私たちを奇妙な妖怪の森へと案内し始めました。紫色に輝く光が蛍のように空を舞っていました。何もかもが奇妙で、妖怪の世界は本当に美しいです。

空には鳥のような奇妙な妖怪がたくさんいて、森には陸に棲む妖怪が隠れていて、手の届かないところに村があると言う人もいる。きっとこれが妖怪の世界なんだろう。リンが私たちに話してくれた時の、まさにその姿だったんだと思う。

「さあ、みんな！」彼女は私たちの目の前を飛びながら宣言した。「ようこそ、妖怪ワールドへ！」

「こんなものは見たことがない」と私は叫びました。喜びで心が躍りました。私たちが見渡す限り、奇妙な木々が沢山あり、空は明るいピンク色でした。

「こんなに広い世界は見たことがないわ」とシラは新しい場所を見回し、叫んだ。「私たちはまるで違う世界にいたのに、それに気づかないなんて。」

「これは本当に素晴らしい発見ですね」智香は、よく見えるように眼鏡を調整しながら微笑んだ。

「あまり興奮しすぎないで。この旅は大変なことになるわ」とリンが飛んできて言った。リンの表情は険しく、興奮しすぎないようにと告げている。「ブロック状の城に行くなら、まず村に向かわないといけないわ」

「ブロックのお城って何？」と私は尋ねた。どうしても知りたいことがたくさんあった。なぜなのかも。妖怪ワールドの真ん中にブロックのお城？まさか妖怪ワールドのどこかにそんなお城があるとは思ってもみなかった。

「海の端、ビーチがあるところだと思う。C.L.I、コズミック・ラボ・インダストリーって書いてあったのを忘れてたよ。」

「C.L.I?」シラは首を傾げながら尋ねた。

「ああ。モンスターがたくさんいるだろうけど、気をつけないと。途中で村にいくつか立ち寄る予定だ。」

「分かりました」私は頷きながらつぶやいた。

妖精はシーラの肩に飛び移り、「先導してください、お嬢様」と言った。リンが姉のことを「お嬢様」と呼ぶのには、かなり驚いた。まるで愛人のような呼び方だ。シーラは微笑みながら、私たちを小道を案内し、キノコ林へと導いた。

道を歩きながら、妖怪の世界の隅々まで観察し、じっくりと眺めました。色とりどりの毒キノコが鈍い光の中で輝き、もっと大きなキノコの頭からは雫が滴り落ちています。まるで私たちが蟻のように小さくなり、キノコが雨から身を守るシェルターのようでした。

眼下の地面は柔らかく紫色で、湖は海のような緑色。小さな虫が花々の周りを飛び回っていた。私は昔、花が大好きだった。私の世界では、桜のように木に咲く花しか知らなかった。ひどく甘い香りがして、その蜜の味は強烈で、それを感じさせるほどだった。

「あのキノコ、すごく大きいね。跳ねて乗れそう」とトモカはキノコの一つを見つめながら驚嘆した。

「遊びに来たんじゃないわよ」とシラは厳しく注意した。「C.L.I.そのビルを探しに来たのよ。きっとこの辺りのどこかにあるはずよ」

茂みから何かカサカサという音が聞こえたような気がしたので、立ち止まり、何か隠れている生き物を探し当てました。すると、確かに隠れていたのです。見た目はホッパーに似ていましたが、耳が長く、口が大きく、目が二つ小さく、とても…小さく見えました。犬くらいの大きさでした。

「それは何？」智香は困惑しながら尋ねた。

「あれはただの妖怪だよ」とリンは微笑みながら言った。「全く無害だよ」

「うーん」レイカは小さなホッパー型の生き物を見つめながら、息を吐いた。

「そうだな、もしそのグルコケアが無害なら」と私は切り出した。「それなら、きっと攻撃してくるはずだ」

「グロケットって言うの？」トモカは尋ねた。

「え？私、名前を付けるのが得意なの？」まさにその通りだった。私には、一見違いそうな生き物にニックネームをつける才能がある。

私が名付けたニシキチョウは、ピョンピョン鳴いてから飛び去り、茂みの中に姿を消しました。妖怪たちに出会えたのは嬉しかったのですが、もし遭遇したら、もっとたくさんの妖怪に出会えるようです。

それはかなり簡単だった。妖怪の世界のC.L.Iまで長い旅をするのが、みんなを自由にする方法だ。

「C.L.Iって誰だか分かりますか？」と私は尋ねた。「建物の中にいる人ですか？」

「何か暗号みたいなものよ」とリンは言った。「実は私、C.L.I.に来たことないの。あなたたちに会うために召喚される前、女神皇后は邪悪な女によって妖怪のエネルギーが全て吸い取られて、重病にかかっていたの」

「女神は病気なの？」シーラは息を切らして言った。

「ええ。彼女はもうすぐ死ぬので、本当に大変な思いをしたんです。だから私を地球に送ってあなたに会わせる必要があるんです。」

「それで、なぜ私たちを戦士にするためにここに来たのですか？」と智香は尋ねた。

「世界を救うために、リンは君たちの助けを必要としていた。もし誰も世界を悪から救えなかったら、全てが滅びてしまう」とリンは優しく言った。妖怪の女神に起こったことを、私はとても悲しく思った。彼女はひどく苦しんでいた。そして、リンをここに送って、私たちと一緒に世界を救う手助けをしてくれたのだ。「もし私たちが世界を救うなら、君たちは何を願うの？」

「大変だったよ」とため息をついた。「道中で友達ができるかもしれないって思ってたんだ。もう何年も森の中にいるんだから」

「もしかしたら実現するかもしれないね」リンは微笑みながら言った。

突然、叫び声が聞こえ、私たちは立ち止まってしまいました。

「ねえ」シラは、その声が聞こえた方へ向き直りながら話し始めた。「聞こえた？」

周りを見回したが、そこには何もなかった。

「空き地から聞こえてくるような気がする」とトモカさんは音がどこから聞こえてくるのかを見ながら言った。

あの叫び声は恐ろしいもので、誰かが助けを必要としていたことは分かっていました。急いで茂みに駆け寄り、そこで見た光景は衝撃的でした。空き地で、一人の人が襲撃者の集団に襲われていたのです。

それは青いドレスを着た白い鳥で、宝石のような小さな醜い生き物、宝石のような目をしたゴブリンに襲われていた。ピンク色で青い目、長い耳、長い鼻、そして紫色の宝石のような歯を持ち、歯はぎざぎざでゴツゴツしていた。

「彼女を助けて、あの害獣を止めなければならなかった！」トモカは自分が困っていることに気づき、叫びました。

「待って！」攻撃する前に、シラが叫んだ。「彼女が友好的かどうかは分からない。C.L.I.と協力関係にあるのかもしれない。」

「覚悟はできていたと思っていたのに」とリンは言った。「それに、この無実の鳩が襲われているんだから」

「じゃあ、行くわ」私は頬を膨らませながら抗議した。「こんな風に彼女を死なせるわけにはいかない」

他に選択肢がなかったので、シラはすぐに私たちに、手遅れになる前に彼女を救うように命じました。

私たちは突撃し、ヒーローの姿に変身して攻撃を開始した。私はツタを召喚し、ゴブリンを数体蹴り倒した。彼らは爪を研ぎ澄まし、私に攻撃を仕掛けてきた。輝くクリスタルをかわしながら、殴り倒し、私の植物の力で吹き飛ばした。

「認めざるを得なかった」と私は言った。「そんなにひどい顔じゃないわ」しかし、私は間違っていた。ゴブリンが私の頭に直撃し、私は叫び声を上げた。よろめきながら逃げ出し、引っ掻かれたが、なんとか宝石ゴブリンを掴んで巨大キノコに投げつけ、気絶させた。

トモカはゴブリンの一匹にひどい噛み傷を負ったが、そのゴブリンはトモカの物理攻撃でそれを吹き飛ばした。シラは髪を掴んで飛び上がり、白い翼と水滴をゴブリンの顔面に叩きつけた。レイカはゴブリンに飛びかかり、炎で吹き飛ばし、群衆の中へと切り裂いた。

ふと見上げると、リンが空を飛んで私たちの戦いを見守っていた。彼女は私たちの戦いをとてもよく見ていて、ゴブリンと戦うのは初めてだった。ゴブリンに捕まりそうになった時、彼女は素早く逃げた。

突然、ゴブリンが一匹背中に飛びかかり、私は息を呑んだ。私はそれを振り払い、宝石に突き刺した。ゴブリンは悲鳴を上げた。自分がやったと思ったシーラはゴブリンに飛びかかり、目の宝石を割ってしまった。

数匹の宝石ゴブリンが、水晶の目が砕け、血に染まり、敗北した。彼らは苦痛の叫び声を上げながら、踵を返し、茂みの中へと退却していった。私たちは皆、長い間そこに立ち尽くしていたが、やがて静寂を破る音が聞こえてきた。

「みんな」と智香は言った。「ゴブリンたちが逃げてるわよ」

「やったわ」シラはため息をつき、息を切らしながら言った。「止められたのよ」

まさか宝石ゴブリンを全部止められるとは思ってもみなかった。妖怪との初めての戦闘はこれで終わりだ。ほっと一息ついたと思ったら、鳩の少女が怪我をして意識を失って地面に倒れていた。どうすればいいのか分からず、彼女の遺体の周りをぐるぐる回り始めた。

「これからどうすればいいんですか？」と私は尋ねました。

「彼女を置いていくわけにはいかない」リンはそう言いながら、ぐったりとした少女の方へ飛びかかった。「もしゴブリンたちが戻ってきたらどうしよう？」

レイカは、見知らぬ人を家に連れて帰っていいものか迷いながら、あざ笑った。

「無理よ」と智香は断った。「彼女を連れて行くわけにはいかないわ」

「いや、いや。リンの言う通りだ」シラはリンクの意図を理解し、言った。「彼女を宿屋に連れて行こう。近くの村にあるかもしれない」

彼女は手を伸ばして鳩を抱き上げ、息をするたびにうなり声をあげながら、鳩を腕の中に抱き上げた。鳩を抱きかかえたまま、シラは先導してキノコの森を後にした。

全身がひどく痛み、引っかき傷や噛み跡だらけで、髪はバサバサで、すっかり元の姿に戻っていました。本当に疲れ果てていましたが、町に戻ればきっと良くなるでしょう。

「みんな」リンは心配そうに提案した。「少し休んだ方がいいかもね」

「私たちは大丈夫よ」シラは言った。

「心配しないで」と私は言った。「大丈夫だよ。ウミガメは人間よりも早く回復するから。」

丘を下り、橋を渡ると、村への標識が見えたので立ち止まりました。「シュルームビル」と書いてあり、とても素敵な村のようです。村はまるで巨大な木立のようで、家々が立ち並び、明かりは光る石でできています。地面にある家のほとんどは、苔の洞窟や小屋でできています。すべてがまるで故郷の森のように、まるで生きているかのようでした。

村の中に入ると、キノコや妖精、植物の生き物たちがいっぱいいるのが見えました。きっと歓迎してくれるだろうと思っていましたが、不思議なことに、彼らは私たちではなく空を見上げていました。

「なぜ妖怪たちは私たちに挨拶してくれないのですか？」と私は尋ねました。

「もしかしたら、女神の病と関係のある自然災害と何か関係があるのかもしれないわね」とリンは言った。彼女は私たちに黄色い空を見るように合図した。「だって、空を見て。あの植物を見て」私たちは下を見下ろした。ゆっくりとしおれ始め、腐りかけている花々。

「かわいそうな植物たち」私は、朽ちかけた花びらに触れながらため息をついた。「一体何が起こっているの？」

「本当にひどい」と、近くのキノコ人間が叫んだ。「私たちの町は。原因が分からず、空飛ぶ妖精の隣人たちは飛ぶのに苦労している。植物は枯れ、家さえも枯れていく」

「どんなトラブルですか？」リンは住民に尋ねた。「何か悪いことでも起きたんですか？」

「分からない。何もかもが枯れ果てていて、誰が私たちを追い出そうとしているのか、全く分からなかった。」

「きっとC.L.I.でしょう」とシラは言った。「ご心配なく、お嬢さん。私たちが彼らを阻止します。そうすれば、あなたの土地は元通りの花を咲かせることができるでしょう」

「頼ってください」と私は微笑んで言った。「妖怪界を破滅から救うためにここにいるんです」

「あなたたち、どうするの？」キノコ娘は甲高い声で頭を上げた。彼女の目には希望が溢れ、家が元通りになったことを嬉しく思っていた。「あら、ありがとう。あなたたち、最高よ」

住民の一人に何が起こっているのか尋ねたところ、旅行者などが頻繁に訪れる木の穴に掘った宿屋を見つけることができ、とても嬉しかったです。

宿屋の主人に料金を支払い、近くの部屋に入ってゆっくりした。シーラは鳩を巣に置き、目が覚めるのを待った。レイカは私たちの傷を治すのに十分な量のバンダと、咲いているベリーをいくつか集めてきていた。それを潰して粘液状にし、傷口に塗って感染を防ぐ。それから包帯を巻いてくれた。

「そのベリーはどうやって使うんですか？」とリンは尋ねた。

「お母さんが教えてくれたのよ」と私は言った。「あのベリーを食べると傷が早く治るって言ってたのよ」

「その傷が付いてから随分経ったのね」妖精は頷いた。「でも、どれくらいの期間その傷があったのかは分からないわ、シラ」

「まあ」シラはため息をついた。「私も孵化したばかりの頃からそうだったのよ」

「それで、すぐに回復するわ」と私は言った。「夕食を作るわ」私は立ち上がり、調理台へ向かい、温かいスープを作り始めた。まず宿のメニューをチェックして、それから作り方を覚え始めた。

シラはしばらく鳩の体から目を離さず、頭を撫でていた。トモカはテーブルの上に神秘的なオーブを見つけた。近況を母に報告しようと、シラは思った。シラがオーブに手を当てると、オーブは光り輝き、波紋を起こし始めた。その光景の中に、母の姿が浮かび上がった。

「娘たち、元気だった？」

「ああ、順調よ」と智香は満面の笑みで説明した。「妖怪の世界を見て、いいスタートを切ったわ。罪のない鳩の妖怪を傷つけようとしていた邪悪な宝石鬼の集団を止めたばかりよ」

イキオイは、苔むした中で大切に世話されている鳩を見つめた。「傷は深いけれど、きっと大丈夫だと思う。きっと相当ショックを受けたんだろうな」

「ゴブリンの襲撃で兵士たちから逃げられたのかもしれない」とリンは推測した。「理由は分からないが、誰かがあの獣たちを召喚して彼女を襲わせたに違いない」

「心配しないで」シラは静かに彼女を安心させた。「すぐに回復するのを手伝います」

「わかった」と喜びに胸を躍らせた。「きのこスープを作ったの」スープの入ったボウルをテーブルに出し始めた。スープは独特のスープで、色とりどりの小さなきのこ、野菜、肉片、卵が入っていた。私はあんなものを作ったことがないのに、姉たちはなぜか少し気に入ってくれる。私が料理が上手だったって、みんな知ってる？

鳩の女の子は、私たちがC.L.I.にどうやって行くかという話をした数分後に目を覚ましました。私たちを見ると、彼女は言いました。「あなたはホーメンガメさん！想像もしていなかったわね？」

「いいえ」とリンクは言った。「あなたは安全です。私はリンク、妖精の守護者です。ウミガメたちが宝石ゴブリンからあなたを救出しました。」

私たちは、卵から始まり、お母さんが私たちを見つけた経緯をすべて彼女に話しました。鳩にその一部始終を話すと、彼女はとても感心していました。「わあ、とても奇妙な話ね。あなたたちがみんなミュータントで、妖怪じゃないなんて知らなかったわ。私の名前はアナスタシアよ」と彼女は言いました。

「それで、アーニャ」とシラは話し始めた。「あの小鬼たちにどうやって追いかけられたの？」

「サリー・スネーク・アイズという、とても敵対的な蛇女に襲われていたんです。彼女は宝石ゴブリンを召喚して私を襲わせ、何かを盗んだんです」と彼女は説明した。

「サリー・スネーク・アイズ？」智香は眼鏡を直しながら尋ねた。「彼女は誰だったの？」

「彼女は卑劣で冷酷なハンターで、妖怪を捕まえては、どこかの研究所で売っていました」と彼女は語り始めた。「彼女は、珍しい生き物を売り飛ばし、戦争に利用しようとする何者かと共謀しています。何か恐ろしいことが起こっていて、それは生きた悪夢になりつつあります。」

「そういうことなんですね」リンはため息をつき、頭を下げた。「妖怪が密輸業者に捕らえられて、武器として売られているんです」

「サリー・スネーク・アイズのキャラクターを止めなければならなかった」と私は言った。

「彼女の隠れ家がどこにあるか知っていますか？」シラは彼女に尋ねた。

「そうだと思うわ」と彼女は答えた。「クリスタルケーブのどこか、トンネルの奥深くにあるの。暗くて怖くて、とても危険なの。ジェムゴブリンが住んでいるところよ」

「ゴブリンの洞窟に入らなければならなかったんですか？」私はショックを受けて尋ねました。

「心配しないで」シラは肩に手を置いて安心させた。「取り戻すわ」彼女は決意に満ちた表情で私たちの方を向いた。「明日からクリスタルケーブへ行って、アーニャの大切な宝物を救い出すのを手伝うのよ」シラの命令に、私たちは皆頷いた。母がシラハラを選んでくれたのは嬉しかった。彼女は年上だからね。でも、明日は私たち二人で初めての敵に立ち向かうのよ。

第4章

翌日、私たちは外に出てクリスタルケーブスへ向かう準備を始めました。敵は手強いので、万全の準備が必要です。母は忍者の道、つまり悪と戦い敵を倒す術を教えてくれましたが、これほどまでに熟練した、非常に強い敵に出会ったことは初めてでした。それでも、アーニャの頼みを受け入れるしかありませんでした。彼女は私たちの助けを頼りにしているのです。

今朝目が覚めると、トモカが、アーニャが失くした謎の物体のような、行方不明の物を追跡できる装置を作ったと言っていました。姉は本当に優秀な発明家なので、シラは彼女が用心深い時はいつでも彼女を信頼していました。

ケープを首に巻き、フードをかぶっていると、冷たい風がひんやりと吹きつけました。まるで風が叫び声をあげ、私たちを足元に叩きつけそうなほどでした。

「気をつけてね」アーニャが私たちに呼びかけた。「サリーはすごくずる賢いから」

「きっと大丈夫よ」とシラさんは彼女を安心させるように言った。

私たちは森へ戻り始め、小道をずっと進んで目的地へと向かいました。アーニャが洞窟への地図をくれたのはありがたかったです。

「ここの角を曲がるところよ」とトモカは装置を手にしながら言った。小さな物体がピピッと音を立てて、もうすぐ洞窟に着くことを知らせている。「こっちだよ。途中で手がかりを探しましょう」

「最近、モンスターをよく見るわ」と私は呟いた。「もちろん、もっと大きなモンスターがいても怖くないわ。私たちが怖くないって…それは…」洞窟に着いたのを見て、私は話をやめた。

洞窟はまるでトンネルの奥深くへと続く入り口のようでした。ゴブリンの顔がこちらを睨みつけていて、かなり怖いです。それを見ていると、だんだん怖くなってきました。モンスターの洞窟は本当に怖かったです。

すごく怖くて暗くて不気味だったので、入るのを怖がりました。「この洞窟には絶対入らない！」と両手を振りながら抗議しました。

「マナコ」シラは眉をひそめ、私の貝殻を掴んで引き戻した。「私たちならできるわ。アーニャは私たちに、何かを救うというこの任務を託してくれているのよ」

中に入るのが怖かったので、洞窟の中に入り、何があるのか確かめるしかありませんでした。私たちは慎重に洞窟の入り口へと進み始めました。中はとても暗かったのですが、レイカは手から炎の火球を放ち、道を照らしてくれました。

今では、私たちが入ってきた入り口は小さな白い点に過ぎず、私たちは暗い洞窟に囲まれている。辺りがどんどん暗くなり始めると、不安で心臓がドキドキし始めるのがわかる。

下を見ると、地面に小さなゴブリンの足跡が残っていて、トンネルの奥深くへと続いています。あたりは真っ暗で、水晶だけが唯一の光源です。水晶はランダムな色に輝き、まるで虹のようにぼんやりと壁を照らしています。巨大な岩の塊が道を塞いでいるのを見て、私たちは立ち止まりました。

「道が塞がれています」と智香は言った。「どうすればいいの？」

「なあ、レイカ」リンは思いついたように言った。「拳で岩を砕けるだろ」

レイカは頷き、腕を上げて道を塞ぐ岩を殴りつけた。岩は辺り一面に飛び散り、地面に散らばった。頭上を数匹のコウモリが飛び交う中、私は叫び声を上げて頭を抱えた。本当に恐ろしい。

角を曲がると、切り立った崖の上で100匹もの小さな宝石ゴブリンが眠っていました。まだ私たちに気づいていませんでしたが、姉は静かに私と他の皆に、音を立てずに付いて来るように合図しました。岩の端から覗き込むと、洞窟の奥に通路がありました。「きっとこの先にあるはずよ」と姉はささやきました。「さあ、行きましょう」

私たちは彼女の後を注意深く追いかけ、音の出る岩につまずかないように気をつけた。体が激しく震えていたが、智香が手を握って私を落ち着かせてくれた。少なくとも少しは気分が良くなった。宝石ゴブリンの一匹が鼻を鳴らすのが聞こえた。

崖の上の壁の前に隠れたんだけど、そこで彼らは嗅ぎ回ってた。匂いがしなくなると、また眠りについた。もしかしたら、彼らの鼻は私たちの匂いを嗅ぎ分けるのが下手なのかもしれない。私たちは森に住んでいたから、カモフラージュはお母さんから教わったことなの。すごくクールでしょ？

再びシーラが先頭に立ち、宝石ゴブリンの縄張りをすり抜け、無事に洞窟から脱出しました。宝石ゴブリンが目を覚まさなかったことが本当に嬉しかったです。

洞窟の周りを探検していると、アーニャが彼女を殺して丸焼きにしようとしていると言い、私は私たちの噛みつきは彼女の噛みつきよりひどいと断言しました。すると突然、シラが「静かにしていなさい」と言いました。

一体何が起こっているのか分からず、少し混乱していたのですが、奇妙な光る目が見えました。まるで海岸でキラキラと輝く色とりどりの貝殻のようですが、恐ろしいことに、それは先ほど遭遇した宝石ゴブリンのもので、彼女と出会ったのは彼女でした。

サリー・スネーク・アイズ。彼女はウミウサギのように滑らかで、イタチのように賢い。バタフライナイフを振り回しながら、そこに立っていた。

「まあ、あなたは私と戦うためにここまで来たのね」彼女はニヤリと笑った。

「もちろんよ！」シラは言った。「アーニャのために何かを取り戻すために来たのよ。」

「あの貴重な戦利品？」彼女は小さな檻のようなものを手に持ち、それをぶら下げながら尋ねた。「まあ、サリー・スネーク・アイズには勝てないわね。私は最後まで主君に仕え、あなたたち

全員を捕らえて差し上げます」彼女はニヤリと笑い、こう尋ねた。「小さな海の娘たちよ、私を恐れているの？」

「私たちは怖くない」と白原は勇敢に宣言した。「あなたを止めるためにここにいる」

「そうだな、そうするならお前を滅ぼしてやる」

スーパーヒーローに変身して、戦闘開始。私はツタを使ってナイフを何本か叩き落とし、姉たちは鋼鉄の鋭い刃をかわした。トモカは岩をいくつか浮かせ、サリーが召喚した宝石ゴブリンを数体倒し始めた。

レイカは炎のスキルを使って竜巻を巻き起こし、サリーの顔面を殴りつけた。サリーは苦痛に呻きながら、宝石ゴブリンを召喚して攻撃を開始した。

再びコブラが私たちに向かって飛びかかってきた。シラは必死に抵抗し、毒のある牙をかわし、唾液が飛んでこないように努めた。

周囲には宝石ゴブリンがうようよしていた。麗華は宝石ゴブリンに燃え盛る火の玉を投げつけたが、ゴブリンは彼女の包帯を剥がそうとした。智香は猛烈な火の玉に捕まり、背中に飛び乗ろうとした。智香はうなり声をあげながらゴブリンを殻から引き離し、バリアで身を守った。

小さな宝石ゴブリンが足を噛もうとしているのを感じた。ひどく痛かった。鋭い歯が皮膚に食い込んでいた。私はただそれを振り払い、洞窟を横切って地面に落ちていくに任せた。

爪はかなり鋭かったが、とにかく弱かった。サリーが私に激突し、私は無理やり彼女の鱗状の皮膚に歯を食い込ませ、爬虫類の体を押しのけた。もう手に負えなくなっていた。もうこれ以上戦えないと感じ、私たちは後ずさりした。

「ゴブリンが多すぎるよ」と私は言った。

「シラ、私たちに何ができるの？」トモカは尋ねた。「いつまでも戦い続けるわけにはいかないわ。」

姉はどうすればいいのか、一生懸命考えていた。ふと思い出しました。アーニャが、水晶を割ると目が見えなくなるって言ってたんです。姉は、水晶が目なんだと期待して元気を取り戻しました。

「アーニャが言ったことを覚えておいて」とシラは言った。「目を狙って。」

頷きながら、私は宝石ゴブリンの顔面を蹴り、彼らの目を砕いた。他の姉妹たちも同じように、魔法の力で宝石ゴブリンに襲いかかった。結晶は彼らの皮膚にひび割れ、地面を砕き散らし、皮膚に突き刺さった。彼らは苦痛にシューシューと音を立て、割れた宝石を握りしめながら頭を抱えた。その音はあまりにも痛々しく、思わず耳を塞いでしまうほどだった。

岩の上の振動音が崩れ始め、そして崩れ落ち、サリーを含む宝石ゴブリンたちを押さえつけ始めた。幸運にも、岩が私たちに当たる直前に、私たちはなんとか逃げることができた。落ち着いてみると、サリーは押さえつけられていて、檻はまだ無傷だった。

「女の子の集団にだまされるなんて信じられない！」彼女は息を切らして言った。そしてついに気を失い、ぐったりと倒れた。

息を整えながら、白は彼女の手から檻を引き抜き、床に置いた。私たちは檻の周りをぐるりと回り、中に何が入っているのか気になった。智香が蓋を開けると、中には小さな蛇が顔を覗かせていた。小さな黄色い角とピンクの毛、黄色い体、青い目と先端が一本ずつ。小さなノコ妖怪だった。

「アーニャが探していたのはこれか」とシーラは悟った。「檻から出してあげよう」彼女は腕を伸ばして箱から小さな蛇を拾い上げた。キーキーと鳴きながら、ノコ妖怪は姉の頬を舐めた。

「彼女は本当に私たちのことが好きだったと思う」私は微笑んだ。

「自由になって、すごく嬉しかったんだろうね」と智香は言った。「サリー・スネークアイズは世界中で妖怪を捕らえて、この妖怪を盗んだに違いない」

「どうして妖怪を捕まえるの？」レイカが隣を歩きながら、シーラが尋ねた。

「彼女はミス・シャドウサイドに仕えていたと言っていたわ」とリンは推測し、檻の上に降り立った。「もしかしたら、彼女のために働いていたのかもしれない。でもまずは、この妖怪を飼い主の元へ返さないと」

私たち全員も彼らに同意し、向きを変えて入り口から出て歩き始めました。

長い散歩の後、なんとか宿に戻ることができました。最初のお願いは見事に叶い、サリー・スネーク・アイズからアーニャのペットを救い出しました。部屋に戻ると、アーニャが巣の上に座って、まだペットのことを心配していました。

「ただいま、アーニャ」とシラは鳩の注意を引いて言った。「そして、きっとこれがあなたが探していたものよ」喜びの鳴き声を上げながら、ノコはアーニャの腕に飛びついた。アーニャは愛鳥の姿を見て驚いた。

「信じられない！オリを助け出したのね」彼女はペットを抱きしめながら嬉しそうに叫んだ。

「私たちは、あなたに断るわけにはいかないので、あなたのペットを取り戻すお手伝いをすると約束しました」と私は満面の笑みで認めました。

アーニャは喜びに溢れ、翼で涙を拭い始めた。こんなに幸せなアーニャを見たのは初めてで、今にも泣き出しそうだった。「ありがとう。あの恐ろしい蛇女からオリを救ってくれなかったら、こんなに感謝することはなかったわ。」

「サリー？」智香は尋ねた。「毒のあるビターなのに、簡単に倒せたわね。」

「でも、彼女は自分を創造した主人に仕えていたと言っていたわ」とシーラは考え込んだ。「怪物を創造した主人？」

「そう思うわ」と彼女は言った。「でも、一人で旅を続ける必要はないの。寂しくならないように、しばらくここにいた方がいいわ」

「本当に大丈夫ですか？」と私は尋ねた。

「私の小屋に来てください」と鳩は私たちを招いた。「あなたたちと同じくらい町を助けてきたスーパーヒーローの少女たちがいるなんて、光栄です」

私たち全員が言葉を失いました。私は今まで一度も誘われたことがなかったので、彼女の申し出を受けることにしました。宿を出て、彼女は私たちを木の上にある小屋に連れて行きました。小屋はとても広かったのですが、私たちのほとんどは飛べません。特に私とレイカとトモカは。シラが私たちを迎えに来て、3往復して小屋まで飛ばしてもらいました。

瞑想したり、夕食にスープを作ったり、今まで食べたことのないような簡単なことをたくさん始めました。友達が餃子まで作ってくれました。

アーニャは、C.L.Iを作った謎の女が妖怪を捕らえ、洗脳して自らのミュータント軍団に仕立て上げていると話し始めた。私たちは話の一部始終とアーニャの言葉に衝撃を受け、謎のC.L.Iと軍団を作ろうとする女に嫌悪感を抱くようになった。だからサリーに妖怪捕獲を命じたのだ。いずれにせよ、もしあの謎の女が軍団を作り始めたら、世界は滅亡してしまうのではないかと危惧している。妖怪が死に絶え、女神が病気になった理由も説明がつく。誰かがすぐに彼女を止めなければ、世界は滅びてしまうだろう。

「アーニャ、そんなことはさせない」とシラは誓った。「必ず彼女を始末する」

しばらくして、アーニャが私たちの寝床用のネストベッドを作ってくれました。おかげで旅を続けることができました。とても快適で柔らかかったので、寒い中では眠れそうにありません。

夜明け前に、リンは旅を続ける時間だと告げた。出発しようとしたその時、アーニャが私たちを止めた。

「ペットを連れ戻してくれたことに、ただただ感謝したいです」と彼女は言った。「オリは長い間私の最愛のペットでした。あなたのおかげで、彼女と再会することができました。」

「女の子たちに感謝してあげて」とリンは言った。「彼女たちは妖怪界を助け、救うのにとても尽力している。C.L.I.とシャドウサイドに終止符を打つつもりよ」

鳩は頷き、彼女の言葉を理解しました。「きっとそうしてくれるわ」彼女は手を伸ばし、箱詰めのボウルらしきものを差し出しました。「お腹が空いた時のために、食料を少しと、手裏剣もいくつか詰めておきました」とアーニャは言いました。「それから、もし連絡が取れる時のために、このオーブも用意しました」

彼女の申し出に心から感謝しました。荷物をまとめ、アーニャに別れを告げ、助けを必要とする妖怪たちを救うための長い旅に出発しました。

第5章

リンの視点

生まれて初めて、私は霊界で生きていることしか知らなかった。そこは、妖怪の女神によって作られたミュスの守護妖精たち、私の友達全員が住んでいる場所だった。ある日、女神が重

病に倒れるまでは。彼女は、妖怪界で何か恐ろしいことが起こっている、邪悪な力が台頭し、妖怪たちを捕らえ、女神自身も重病になっていると私に告げた。

妖怪の女神は、妖怪たちが平和に暮らせる世界を創造したと言い、世界を救う戦士たちを探すように私に頼みました。彼女の魔法の玉を覗くと、森の中に4匹のウミガメが見えます。それが私が捧げるべき目標です。彼女は私にハートの水晶を与え、私の周りに水晶の岩を作り、地上へと送りました。

ウミガメたちに見つけてもらい、全てを説明できました。幸運なことに、この仕事にぴったりの人材を見つけることができ、私たちは妖怪の世界へと向かっています。

友人たちを森へと導いている間に、月は既に空に沈みかけていた。私たちは既にシュルームビルを離れ、妖怪たちが潜む危険な道へと向かっていた。螺旋状の枝葉が風に揺れ、葉の周りを冷気が漂っていた。

すごく不安になってきた。夜に歩くのは危険だ。まず、誰も何も見えないし、どこを照らす明かりもない。それに、どんな怪物が現れて襲ってくるか分からない。振り返ると、友達が後ろについてきていた。

先ほどのサリー・スネーク・アイズとの戦いで、かなり疲れているようだ。もう旅を続けるには弱りきっているのではないかと心配していたが、体の傷はすぐに治るだろう。

「全員」と私は大声で答えた。「今夜はここで休んだ方がいいわ。このまま旅を続けるのは無理だと思うわ」

シラは敗北感にため息をついた。きっと私の言うことを聞くしかなかったのだろう。それに、夜は何も見えない。シラは姉妹たちの方を向き、「わかったわ。今夜はキャンプを解散しよう。明日すぐに次の町へ向かうわ」と言った。

ため息をつきながら、女の子たちは皆、森の真ん中にある小さな空き地で休憩を始めた。レイカは焚き火を起こすための薪を集め始め、マナコはツタを小屋にして、それぞれが寝られるようにし始めた。とても順調に進んでいた。宝石ゴブリンを数体倒し、クリスタルケーブでサリー・スネーク・アイズを阻止して、アーニャのペットのノコ・オリを救出した。

夜空はすっかり静まり返り、優しい夜の妖怪たちの鳴き声、鳴き声、遠吠えが夜空に響き渡っていた。唯一静けさを感じたのは、夜空に角を灯すユニコーンと、地面を照らす色とりどりの花々だけだった。少なくとも今のところは、朝が来るまではここで安全に過ごせそうだ。

午後からずっと自信に満ち溢れているシーラに目を向けた。ピンク色の瞳は喜びに輝き、見渡す限り笑顔が広がっていた。戦いのせいなのか、アーニャと仲良くなったせいなのか、私には分からなかった。何か言わずにはいられなかった。

「ねえ」とウミガメの注意を引くように言った。シラは私の方を向き、下を向いた。「アーニャのペットを救ったなんて、本当に勇敢だね。あなたとお姉ちゃんたちはそんなに悪い子じゃないわよ」

シラは頭を上げて、言葉に合わせて羽を羽ばたかせた。「ありがとう。母さんは忍者の道をたくさん教えてくれたの。まだ幼虫の頃から始めたの。母さんのおかげで、私たちはしっかり訓練できた。たとえ力を持っていても、それを抑えるのは大変だったわ。私たちが力を習得し、人間から身を隠すようになるまで、それぞれ少なくとも14年かかったの。母さんは私たちにたくさんのことを教えてくれたし、私が長女だった頃からリーダーに選んでくれたの。森の中で平和に暮らしていたの。人間が来て襲ってくることもなかったのに」しかし、その時、彼女の顔が少ししかめっ面になった。「でも、私たちはこれまで旅をしたことがないの。幼い頃から、ジャングルからあまり出ていないの。衛兵が私たちを追っているのは、私たちの血が特別なものだからよ、と母さんは言っていたわ。もし見つかったら、何をされるかわからないわ」

彼女は長いため息をつき、青い髪が暖かい風に揺れた。ジャングルにこんなに長い間隠れていたと聞いて、私はとても不安になった。私たちの間には悲しい緊張感があるけれど、あなたが長い間心の中に閉じ込めていたら、私たちの気持ちを伝えるのはとても難しかった。

白原が再び口を開くまで待った。「リン、君がここに来た時、君のような友達はいなかった。君のおかげで妖怪界を救うことができた。おかげで僕たちは力を得た。サリー・スネーク・アイズを止め、アーニャのペットも救えた。僕たちは本当にヒーローになりつつあるし、みんなに好かれている。本当にありがとう、リンク」

言葉を失った。翼が光の中できらめく中、麗華が腕に抱えた薪を抱えて戻ってきた。彼女が薪を地面に置くと、ガチャガチャと音が鳴った。それから炎を召喚し、薪に火を点けた。こうして焚き火が始まった。マナコとトモカは既に小屋の設営を終えており、その様子に気づいた。

「火がついたわね」マナコは微笑みながら、私たちと一緒にキャンプファイヤーに近づいてきた。「よかったわね？」

私はうなずいた。燃えさしが赤橙色の光の周りで揺らめき、光の中で際限なく揺らめいていた。それはとても色鮮やかで、熱く、暖かく、まるで青や紫や緑ではなく、他の色しか見えないようだった。まるで朝日と夕日を見ているかのように、目の前にありながら、とても熱く、色鮮やかだった。冷えきった体を温め、気分がずいぶん良くなった。

「火事を見たことがないの？」と智香は彼女に尋ねた。

私は首を横に振った。巨大な虫のような目は、まだ輝く光を見つめていた。「ううん…一生無理。」近くの岩に飛び降り、膝をついて体を丸めた。「私は地球にも妖怪界にも行ったことがない。霊界で生まれたの。」

「精霊界？」智香は好奇心に満ちた目で首を傾げながら尋ねた。

「精霊界は、妖怪の女神と共に、全てのミュウたちが暮らす場所です。巨大な星の群れの下に、彼らの姿を見ることができます。」私は指を空の上へと向けた。星々が海のように散りばめられていた。「ほら、私はここで生まれたの。精霊界は、きらめく星々のすぐ向こうにある美しい天国よ。そこには何千人ものミュウたちが住んでいて、まるで私と同じように小さな妖精のようだった。皆、それぞれの世界で私たちを見守ってくれていたの。特に妖怪の女神はね。」

「ところで、彼女はどんな風に見えたの？」マナコは腹ばいになって尋ねた。

「ああ、彼女は美しかった」私はうっとりとため息をついた。「青い絹の着物を着て、日本の仮面で顔を隠している天使のようだった。髪の大部分は星雲のように長く、濃い青い目をしていた。彼女は世界で最も美しい女神だった」しかし、私の記憶は、そもそも私が霊界を去った時の悲しい瞬間へと漂い始めた。「しかし、彼女が病に倒れた時、正体不明の呪いが入り込み、すべてを食い尽くし始めた。妖怪の女神は私の周りに水晶の岩を作り、私を遥か遠くの地球へと送り、霊界で私の残骸はすべて石に変えてしまった。

姉たちは皆、とても心配そうで、私への共感の表情を浮かべていました。私の起源、女神と石に変えられた友人たちの話を聞いて、彼女たちは衝撃を受けていました。

「それで、あなたの友達は全員石になってしまったの？」マナコは尋ねた。

「ええ」私は頷いた。「本当にひどかった。たくさんのミュウが石に変わってしまい、今は私だけが残されている。だから、ここで生きていかなければならなかったんです」

他の友達は皆、私の話を聞いてすっかりショックを受けていました。特にマナコは、私と友達に起こったことを心から気の毒に思い、涙を拭いながら、泣きそうにならないようにしながら、深呼吸をしました。

「しかし今、私には君たちがいる。そして我々はC.L.Iを完全に止めることができるのだ。」

「本当にそこに着くの？」とトモカは尋ねた。

「そうするよ」と私は答えた。少しの間落ち着きを取り戻し、今も私を悩ませている記憶を振り払おうと努め、立ち上がった。「C.L.I.はほんの数マイル先だから、朝になる前に着くよ」

シラはうなずき、希望が再び湧き上がり、徐々に疲れを感じ始めた。「わかったわ」とため息をついた。「このまま次の町へ向かおうかしら」

姉妹全員が同意した。小屋へ向かい、中で横になり、眠りに落ちた。私は一晩中、その場から離れていた。友達がいつまで自分たちの場所へ向かい、世界を救うのか、ずっと考えていた。空を見上げると、星々はまだ黒い虚空にきらめいていた。

霊界でかつて住んでいた場所を思い出し始めた。霜星雲は、かつて私たちが歩いていた場所だ。私たちが観察した惑星、そして私が見下ろしてきた世界。私は、かつて知り合った最も親しい友人の一人と親しく、彼らの名前も覚えていた。そして、呪いが友人たちを飲み込み、石に変えた時、私はここに送られたのだ。

ため息をつき、頭を下げて、冷静で切実な声で独り言を言った。「妖怪女神様、私にできるかどうか分かりません。仲間たちは順調なスタートを切っていますが、どれくらい持ちこたえられるか分かりません。あの女は諦めるつもりはなく、血を求めて護衛を送り込んでいます。彼らが彼らを捕まえるまで休むことはないでしょう。」

階段がゆっくりと形を成し始め、妖怪女神の姿をとらえた。長い黒髪が宙を舞い、顔の下には白い狐の仮面が被せられていた。希望に満ちた青い瞳で私を見つめ、穏やかで優しい声で言った。あまりにも長い間、その顔を見覚えがあったので、涙がこぼれそうになった。

「心配する必要はありません、リンク」と彼女は静かに言った。「彼女たちは旅の途中で強くなるでしょう。あなたがこの少女たちを見つけ出し、戦士へと育て上げたことを誇りに思います。彼女たちが世界を救うことができるよう、あなたはこれからも導き続けなければなりません」

答えが何か見つかるかもしれないと空を見上げていると、とても穏やかな気持ちになった。妖怪の女神の温もりと光はいつの間にか消え去り、背筋が凍るような感覚を覚えた。私が新しい仲間たちを妖怪界の助けとなり、戦士へと育て上げようとしているという彼女の言葉は、まさに正しかった。私が歩み続ければ、彼らは真の英雄となるだろう。

「旅を続けなさい、リン」と彼女は言った。「あなたは友達のところに戻っていいわ。私は心のままあなたと一緒に行くわ」

彼女の姿は消え、静かな森は静まり返った。友達たちを眺めながら、ずっとたくさんの友達が欲しいと思っていたけれど、その願いが叶った。

第6章

シラの視点

旅の次の目的地はヨバイビルです。シュルームビリーの宿屋からそれほど遠くない街です。近くの町ほど田舎町ではありませんが、リンが説明してくれた通り、かなり大きな街でした。私たちは幼い頃から、森の外にある人間の村以外、街を見たことがありませんでした。しかし今、私たちは街に入り、目の前に広がる本物の街を目にするのです。

妹たちと、どんな感じなのか気になっていました。伝統的な？現代的な？まあ、きっと着いたらすぐにわかるだろうと思っていました。アーニャは、妖怪の世界は広大で、遠くの雪山や深い海底の王国があり、形も大きさも違うたくさんの妖怪たちが共存していると教えてくれました。でも、妖怪たちは人間の世界に行くことはなく、伝統的な祭りの時だけ行くそうです。

アーニャがペットと再会できて本当に嬉しいです。もしペットを失ったら、きっとひどく落ち込んで気が狂ってしまうでしょう。ほんの数日前、お腹が空いた時のために、アーニャは食料を少し用意してくれていました。今日はC.L.I.に着くまで旅を続けます。

目的地に近い街へ向かうことは既に母に伝えてあるんだけど、きっと大きな街になると思うの。だって、今まで大きな街に行ったことがなくて、ずっと森の中で暮らしてきたから。でも、ちゃんとした村に入るのは初めてなの。

「もうすぐ洞窟を出て、ヨバイビルに入るはずよ」とリンが教えてくれた。「迷子になりそうなほど大きな街だよ」

「ヨバイビルは何で有名だと思いますか？」マナコは興味深そうに尋ねた。

「ああ、なかなかいい街ね」と妖精が口を挟んだ。「素晴らしい劇場や商店街で知られていて、まるで地球外の人間みたい。昔、妖精街は陸地だったの。妖怪たちがここに連れられて、共用エリアで街を建設し始めたの。最初は木造だったけど、その後、観光客が増えて、より近代的で活気のある街になったわ」

「この街は人気があるに違いないって言うのよ」とトモカは言った。「世界でも最も人気のある街の一つよ」

「そうだね。きっとすぐに到着すると思うよ。」

希望に満ちた目で洞窟を下り続けた。人気の街が見えて、本当に興奮した。森での暮らしはよく知っていたが、街は私たちの街よりもはるかに大きかった。洞窟を抜けて次のエリアへ向かうと、すべてが完全に廃墟になっていることに気づいた。

智香、真奈子、麗香と私は誰か来るかと思っていたが、誰もいなかった。辺りは静まり返っていた。私たちの興奮は一変し、失望と困惑の表情になった。

壊れた小さなロボットが散乱し、通りは閑散としていた。電気はすべて消え、店は木の板で覆われ、劇場は完全に閉まっていた。まるで幽霊のように、彼らは仕事を中断して跡形もなく消えてしまったかのようだった。この場所には特に刺激的なことは何もないことに、私たちは皆、不満げに眉をひそめた。

「そうだとしたら」智香は辺りを見回し、疑わしげに尋ねた。「みんなどこにいるの？」

街を見つめながら、長い沈黙が流れた。妖精はためらいがちに私の肩から降りて飛び立った。「わ、わかんない。夜会ビルって明るい場所のはずなのに」とリンは緊張して汗ばんだ声で言った。「でも、こんな風にはならないわ」

「みんなどこにいるの？」マナコは尋ねた。彼女は前に進み、建物を一つ一つ見て回ったが、明かりは消えていた。まるで誰かが使い古して消した、薄暗いマッチ棒のようだった。「ここには妖怪はいないわ」

麗華はため息をつき、真奈子のオレンジ色のふわふわした髪を引っ張りながら引き離した。

「この街に一体どんな悲惨な出来事が起こったのだろう？」私は頭を掻きながら考えた。

「さあ、わからないわ」と智香は言った。「まるでゴーストタウンみたいね」

「本当に冗談じゃないの？」私はリンに尋ねた。

「違います！」と彼女は抗議した。「この町は昔は活気があったのに。」

「じゃあ、ちょっと街中を探検してみるか」と智香は言った。私たちは街に何が起こっているのかまだ気になりながら、通りを歩き始めた。

最初の村は妖怪の住人で溢れ、彼らの命の源である生命の源によって町は滅びつつあった。ところが今、街には妖怪の住人は一人もいない。辺りは空っぽだ。以前は賑やかなキノコ村だったが、愛する花やキノコの家、そして葉っぱはC.L.Iの襲撃で枯れてしまっていた。街に着くのが遅すぎたのかもしれない。まだ生きている人がいるか辺りを探したが、音も影もなく、人影も見当たらない。まるで廃墟のようだった。

悲鳴が聞こえて振り返った。マナコは後ずさりして、小さなグロケットがシューという音を立てて飛び跳ねながら逃げていくのを見た。「くそっ、グロケット！」と彼女は叫んだ。「どうしていつもこうなるの？」

麗花は口を覆ってくすくす笑い始めたが、私は冷笑しながら彼女を睨みつけた。

「ここには妖怪の住民が何人かいたはずだけど、誰も見つからないわ」とリンはため息をついた。

「よかった」と私はため息をついた。「本当にもったいない。もうすぐ日が沈んで、街も真っ暗になってしまう」街中を何時間も探し回った後、手の上の太陽はまさに沈もうとしていた。どうすればいいのか、全く分からなかった。

街を出ることだってできるけど、次の村に着く頃にはもう暗くなっちゃう。ここにいた方がいいんだけど、建物は全部板で塞がれてるし、親切な人なら誰も入れてくれないんじゃないかって心配なの。

月が昇る前に寒い中、外で寝なければなりません。

突然、「おい！こっちに来て！」と誰かが呼ぶ声が聞こえました。

声が聞こえたような気がして、私たちは立ち止まった。振り返ると、骨董品店の路地の近くで、妖怪が店の入り口から顔を出していた。「戻ってくる前に中に入って」

彼ら？誰？彼女を信用できるかどうか分からなかったが、どういうわけか、彼女は本当にいい人だった。私たちは中へ入り、秘密の地下室へ、そして階段を下りて階段へと向かった。埃っぽい古い床へと降りていくたびに、彼らはとても低い軋みと唸り声を上げた。

地下室には古い箱がいくつかと、天井からぶら下がっている電球が一つだけありました。埃っぽくて、鼻をくすぐる程度でした。埃を吸い込まないように口を覆い、辺りを見回しました。家具が数点とマットレス、そして机があるだけでした。

「まさかお前みたいな奴がこんなところに降りてくるとは思わなかった」妖怪は安堵のため息をついた。彼女は青いカエルの妖怪で、装飾品を身につけ、奇妙な仮面をかぶっていた。まるで部族の風貌で、まるで私たちと同じように荒野から来たかのようだった。長い脚、大きなカエルの目、大きな口、そして甲羅がないせいで、私たちよりも背が高く見えた。

トモカは、あの小さなニベは両生類だと言っていた。時々私たちを両生類と間違えるけど、私たちは爬虫類よ。「あのロボットたちが街をめちゃくちゃにした後で、生き残れた人がいるなんて信じられないわ。」

「どんなロボット？」と智香は尋ねた。

「それで、街を汚すってどういうことですか？」マナコは尋ねた。

「ロボットだ」カエルはかすれた声で言った。「大混乱を引き起こし、人々を捕らえ始めた。生き残ったのは私だけだった。忘れていた。私の名前はピピミだ」

「では、お会いできて光栄です」と私は丁寧に頭を下げながら言った。「私たちはハーフハート・ヒーローチームです。C.L.I.を阻止するために向かっています」

「何が起こったのか教えてくれませんか？」リンは彼女に尋ねた。「みんなどこにいるの？ なぜ街は無人なの？」

「私たちは隣町のシュルームビルを目撃しましたが、すべてが衰退しつつあります」と私は件名に付け加えました。

「ああ、大変ですね。この町で起こったことは残念です。まあ、すべてはずっと前に始まったんです」とピピミは椅子に座り、私たちが彼女の話を聞き始めたとき、話し始めた。かつてヨバイビルは活気に満ち、住民で溢れ、街灯は灯り、喜びに満ち溢れていました。街のすべてが平和でした。精霊、妖精、悪魔、動物の姿をしたモンスター、そして様々な種族が共存していました。しかしある日、ロボットが人々を誘拐し、街を襲撃し、誰もが跡形もなく消え去ってしまいました。ほとんどの人々はアパートに隠れていましたが、数人は装甲車に乗せられ、ブロック状の建物へと運ばれ、そこで仕事をしていました。私は安全を確保するために店に隠れました。外に出てロボットがいるかどうか確認するのが怖かったのですが、どうしてもできませんでした。身を隠し、生き延びるためには缶詰と水を探さなければなりませんでした。もしロボットが襲ってきたら、念のため下水道に隠れて店に戻りました。他の生存者たちは、外にロボットがいるからと、アパートから出るのが怖くてたまらなかったのです。

残りの私たちはそれを聞いて完全にショックを受けました。シュルームビルは未知の物質によって枯れてしまいましたが、ロボットに攻撃された街はこれまで以上にひどい状況でした。

「まだ生き残った人はいますか？」マナコは尋ねた。

「ロボットに復讐したい人が一人いるのよ」とピピ美は言った。暗闇から現れたのは、青いバンダナを巻いたトカゲの妖怪だった。彼女も私たちと同じように爬虫類で、青い鱗と薄い下腹部を持っている。両目は緑色で、蛇のように細く切れ長の瞳孔を持っている。「こちらはカイダ。ロボットと戦うためにここにいるの。街の外れにこっそり潜んでいるのを見つけたから、私のシェルターに連れてきたの。彼女は街で一番のエージェントみたいなものよ」

「皆さんにお会いできて嬉しいです」と彼女は言った。「私はあらゆる方法を知っていますし、あのロボットたちから簡単に逃げられます。彼らが何を企んでいるのか、どんな策略を練っているのか、真実を知りたかったんです。」

「ロボットと戦ったことはなかったわ」とトモカは言った。「宝石ゴブリンの集団とサリー・スネークアイズと戦ったことはあったけど」

「彼らはとても好き嫌いが激しく、見た目も醜かった」とマナコは、私たちが戦ったゴブリンのことを今でも覚えている。

「それは彼らがとても賢くて、あらゆる戦闘技術を熟知しているからだ」とトカゲは言った。「彼らを倒すのは至難の業だ。君たち以外に、一般の妖怪でロボットを倒せる者はいない。君たちはロボットと戦えるほどの力強いくノ一戦士のようだ。彼らには彼らを無力化する弱点があり、それは水だ」

「私の水の力は役に立つかもしれない」と、私は手の中にできた水滴を見せながら言った。「それに、背中の翼で飛べるんだ。そうすれば、奴らを侵略できる」

「面白いわね」カイダは尻尾を振りながらニヤリと笑った。「あなたの力、役に立つかもしれないわね」

「それで、私たちはどうなるの？」と智香は尋ねた。

「あなたの力は役に立つでしょうが、大したことではないかもしれません。あなたは自分で制御できる力があると言ったので、それは簡単です。」

「まあ、あなたが私たちに協力してほしいなら、私たちは受け入れます」とリンは言った。

「よかった」ピピピは微笑んだ。「明日から、あなたたち女の子たちは街に出て行くのよ」

地下室は暖かくて気持ちよかったのですが、少し狭く、慣れるのに少し時間がかかりました。ピピミは二階へ行き、寝るための毛布と布団、そして暗闇でも見えるようにランタンを持ってきてくれました。とても快適で、落ち着いて過ごせました。夕食にはスープもいただきました。量は多くなかったのですが、味は薄かったです。ロボットが屋台を荒らし回っているので、お店ではスープが手に入らないと言っていました。

「なあ、開田」と私は切り出した。「この町の妖怪はどうなったんだ？いなくなったのか？」

「この街の妖怪たちに何が起きたのか知りたいかい？」と開田は答えた。「殺されたのではなく、連れ去られたんだ。C.L.I.にいる。全員生きているけど、檻の中に閉じ込められている」彼女はまだ悲しそうに頭を下げた。「なぜ住民が捕らえられているのか、私にはわからない。

「それではどうすればいいでしょうか？」

「C.L.I.を破壊する方法を見つける必要がある」

「それは簡単だ」と私は言った。「工場を破壊すればいい」

「でも、まだみんな閉じ込められてる」とトモカは言った。「C.L.I.を破壊する前に、みんなを解放できないの？」

「それはいい選択肢だ」と私は言った。「まず、この場所を完全に燃え上がらせる何かが必要だ」

「えっと」と智香は話し始めた。「ガスタンクの一つに高圧がかかっている。もしかしたら導火線に引火して全部燃え上がるかもしれない。妖怪を全部解放したら、C.L.I.は爆発するだろう」

「それはいい考えかもしれない」とカイダは言った。「でも、君たち5人にとっては、とても長い旅になるだろうね」

「その通りね」とため息をついた。「今から備えておくべきだった。姉たちに何も起こらないようにするわ」 かなり眠い。でも、そろそろ寝る時間だと分かっていた。布団にくるまり、ゆっくりとランタンの火を消した。

第7章

夜が明けるにつれ、朝が早く訪れていた。建物はまだ板で覆われ、通りには人影もなく、ピピミの骨董品店にはまだ明かりがついていた。ピピピがガンボを作ってくれたので、私と妹たちは目を覚ました。私はあくびをしながら目をこすりながら立ち上がった。

「やあ」リンが挨拶した。「起きたのね。ピピ美が朝食を作ってくれたよ」

スープを見て、なんだか不思議な見た目に驚きました。赤くて、野菜も肉も入っていました。

「これは母の昔からのレシピなんです」とピピピさんは説明した。「長年、我が家の伝統として受け継がれてきたもので、みんな大好きです。」

「あなたは料理が上手ですね」とマナコさんは立ち上がりながら言った。

腕を伸ばして机へ向かい、姉たちと合流した。この部屋は広々としていて、とても落ち着く。でも、一つだけ例外があった。トカゲの妖怪が、目を細めて尻尾を振りながら、自分の器をじっと見つめていたのだ。

「そんなに美味しくないよ」と開田は嫌悪感を込めて丼を見ながら言った。「トカゲの妖怪は沼地の食べ物が嫌いなんだ」

「おいおい」とピピンは叱った。「うちの家族は何百年もこのレシピを作ってきたんだ。みんな大好きだよ」

姉たちがスープをすすり続ける中、私は首を振りながら長いため息をついた。「市民に何が起こったのか調べに行こう」と私は言った。「ここが終わったら、C.L.I.へ向かおう」

「C.L.I？」カエルは困惑して鳴いた。「君たち、そこへ行くの？」

「そうだ」とリンは言った。「何か恐ろしいことが起こりそうだ。この子たちこそが、シャドウサイドとその邪悪な計画を阻止できる唯一の希望なんだ。」

「あらまあ。それは本当に恐ろしい計画ですね。あなたたち、旅を続けてくださいね。とても危険なことになるでしょうから。」

「大丈夫よ」とピピ美に決意を込めて言った。「お母さんが、忍者の技も力も全部教えてくれたのよ」

「それでは」と、準備が整ったと思い、カイダは話し始めた。「行くぞ。だが、用心しろ。通りにはロボットが溢れているだろうからな」

見回りのために外に出る前に、深呼吸をして、妹たちをピピ美の骨董屋から外へ連れ出した。あのロボットはどんな姿をしているんだろう？怖いのかな？かわいいのかな？そんなことは関係ない。骨董屋を出て、安全のために街路へと向かった。まるでまだ太陽が昇っていないかのような冷気で、身が震えた。それでも、辺りは静まり返っている。妖怪の姿は見当たらず、ただ風の音が響いているだけだった。

「覚えておいてくれ、みんな。もし何か証拠になるものを見つけたら、ロボットの油漏れとか手足とか、とにかく私に聞いてくれ。そして、もしそれらを見た容疑者を見かけたら、どこへ行ったのか尋ねる」とカイダは慎重に言った。

カイダと一緒に古いゴミ箱の中を物色しながら、路地裏を証拠探しするのに数時間もかかった。ひどい悪臭で吐き気がする。ゴミ箱は賞味期限切れの食べ物や、ゴミ箱に捨てられた壊れた物でいっぱいだった。中には大きなネズミの死骸もあった。気持ち悪い。

「ロボットなんていないわ」と智香は建物の反対側を見回しながら言った。「ただのガラクタよ」

「お腹空いた」マナコはつぶやいた。

「でも、もう食べたでしょ」と妹に呟いていると、麗華は気づかれずに立ち去った。突然、開田の声が聞こえた。

「ほら、見つけたよ！」カイダが路地の反対側から出てきたので、私たちは振り返った。トカゲが何かを見つけてくれたようで、ほっとした。彼女は遠くまでは探さなかったが、答えとなるものを見つけた。彼女の手には、潰れた猫のようなものがあった。妖怪ではなく、ロボットだった。銀色のロボットで、大きな青い目が二つ、長い首、そしてカチャカチャと音を立てる二本の爪がついていた。

「珍しいロボットだったね」と智香はロボットの体を分析しながら言った。

「もしかして、街を襲った奴らかな？」マナコは尋ねた。

「まあ、可能性はあるね」とカイダはロボットを落としながら答えた。「でも、確実に近づいているのは確かだ」

「おい、みんな」リンが声をかけた。「レイカはどこ？」

辺りを見回した。レイカは私たちと一緒に路地裏にいなかった。もしかしたら屋上にいるか、それともまた喧嘩をするためにどこかへ行ってしまったのかもしれない。彼女は私の言うことを全く聞かない。妹の一人を失いたくない。あのロボットに捕まるかもしれない。レイカは突然どこからともなく現れ、誰もいないことを身振りで示した。

「誰もいないの？」と私が尋ねると、彼女は首を横に振って「いいえ」と答えた。

「私のバンに行こう」とカイダは提案した。「取りに行って、辺りを捜索するわ」彼女は踵を返し、バンを取りに出発した。私たちは路地裏に隠れる時間を少し取りながら、路上で彼女を待ち始めた。しばらくして、彼女はバンで戻ってきた。

「乗って」と彼女は言った。私たちはトラックの後部座席に乗り込み、カイダがバンをスタートさせた。車内はとても広々としていて、蒸し暑い地下室のような窮屈な空間とは違って、十分な広さがあった。

私たちは街中を車で走り回り、まだ生きているかもしれない妖怪の生存者を探した。通りも何もかもが無人だった。市場も全てが荒廃し、電気も全て消えていたが、それでも生存者は一人もいなかった。

「別の道を見つけないと」と彼女は私たちの方を向きながら言った。「ロボットのいる場所へ繋がる場所を」

「どこへ？」リンはカイダの方を向いて言った。皆で考えた。ロボットがどこから来たのかは分からない。ロボット会社とか、それと関係のあるところから来たはずがない。「このロボットがどこかと繋がっていることは、皆知っている」

「たぶんC.L.I？」と智香は推測した。

「それは無理よ」とカイダは首を振りながら言った。「こんな会社で作れるわけないでしょ」

「もしかしたら」私は呟き、全てを整理した。カイダが奪ったロボットの頭部と背面を見つめた。「もしかしたら、このロボットは人質を取ってC.L.I.するようにプログラムされているのかもしれない。そうすれば、シャドウサイドは彼らの血を必要とし、世界征服のための軍隊を編成するだろう」

突然、閃光が走っているような気がした。振り返ると、バンが後ろから迫ってきた。本能が働き、この人たちは友好的ではないと悟った。私たちは驚きのあまり息を呑み、運転席の隅へと身を引いた。

「踏んで！」私は叫んだ。

カイダはアクセルペダルをカー杯踏み込み、バンに追われながらブロックを回り込み始めた。勢い余って私たちは後ろに吹き飛ばされ、シェルの上に倒れ込んだ。バンが道を逸れて他のバンに襲い掛かろうとする中、私たちはバンの側面にしがみつき始めた。

「認めざるを得ないわ」とマナコは嬉しそうに笑った。「カーチェイスは大好きなの！」

窓の外を見ると、金属の腕が振り上げられてブラスターをこちらに向けて撃ってくるのが見えたような気がした。ロボットだった。鉄のように白いロボットで、ピンク色に光る両目は金属の人間のようで、背が高いだけで人間に似ている。青いレーザーが頭に当たる前に素早く避けた。ピピ美がそう言っていた。ヨバイビルを襲撃し、人々を失踪させたのは彼らだ。

どうやって追っ手を振り切ればいいのか分からなかったが、カイダはスパイクベルトらしきものを差し出した。「早く！」と彼女は叫んだ。「そのベルトを道路に投げなさい。ロボットのタイヤがパンクするわよ。」

スパイクを掴んで、道路に投げつけた。物体が着地した瞬間、タイヤに激突してパンクし、ロボットのバンが道路に激突した。私たちはバンを少し止めて、物体が消えたかどうかを確認した。そして、安堵のため息をついた。

しかし、まだ終わりではない。別のトラックがボルトで固定され、後部ドアから出てきたのは、発射準備を整えたロボットの一団だった。

「準備、お姉ちゃんたち！」リンが叫んだ。戦士形態に変身し、ロボットたちと戦い始めた。簡単だった。奴らは俺たちほど忍者の技を持っていないわけではなく、ロボットの体を次々と切り落とすことができた。俺が水技でロボットに火花を散らすと、妹たちは簡単に切断できた。

ロボットには水という弱点がある。水に濡れるとショートし、数秒で動作を停止してしまう。ショートして火花が散り、故障すると、レイカは突撃し、斧でロボットを真っ二つに切り裂いた。トモカは物理マインドでロボットを操り始め、自らの頭を撃ち抜かせた。マナコはトゲトゲのボールに体を丸めてロボットの上に転がり、トゲに刺して他のロボットに投げつけた。金属片やボルトが飛び散り、ロボットは次々と破壊されていった。

「これで最後だ」とトモカは言い、最後のロボットを破壊した。

ロボットが全て破壊され、残りの全員が無事だったため、トラックの後部ドアに誰かいるか確認し始めた。しかし、何もなかった。妖怪も、盗品の入った木箱も見当たらない。見つけたのは、青く輝く奇妙な容器だけだった。

「それは…泥のようだ」リンは缶の近くまで飛びながら息を切らして言った。

「素敵！」マナコは満面の笑みを浮かべ、レイカを押しやった。「もし私たちをもっと強いハイブリッドに変異させられるとしたら？」

「いいえ、私たちはグーの塊になってしまいます」とトモカは言いました。

「待って」と私は言った。脇に寄って、奇妙な青い粘液をじっと見つめ、長い間見つめていた。突然、目が大きく見開かれ、心臓が不安で高鳴り始めた。何かが私に思い出させた。遠い幼少期の出来事だ。母が言っていた。私たちはあの粘液によって創造され、あの小瓶には実験室で私たちを変異させたのと同じ物質が入っている、と。

「これは何年も前に私たちを変異させたのと同じ物質に違いない。みんな、この粘液を作った者は誰であれ私たちと繋がりがある。そもそもあの連中が私たちを捕まえようとしたのも、この粘液のせいだ。」

智香は、落とさないように慎重に粘液を掴み、この物質が驚くべきものだと分析し始めた。おそらく動物界のDNAを全て含んでいるのだろう。ロゴを見て横に回すと、紫色の大きなブロック体で何かが書かれていた。

「プロジェクトハイブリッド」

「ハイブリッドプロジェクトとは何ですか？」マナコは興味深そうに尋ねた。

「何が起こっているのか全く分からないけど、この化学物質の持ち主は誰であれ、誰かの持ち物なのよ」とトモカは分析した。彼女はガラスの中に入っている変異原を指差した。「見て。この粘液はすごく青い。DNA構造が、これまで存在したあらゆる動物界と関連しているのよ」

「今まで気づかなかったよ」と、開田は言葉もなく答えた。「もしかしたら、ロボットが妖怪を捕まえて、実験を始めたのかもしれない」

プロジェクト。もしかしたら彼らの血のせいかもしれない。だからこそC.L.Iは彼らに恐ろしい実験をさせたかったのだ。」

「いや、いや」リンは嫌悪感に顔をしかめ、手を振りながら拒否した。「そんなこと聞きたくないわ」

ロボットのバンの側面を見ると、粘液容器がどこにあったかを示すもう一つの手がかりに気づいた。両側にロゴがあり、3つの単語が綴られていた。

コズミックラボ業界。

「それは会社の名前に違いない！」智香は息を呑んだ。

「待て」とリンは悟り、ロゴに飛びつき、こちらを向いた。もしかしたら、君たちがこの計画に関わっているのには何か理由があるのかもしれない。その粘液はC.L.I.から来たものだ。だから、妖怪を捕らえるには、彼らの血を全て吸い取って悪に解き放たなければならないんだ。」

「リンク、君の言う通りだ」と私は言った。「もしあのプロジェクトが俺たちと関係があるなら、シャドウサイドが何か知っていたのかもしれない。C.L.Iの建物を見つけて、そこで何が起こっていたのか調べるべきだ」

見上げると、丘の上から奇妙な形が近づいてきた。何の形かは分からなかったが、奇妙な積み木のような形をしていて、屋根の上で明るく輝いていた。シュルームビルの住民が私たちに話してくれたのは、きっとこれだったのだろう。

「そして、これらのロボットがC.L.Iから来たのなら、この狂気に終止符を打つべきです」とトモカは答えた。

「その通りだ」とリンは同意した。「時間を無駄にしている暇はない。行こう」

街を出る前、私は開田の方を向いた。「心配しないで。妖怪はみんな街に返すから。いつか私たちも街に戻れるかもしれないわ」

「きっと大丈夫よ」とトカゲの妖怪は微笑んだ。片腕を上げて手を振って別れを告げた。「みんな、頑張ってね！」

うなずいて、私たちは向きを変え、C.L.I と私たち全員が関わっている謎のプロジェクトの答えを見つける準備を整えて、ヨバイビルを去り始めました。

第8章

レイカの視点

旅は困難を極める。歩けば歩くほど、直面する危険は増していく。まず、ヨバイビルは空っぽで、住民はおらず、街にはロボットが溢れている。次に、これらのロボットとそのキャニスターがC.L.I.のものだという証拠を見つけた。シャドウサイドの女が関わっていた場所だ。しかも、悪事に利用されるであろうプロジェクト「H.Y.B.R.I.D.」にも関わっていた。ああ、なんて残念なんだろう。

白原村はきっと休める場所を見つけるだろう、それもココビリー村からそう遠くない、空っぽの給水塔だろうと確信していた。ココベリー村は虫のように這い回る生き物たちの村だった。私は昔、虫が大嫌いだった。肌に刺さったり、顔にブンブンと羽音を立てたり、触れると凍りついてしまう。マナコは時々、あの小さくてひらひらした、可愛い羽根の虫が好きだった。

彼女はそれを「ひらひら」とか「蝶」と呼んでいました。建物は全部、橋のように絡み合った巣や巣、巣でできていました。リンはココベリーは怪しげな昆虫村だと教えてくれました。彼らは食べ物、種、ベリー、蜜、菌類、その他の葉っぱを持っています。私たちには美味しくありません。ベッドがベタベタしていたので、水巣塔で寝なければなりませんでした。

かなり暗いけど、私がいなければランタンに火を灯してこの場所を照らすこともできたのに。私が口下手でいつも不機嫌だってことは、皆さんもご存知でしょう。でも、それだけじゃないんです。私はシラのチームの副リーダーなんです。本当は母にリーダーに任命してもらいたいと思っていたんです。だって私は一番強いから。でも母はシラを選んだんです。妹は自信家で自己中心的で、話を聞くのが上手なんです。

僕の短気さについて言えば、いつも何でもかんでも火をつけてしまうんです。周りの人が兄弟を攻撃しようとすると、しょっちゅう怒ってしまいます。自分では抑えきれないんです。兄弟の怒りが心の中で爆発し、何かを殴ったり、木を切り倒したり、魚をかじったり、何でもいいからやり

たいという衝動に駆られるんです。母は僕に、怒りは敵だから平静を保たなきゃいけないって言っていました。怒りは僕のエネルギーの源になるので、僕の記録は台無しになってしまうんです。

時々、怒りを抑えられなくなるんだよね。街を出て別の村に着いてから一週間が経った。人目につかないように、影に隠れるしかなかった。

「すごく晴れているのは分かっているわ」とリンは空を見上げながら言った。「でも、一体どうして空が暗くなっちゃったの？」

「天気のせいかな？」と智香は推測した。

「そんなの無理よ」マナコは泣き言を言った。「ココヴィリーは綺麗だと思ったのに。それに、昆虫人間は見た？ 見た目が変だし、私たちのことはあまり好きじゃなかったし。」

まあ、真ん中の姉の言う通りだった。雨が降りそうだと分かっていたので、水小屋に避難しなければならなかった。どうやらC.L.I.に近づいているようだ。もっと明るくしようとランタンに火を灯し続けた。しかし、光はチラチラと揺れただけで消えてしまった。昨日の雨で、火が足りなかったのかもしれない。

もっと力を入れて、もっと強くしようとした。でも、間違えたと気づいた。うっかりランタンに火をつけてしまい、地面に燃え移ってしまったのだ。驚いた智香は、踏みつけて火を消そうとした。

「痛っ！足に刺さっちゃった！」彼女は足を踏み鳴らし、私の炎を消そうとした。「かわいそうな足首…痛っ、痛っ、痛っ…」

「レイカ、正気を失ったのか？」シーラは激怒して私に向かって叫んだ。私は混乱した怒りの表情でその場を離れた。姉の顔は真っ赤になり、彼女のピンク色の目が私の赤い目に映った。「前のランプを点けるところだったじゃないか！」

わざとやったわけじゃないんです。というか、私のせいじゃないんです。プレッシャーがずっと私の中に押し寄せてくるんです。

「この奇妙な新世界での旅でみんな疲れてるってわかってるよ。でも、もう怒りすぎだよ」って意味だ。ああ、姉にプレッシャーをかけられてカッとなるのは分かっていた。目を細めて拳を握りしめた。シーラは私を責め続けた。「外に出て涼みに行けばいいじゃない！行っちゃって！」

うなり声をあげながら、給水塔から立ち去ろうとしたとき、妹のマナコが「シラ、彼女の顔を見た？」と言っているのが聞こえた。

一体何が起こったんだ？何もかもが真っ白になって、カッとなってしまったのは分かってる。あんなことするべきじゃなかった。それに、怒りが抑えきれなかったのは、私のせいだったんだ。ココビリー・セントラルに入り、屋上の寺院の端に座り込んでため息をついた。どうやら、本当にカッとなって神経を逆なでしているみたいだ。

怒りがさらに燃え上がり、おかげで姉に怒られてしまった。智香を傷つけるつもりはなかったのに。彼女は敏感で肌も弱いのよ。うなり声をあげながらこめかみに石を蹴りつけ、腕をぎゅっと胸に組んだ。

「ちょっと困っているみたいですね」と声が返ってきて、私の考えを遮った。

頭を回して見てみると、背が高くて細身の蜘蛛の妖怪が入り口に寄りかかっていた。青みがかった長い髪が顔の側面を覆い、脚は長く、まるでスーパーモデルのような美しさだ。四本の腕と胸には毛が生え、黒くてホットピンクの瞳をしている。ジャンプスーツを着ていて、まるでスパイのようだった。

少し緊張していたけれど、屋上でふくれっ面をしていた。妖怪は私のがっかりした表情に気づき、微笑んだ。「私の名前はルル・スパイダームーン。あなたは？」

私は話すことができず、ただうめき声だけを発するだけだった。

「話せないの？」と彼女は尋ねた。私は首を横に振り、話せないというのが正しい答えだと伝えた。声のせいで話せないのは分かっていたし、誰も私のことを評価してくれていないことをボディランゲージでしか伝えていなかった。少し落ち着くために、シラに追い出されたことまで全部話した。私は動揺してうめき声をあげ、両腕を胸の前で強く組んだ。

「ふーん、残念ね」彼女はため息をつき、少し顔をしかめた。「誰も私を評価してくれないなんてことはないわ。それに、私は一人ぼっちなのよ」

ため息をついた。街を見つめていると、時間がゆっくりと流れていくようだった。蜂の巣状の電灯の光が街の上空を明るく照らし、暗闇を消し去っていく。確かに綺麗だけど、シーラがまだ私に怒っているのは分かっている。少し冷静になって、気持ちが落ち着くまで待たなければならなかったけれど、少なくともあの妖怪蜘蛛はそこにいた。炎に足を取られてしまった智香にも謝らないといけない。

「とにかく。私はC.L.I.をスパイしているんです」とルルは続けた。「スパイは敵をターゲットにして重要な任務を遂行することで知られています。」

スパイ？スパイなんて聞いたこともなかった。立ち上がって、蜘蛛が私を追跡していたんだと怒鳴った。

「いや、実は君を追っているわけじゃないんだ。ただ助けてあげたかっただけさ。君もC.L.Iを狙っているんだろう？」

私はうなずいた。

「そうだな、俺たちには共通点があるんだ。ほら、君くらいの年頃、スパイ訓練を始めて重要な任務をこなしていたんだ。上司に妖怪犯罪の捜査を依頼されて、指名手配犯が捕まった時に行方不明になったんだ。上司がこれをくれたんだよ」

彼女が手配書を渡してくれたので、見てみた。画像を見ると、妖怪街で遭遇したのと同じロボットだった。彼らはこの街にもいて、妖怪蟲を捕獲しているのだ。私は怒りに震え、ポスターを握りしめた。

「それで、あのロボットに見覚えがあるの？」と彼女は尋ねた。私は激しく頷いた。「妖怪の世界に現れた理由を説明しましょう。まず、ロボットは妖怪を捕らえてC.L.I.に連れて行きます。捕らえるのが彼らの唯一の仕事です。そして、彼らは別の姿で戻ってきます。黒いスーツとゴーグルを身に着けているように見えます。住民の言うことに反応しないどころか、耳を傾けることさえありません。まるでマインドコントロールされているかのようです。」

彼女の話に目を見開いた。ルルはC.L.の後にこう言った。「私たち、好き。何か英雄的なことをしたい衝動に駆られた。論理的な思考ではなく、自分の力で考えたことだった。あの妖怪たちが何を企んでいるのか、何かがわかれば、答えが見つかるかもしれない。」私は立ち上がり、うなり声を上げた。「つまり、奇妙な行動をしている妖怪の調査を手伝ってくれるってことか。ま

あ、面倒なことになるだろうね。あの妖怪の主は厳しくて冷酷だからね。」でも、私はうなり声を上げて、試してみる必要があると抗議した。

「よし、洗脳された妖怪たちが倉庫や研究所で化学物質を輸送し、それほど遠くない塔へと運んでいる。C.L.Iがなぜ化学物質を盗もうとしたのかがわかれば、それを解明する必要がある」

ルルの盗みを阻止する任務を引き受けるべきだとは分かっているけれど、姉妹たちは私のことをとても心配するだろう。もし彼女たちがいなくなったと知ったら、ひどく心配するだろうし、私がいない方が幸せかもしれない。私は立ち上がり、うなずいた。

「よし」ルルは頷いた。「ほら、これを着て」彼女は黒いジャンプスーツとゴーグルらしきものを私に手渡した。「念のため予備も持ってたんだ」

今までスパイ服をもらったことはなかった。少し落ち着きを取り戻し、スーツを手に取り、着始めた。着終わると、すっかり正式なスパイのようだった。全身にフィットし、甲羅、足ひれ、ゴーグルが頭にしっかりフィットする。魅力的に見える。私には魅力的すぎるくらいだが、これは正式なスパイに見える。

「気に入ってくれて嬉しいわ」とルルは言った。「さあ、行くわよ。さあ、出発するわ」私もルルの後についていくと、彼女は屋根の上を案内し始めた。見知らぬ人と二人きりで行くのは緊張したけれど、彼女は素敵な友達で、少し勇気が湧いてきた。やっぱり、姉妹たちの助けは必要ないみたい。

近くの倉庫に着くと、私とルルは、通りの向こうで妖怪たちが薬品を集めてバンに積み込んでいるのを目撃した。妖怪たちは何かがおかしいと感じた。無表情で目に光がなく、見たこともない未来的なスーツを着ている。

「箱の中に入っているこの化学物質、見える？」とルルが尋ねた。「あれはMu-X。この配合はすごく重要なの。奇妙な液体を作るから。それを建物まで運んでいるのよ。」見てみると、妖怪がMu-Xとラベルの貼られた紫色の容器を持っているのが見える。あの青いベタベタした物質は、あの変異原とは似ていないけれど、この化学物質は違う。「本当に止めたいの？」とルルが尋ねた。

少し怖かったけれど、頷いた。梯子を慎重に降りて、妖怪の警備員の背後に慎重に近づき始めた。私はとても秘密主義だった。母は敵を攻撃するにはステルスで行動しなければならないと教えてくれた。そして、私たちはそうするしかなかった。

智香が入れた変な水を注いだハンカチを使って、私は後ろに回り、警備員の口を覆い、こっそりと彼らを倒し始めました。倉庫の反対側までバック宙して、別の警備員の顔面を素早く蹴りました。

近くで、ルルが天井に登り、逆さまに這って、口で水かきを繰り出した。気持ち悪かったが、警備員全員を水かきで捕まえることができた。あまりにも簡単だった。強くてタフな、罪のない小さなウミガメの女の声が、警備員に聞こえるはずがない。それが終わると、ルルはそこへ向かい、薬品の箱を掴んでバンに積み込んだ。必要なものはすべて揃った。あとは、奴らに見つかる前にここから逃げ出さなければならない。

「行きましょう」とルルは言った。「C.L.I.から逃げて、本来の持ち主のところに戻れるわ。急いだ方がいいわ」

うなずきながらバンに乗り込み始めたが、一つ問題があった。バンの運転ができないのだ。運転できるかどうか、ひどく不安になり始めた。「運転できないの？」首を横に振った。そもそも、10代の若者は、動力車などを動かせるくらいの体力があれば運転できるはずだ。足音が聞こえ、思わず背筋を伸ばして体を起こした。ミラー越しに見ると、洗脳された妖怪の集団がこちらに向かってくるのが見えた。

「黙れ亀！」ルルは叫んだ。「ペダルを踏み込んで、早く！」

ドアを勢いよく閉めると、バンが動き出した。蜘蛛の妖怪は後ろに倒れ、私がその場を急旋回する間、シートにしがみついていた。人生でこれほど生きている実感は初めてで、心臓がドキドキと高鳴った。ハンドルを握りしめたまま、カーブを避けながら、猛スピードで街中を走り続けた。

「急がないと！」ルルは叫んだ。「迫ってきています。」

超能力と変身能力を使い、洗脳された妖怪たちに火の玉を放ち、倒し始めた。妖怪たちはブラスターを発射する前に素早くそれを避けた。私は頭に命中しそうになったレーザーをかわし、危うく撃たれそうになった。危うくレーザーに撃たれそうになった。

「そのまま運転して！」ルルが叫んだ。「出かけるわ。」

反対側に向きを変えると、ルルは窓から飛び出し、妖怪たちに向けてブラスターを撃ち始めた。彼らの胸部を直撃した。妖怪たちは苦痛に叫び、バイクから落とされ、炎の爆発の中へと墜落した。

あれは本当に最高だった。私は道路から目を離さず、渋滞を縫うように走り、通行人を避けようとした。ルルはバンから降りて屋根に上がり、トンネルに白い糸を吐き出し、妖怪の警備員を阻んだ。数人の警備員が突然車の端につかまり、表面の端が塗装で削られていた。

「降りて！」ルルは洗脳された警備員を足で蹴りながら叫んだ。「口のきけない亀！」彼女は私の後ろから叫んだ。「助けて！」

私は振り返り、警備員にもう一度火の玉を投げつけ、彼を吹き飛ばした。さらに多くの警備員がバンの側面の間から押し寄せてきた。私は両足をハンドルに乗せ、両手で警備員に炎を放ち、車から吹き飛ばした。

「道中はゆっくり！」ルルは叫んだ。彼女は橋のあちこちにクモの巣を張り続け、警備員を一人ずつ遮った。

バンを角まで走らせながら振り返ると、パーサーたちは追いかけてきていなかった。彼らはついに去っていった。ルルは息を切らし、息を切らしながら、私たちが逃げてきた場所へと向かっていった。

公園で安全な場所を見つけると、バンから降りて安堵のため息をついた。「楽しかったわ」と彼女は残っていた髪を直しながら言った。「やっと任務完了したみたいね」

うなずいて同意したが、少し不安になった。洗脳された兵士たちがなぜ従順な態度で私たちを攻撃してきたのか、ただ知りたかっただけなのだ。私はうなり声をあげ、警備員たちがなぜ私たちを追いかけているのかを説明しようとした。

「理由を知りたい？」ルルは冷たく尋ねた。「実は、洗脳された妖怪たちがシャドウサイドと共謀して、血を混ぜた精神液に血をすり替えていたんです。その精神液には猛毒の化学物質が大量に含まれていて、妖怪たちはミュータント兵士へと堕落させられました。血が完全に補充されれば、シャドウサイドは地球を含む世界中にそれを放つでしょう。だから私は何が起こってい

るのかを調査しているんです。彼女が何をしようとしているのか、耳にしたんです。人類を皆殺しにして、世界を荒涼とした生命のない未来へと導くつもりだと。」

言葉を失った。シャドウサイドが妖怪を洗脳するなんて？なんて残酷で無慈悲な！妖怪たちを利用して世界を征服しようとしているなんて、本当に腹が立った。ルルに、妹たちを見つけてシャドウサイドの邪悪な計画について警告しに行かなくちゃ、と合図し始めた。

「じゃあ、帰るならこれを持っていきなさい」彼女はC.L.Iと書かれた小さな薬品瓶を私に渡した。彼女は立ち上がり、ブラスターを掴んでベルトにかけた。「世界を救うのに助けが必要なら、電話して」

証拠を見つけられたことにとても感謝した。私は新しい友人に頷き、頭を下げ、給水塔へと戻り始めた。

第9章

智香の視点

レイカは攻撃的で失礼な態度から少し抜け出して戻ってきた。でも、こんなに時間がかかったことはなかったよね？ 火を消そうとした時に、うっかり足を火傷させてしまったけれど、軽い火傷だ。まだ痛いけど、きっと大丈夫。C.L.I.と市民たちが収容されている場所を探していたんだ。でも、心配なことに、リンは時間が迫っていることを知っていた。

とにかく、私自身はテクノロジーや人間界との繋がりについて何も学んだことがありませんでした。空に輝く点がトゥインクルと呼ばれることや、他にもたくさんの村人がクレイジーな発明や

奇妙なアイデアを思いつくことなど、知っていました。姉たちは私のことをとても変わっていると思っていましたが、母は私の頭脳はとても賢いと言っていました。

彼女は、僕には何かすごい発明ができるって言ってくれた。僕は木の網や槍、木の機械などを作っているだけだ。僕の唯一の願いは、ジャングルから外の世界を見て、偉大な科学者になることだ。ところが、レイカらしき人が戻ってきたので、僕たちは出迎えられた。

「レイカ、どこにいたの？」シーラは妹を叱るように尋ねた。「一晩中いなかったじゃない。どうして黒いスーツを着ているの？」

麗香さんは何も答えず、ポケットから何かを取り出して私たちに見せてくれました。私たちはそれを見て、その小さな物体を見て驚き、息を呑みました。

「レイカ、その小瓶はどこで手に入れたの？」リンは彼女に向かって飛びながら尋ねた。

私は小瓶を見て、ラベルに書かれた文字を読み始めた。C.L.I.。「C.L.I？その小瓶はC.L.Iから来たの？」

「きっとそこから来たんだね？」とリンは思った。「レイカ、留守中に何か見つけたの？」

レイカはうなずいた。しばらくして、私は姉妹たちにこの化学物質を調べなければならないと伝えた。間に合わせの化学実験セットを作り、何がおかしいのか分かるまで、奇妙な透明な液体を調べ始めた。顔が真っ青になり始めたので、ためらうことなく振り返って姉妹たちに言った。「みんな、この化学物質。きっと精神安定剤だと思う」

「どういう意味ですか？」マナコは私に尋ねました。

ココビリーに到着した時、黒いジャンプスーツを着た妖怪たちを見たのを覚えてる？ 洗脳された妖怪たちが奇妙な行動をとるのは、きっとこのためだと思う。シャドウサイド夫人は、宿主の血液にマインドコントロール用の化学物質を注入して洗脳していた。ミュータント兵士が十分に増えれば、病気が蔓延し、彼女は世界を滅ぼすだろう。

「なんてことだ」シラは恐怖でピンク色の目を大きく見開き、息を呑んだ。「手遅れになる前に急がないと。さあ、出発しよう」荷物をまとめ、給水塔を出て旅を続けようとした。

数時間後、街を抜ける長い旅の末、ついに建物に到着した。目的地に到着したのを見て、息を呑んだ。リンがシャドウサイドの兵士たちがここで働いていると言っていたのを思い出した。建物はかなり巨大で、天井まで届くブロックでできていた。黒い文字で「C.L.I」と書かれていた。

「さあ、みんな」とリンは言った。「C.L.I.に到着したよ」

「これですか？」ブロックでできた城を見つめながら、私は尋ねた。「今まで見た中で一番奇妙な建物です。」

「建物の中に入り込み、これを終わらせる方法を見つける必要がある」とシラ氏は語った。

「警備員が多すぎる」とリンは静かに囁いた。「ドアを通り抜けられない。こっそり通り抜けるしかない」

「心配しないで」とシラは言った。「フックを使って向こう側へ行くわ」私は合図を送った。「よし、みんな。慎重に狙って」彼女はフックを持ち上げ、屋根の端に引っかかっているところを横切って投げた。それから私たちは警備員の目を盗んで上へと登り始めた。

換気口を開け始めて、急に音を立てないように無理やり中に入りました。服はすっかり汚れて、埃でくしゃみが出てしまいました。

建物の中は鈍いピンク色で、辺り一面に光が溢れている。まるで誰もいないようだ。シラは廊下を案内し、ミュータントの警備員をすり抜けていった。オフィスに着くと、辺りを見回し、やっとC.L.I.の警備員を見つけた。よく見ることができた。彼は重厚な黒い鎧を身にまとい、ヘルメットには青いスクリーンが付いていた。こんなにも未来的な装備を身につけた人間は見たことがない。シラは私たちに静かにするように合図した。

私たちはうなずきながら、警備員が私たちに気づく前に通り過ぎ、部屋の別のセクションに入りました。

突然誰かの声が聞こえたので、機械設備の後ろに隠れた。覗き込むと、黒髪でビジネススーツを着た人物と、二人のミュータント兵士がいた。皺と紺色の眼鏡のおかげで、人間らしい外見だった。おそらくヨルヒ・シャドウサイドだろう。静かにしていようとした瞬間、女性とミュータントたちは動くシャフトの中へと消えていった。

「危なかったわ」リンは安堵のため息をついた。「彼女がどこにいるのか確認しに行こう」

シラがエレベーターシャフトまで案内してくれた。しかし、一つ問題があった。「そこにスキャナーがあるのよ」と私は静かに言った。「それを挿入する何か、私たちをそこへ連れて行ってくれる何かが必要なの」

「カードみたいなの？」リンは尋ねた。

「これ、私が手に入れるわ」とマナコはささやいた。彼女は大きな植木鉢の後ろに隠れ、私たちは再び部屋の反対側の隅に隠れた。警備員が廊下を通り過ぎたが、私たちはじっと動かなかった。マナコは蔓を使って、彼のポケットからゆっくりとカードをひったくった。警備員は彼女の存在に気づかなかった。

カードを受け取ると、すぐにエレベーターシャフトへ向かい、スキャナーにカードをスワイプしました。緑色のランプが点滅し、アニメーション音声が「ラボ階へ行きます」と呼びかけました。とりあえず、脱出はできました。40階に近づき始めると、しばらく待ち始めました。スピーカーからは穏やかな音楽が鳴り響き、乗り心地はなかなか良好でした。エレベーターは停止し、スクリーンには40階が表示されました。時間通りに到着しました。ドアの向こう側を見るのは少し怖かったですが、念のため確認しておく必要がありました。

エレベーターのドアが開き、暗くて冷たい廊下に出た。見た目はそんなに怖くない。いや、もしかしたら怖かったのかもしれない。シラは慎重に、前方の大きなドアへ進むように合図した。マナコは私のスカートを掴み、恐怖で震えていた。私は眼鏡が顔から落ちるのを感じたが、押し戻した。私たちは立ち止まり、到着した。ドアはかなり大きく、何かが私たちに中を覗き込むように告げていた。中に入るのは怖かったが、そこで何が起こっているのかを確かめなければならなかった。私たちはドアを開けた。

中に入ると、一体何が実験室なのかに驚きました。床は淡い青色で、頭上の照明は鈍い赤色に輝いていました。辺りを見回してみると、実にたくさんの実験体が積み重なっていました。棚には失敗した実験体が山積みで、シャドウサイドが一体どんな怪物を作り出したのかさえ分かりません。私はうんざりしました。実験体は腫れ上がり、変形し、手足は奇形だらけで、顔は黄色く充血し、蕁麻疹で覆われています。見渡すと、ミュータントの姿を示す設計図がいくつかありました。とても古くて使い古された感じでした。機械や設備が並んでおり、あの機械だけが何だったのか分かっているものもありました。

「この機械は何だろう？」とシラは思った。よく見てみると、檻に入れられた機械は、チューブやワイヤーで繋がれていて、その先には複数の容器が散らばった容器がある。何かに生命の源を奪われた場合に備えて、囚人を拘束するための手錠が付けられている。ようやく分かった。それは、生物から血を全て吸い取る「ドレナージュ」という機械だった。

「あれは生き物から血を吸い取ることができる機械なの？」マナコは怯えながら尋ねた。

「そう思うよ」とリンは言った。

「そうか」とシーラは気づき、一歩下がって胸を押さえた。「あの機械が妖怪を死なせたに違いない。だから衛兵は私たちの血を吸い取ろうとしている。母さんの言う通りだ」

「もう帰ろうか」マナコは目に涙を浮かべながら、すすり泣いた。怖くなってきたのか、私のスカートを掴んだ。「ここは嫌だ」

「でも、もうかなり近づいたのよ」とシラは目を細めて言い張った。「シャドウサイドがなぜこの機械を作ったのかは分からないけど…ミュータントの体力を奪い、何らかの化学物質で洗脳するために。でも、今さら逃げるわけにはいかないわ」

シラが言い続けている間、私は怖くて「排水マシンだ」と言えなかった。でも、その時、あることに気がついた。角を曲がったところにある机の近くにテープがあるのに気づいた。古そうだが、このテープには何か重要なことが録音されているに違いない。

「みんな」と私は叫んだ。「何か見つけた。ビデオテープみたいなの」

「ビデオテープ？」リンは尋ねた。彼女は私のそばに寄ってきて、ラベルを見た。

「私たち全員が知っておくべき、とても大切なことがあると思う」と私は言った。「もしかしたら、答えが書いてあるかもしれない」。私は古いプレーヤーにそれをセットし、箱の中に入れ始めた。数分間ノイズが入った後、魔法の箱の映像が再生された。

「データログ0日目、

私たちは、*2*種類の動物の*DNA*を持つ、半分人間、つまり世界を破滅から救う伝説の存在を創造するために、プロジェクト*H.Y.B.R.I.D*を開始しました。人間の血、動物の血、そして粘液を作る化学物質が混ざり合い、特別な粘液が生まれたことで、実験は完了しました。

驚いた。誰か見覚えがあった。きっと、自分の真意に気づいて私たちを安全な場所へ連れて行ってくれたのは、飼い主だったのだろう。リンは言葉を失い、シーラの傍らに浮かんでくると、面白そうに目を瞬いた。他の姉妹たちも、テープが再生され続けるのを見始めた。

「我々はこの粘液をハイブリアと名付けました。なぜなら、そこには動物界の血と、人間に特別な能力を与える物質が含まれているからです。それは非常に特別なものであり、人間を強力な生物へと変えるための選択肢になると信じています。私は、この粘液を正しいものにできると確信しています。ただし、その挙動を維持できればの話ですが。」

データログ*2*日目、

変異プロセスを開始するために、被験者を何人か招き入れました。しかし…失敗しました。何が悪かったのか分かりません。粘液を注入すると、被験者たちは叫び声を上げ、成長過程にあった何らかの変異体が急速に、見分けがつかない生物へと変化し始めました。彼らは完全に脱力し、死んでしまい、黒焦げの体だけが残り、その上に動物の手足や器官が生えていました。院長は、ハイブリアを注入するのは動物だけで、人間には必要ではないと考えていました。

データログ*: 5*日目、

シャドウサイドさんに変異原を注入してもらうため、ウミガメの卵*4*個を運び始めました。数人の科学者が研究のためにここに持ち込んできました。その日は孵化が遅れていましたが、私の科学者たちが浜辺で見つけて研究のために持ち帰りました。幸いにもハイブリアンの血の検査は成功していました。プロジェクトを進めれば、きっと孵化して強力な兵士になるでしょう。

データログ*15*、

卵の中には、胚が光っているのが見えます。もうすぐ孵化するかもしれませんね。それでは、彼らの血について説明しましょう。ハイブリアは、並外れた力を持つ青い分子です。哺乳類、鳥類、爬虫類、魚類、両生類、昆虫など、あらゆる動物界と関わりがあります。ハイブリッドが十

分に増えれば、世界はより良い生活へと変わっていくでしょう。私たちはこの物質を作り始め、4つの卵を覆い始めました。胚が成長し、変化していくように。きっと素晴らしいことでしょう。

データログ25、

ゆっくりとした足音が響き、クオロ・カナコは独り言を言いながら廊下を歩いていった。彼女が廊下を歩くたびに、周囲の廊下は暗く、恐ろしい雰囲気を漂わせていた。

そろそろ何か恐ろしいことが起こるんじゃないかと不安になってきた。リンが喉に詰まったものを飲み込むと、マナコはシラの手を握りしめて慰めた。背筋が凍るような感覚で、体が冷えてきた。カナコさんが何か独り言を言っているのが聞こえたような気がした。

「シャドウサイドさんはずっと研究室にいたようですが、どれくらいここにいるのですか？」

研究室からまた声が聞こえてきた。クオロは用心深く、そして心配そうに立ち止まり、ゆっくりとドアから身を乗り出して耳を澄ませた。中では、彼女が他の科学者たちと話している声が聞こえた。

「シャドウサイドさん、このウミガメたちは大きくなったら強くたくましくなりますよ。そして10代になったら、研究室でいたずらをするようになるんです。」

「ああ」シャドウサイドの鼻息荒い声が頷いた。「彼らは優秀な兵士になるだろう。もうすぐ14歳になる。十分なハイブリアンがあれば、それを使って軍隊を編成し、世界を征服するつもりだ。彼らが成長したら、それを手に入れる方法はただ一つ。彼らの血だ」

カナコは恐怖と怒りに目を見開き、息を呑んだ。息を切らしながらドアから立ち去り、口を覆った。片手にはまだカメラを持っていて、録画を続けていた。

「そして、彼らが成長してどんな人間になるか想像してみてください。彼らは誰よりも強い兵士になるでしょう。軍隊で戦い、空中、水中、地下を問わず、あらゆる敵地を殲滅できるでしょう。基地が破壊されるたびに、軍はすべての人間を捕らえ、兵士に変えます。しかも、強力な兵士に。どうなるか見守ってください。彼らは血を抜かれ、精神血清と入れ替えられ、兵士に作り変えられるのです。」

カナコは恐怖に凍りつき、一歩下がった。呼吸が荒くなってきた。息を荒くしながら神経を落ち着かせようとしたが、やがてこの恐ろしい計画に激しい怒りがこみ上げてきた。「この魔女め！」彼女は小声で唸り声を上げた。「許さない。あのかわいそうな小さなウミガメたちを、あなたの軍隊のミュータント兵士に仕立て上げるなんて、絶対に許さない。」

怒涛の足音が聞こえた。それは、加奈子が上司を慰めるために研究室に入ってきたことを意味していた。

「あなた！一体どういうつもりなの？」彼女は叫んだ。「世界征服を企んで、怪物のような兵士の軍隊を作り、あのウミガメの血を吸い取って血を吸うつもりなの？」

「それで、クオロさん、あなたはそれを聞いていたんですね」とヨルヒは気づいた。

「一体何を考えていたんだ？！あのウミガメは実験台にはできない。まだ幼すぎて水を抜くことはできない。」

「そうだ。私の命令に従う兵士を作るために、強力で安定した粘液を作るために彼らの血が必要だったんだ。」

「絶対に許さないぞ、シャドウサイド・ヨルヒ！」抵抗する音が聞こえた。「放せ！」

「私と一緒に働かないのなら、カナコ、あなたはただの弱い変人です。」

爆発音が響き、ガラスが割れ、兵士たちが叫び声を上げた。炎が燃え上がり、研究にとって重要なものがすべて燃え尽きた。そして映像は終わった。

「ハイブリッド計画、か？」シーラは、長年の出来事を悔やみながら言った。私は恐怖に口を覆い、私たちを救ってくれた人に何が起こったのかを痛感した。ずっと、カナコはすべてを知っていた。計画のこと、プロジェクトのこと、幹部の邪悪な計画のこと、そして…私たちのこと…

「みんな、これはひどい！」リンは恐怖に震えながら叫んだ。「この動画を作ったのは、14年前に君たちと繋がっていた人間だ。シャドウサイドは殺人事件だ。彼女は自らの手でカナコを殺したのだ！」

「それが原因ですか？」とマナコは尋ねた。

「ああ」と私は全てを分析しながら言った。「きっと血を狙っているんだと思う。血は彼らにとって非常に貴重なものだから。だからカナコさんは計画を知っていた。あの女性は洗脳されたミュータントの軍隊を作るために、私たちの血を求めていた。手遅れになる前に、この計画と建物を破壊しなければならない」

「トモカ、その通りだ」とシラは言った。「C.L.I.の部隊が攻撃する前に止められるのは、これが唯一のチャンスだ」突然、私たちが動く前に警報が鳴り始めた。私たちはその場に凍りつき、心臓が激しく鼓動した。

「見つかっちゃった！」シラは叫んだ。「ここから逃げなきゃ！」

私たちは研究室から廊下へ駆け出そうと、警備員から身を隠そうと必死に走り出した。エレベーターに着こうとしたその時、呼び止められ、目の前のドアが開き、ミス・シャドウサイドと兵士ミュータントの集団がそこにいた。

「やあ、みんな」と彼女は言った。「ずっと待ってたのよ」

「あなた…」シラは息を呑んだ。「あなたはシャドウサイドなのね！」

「もちろんです」と彼女は頷いた。「何年も経って、やっとあなたを見つけました。私たちはあなたが炎の中で亡くなったと思っていました。でも、私たちはあなたを見つけたので、プロジェクトを完了することができます。」

「どんなプロジェクト？」私は怖くなって脅した。「私たちに何の用だい？」

「必要なのはお前たちの血だ」とシャドウサイドは答え、私たちは恐怖に息を呑んだ。「それで変異原を作り、捕らえた妖怪たちを我が軍団に仕立て上げる。衛兵、この混血体を中央実験室に運び、機械に接続しろ」

警備員たちが私たちを取り囲み、背後で手錠をかけ、リンを青いカプセルに入れて、研究所の奥へと連れて行き始めた。リンが捕らわれているので、ヒーローの姿に変身することはできないので、彼女の命令に従わざるを得なかった。

「何かしなくちゃ」シラは私たちに小声でささやきました。

「無理よ」と私は囁いた。「もう終わりよ。力尽きるわ」

警備員にメインラボに連れて行かれる途中、ふと見渡すと、C.L.I.からの脱出口らしきポータルのようなものが見えた。だが、気をそらす必要がある。テレキネシスを使い、ブラスターでミュータントたちを撃ち殺してから、彼らに急いだ。「急げ！ポータルへ！」

手錠をかけられたまま駆け寄り、ポータルが作動するかどうか試してみた。マナコがこちらを見て、機械が作動する前に2本のワイヤーを溶かそうとした。機械が明るい光を放ち始めると、ヨルヒが「逃がすな！」と叫んだ。

我々は身構えたが、リンはまだカプセルの中に閉じ込められていた。シーラはリンを助けようと走ろうとしたが、一瞬で消えてしまい、私の意識は停止していくのを感じた。

第10章

マナコの視点

どれくらい落ち続けていたのかは覚えていないが、最後に目が覚めた時は、金属のような床に着地していた。私はうめき声をあげながら目を開けた。他の姉妹たちも同じようにうめき声をあげた。最後に私たちが逃げ出したものは何だったのだろう？きっと、あの恐ろしい機械に繋いで血を抜こうとしたヨルヒに違いない。

逃げなければならなかったのに、リン…足以外は手も全く動かなかった。周りの人たちが意識を取り戻す中、両手は後ろ手に縛られたまま、ゆっくりと立ち上がった。私たちは皆生きていたが、どこに着地したのか分からなかった。

「生き残ってよかった」と智香は疲れた様子で言った。

「他に何を心配すればいいの？」シラは頭を上げて尋ねた。

"それ。"

見渡すと、彼女の曇っていた意識はゆっくりと霞のように消え去り、私たちは衝撃を受けた。ここは地球でも妖怪の世界の外でもない、どこかの未来都市だった。色とりどりの金属の建物と、奇妙な妖怪たちがいた。妖怪には見えず、人間や動物のような姿をしている。

風景や他の町並みから見ると、確かに都市のように見えるのは分かるけど、こんな街は違う。木々も、生き物も、動物も何もない。ただ、空中に浮かぶ道と、そこらじゅうに駅があるだけ。

「ここは何の場所？」麗華が辺りを見回すと、智香は不思議に思った。

「さっぱり分からないわ」とシラは言った。「でも、私たちは危険にさらされているのよ」

それなのに、妖怪の警備員らしき人たちに取り囲まれ、ブラスターを向けられていた。警察だったのか？きっと警察だろう。私たちは恐怖に震え、背中を互いに押し付けながら立ち上がった。追い詰められ、見知らぬ妖怪の警備員に完全に囲まれ、ブラスターを向けられていた。今にも撃たれそうだ。

「シラ、どうしたらいいの？」トモカはシラに目を向けながら尋ねた。

「変身！」シーラの声がかすかに聞こえた。試してみたけど何も起こらなかった。ドレスは形を変えず、髪は魔法のように生き返らず、力も発動しない。ああ、これは私たちにとって良くない。

「変身できないのよ」私は恐怖に顔を歪めながら、すすり泣いた。「他に何かいいアイデアはある？」

「逃げろ！」シラは叫んだ。それが彼女に道順を知らせる唯一の方法だった。私たちは彼女の後を追って、見知らぬ通りを歩き始め、プラットフォームからプラットフォームへと飛び降りた。息切れし、手錠は鎖で繋がれたまま、エイリアンの警官から逃げることができなかった。エイリアンのような警報音が通りを睨みつけ、私は顔をしかめた。

奴らはすぐ後ろについてきた。私たちは急いで別の道に隠れたが、手錠をかけられているので、もし何かあっても立ち上がることができない。膝をついて擦りむいた私は、痛みに呻きなが

ら急いで立ち上がった。もう逃げられない。私たちは息を切らしながら、急いで別の角へ向かった。

「妖怪の警官たちはまだ私たちのすぐそばにいるわ」と、私たちが来た道を振り返りながらシラは言った。

「いつまでも逃げられない！」私は息を切らしながら叫んだ。「ここは妖怪の世界じゃないのに。」

「さて、これからどうすればいいの？」と智香は尋ねた。「あの変な妖怪どもは、私たち全員を捕まえるまでずっと追いかけてくるわよ。」

「早く！こっちへ！」どこからか声が聞こえてきて、私たちは立ち止まった。見てみると、銀色の人形のような姿で、青い目が二つ光っていた。声はいかにも女性的で、こちらへ来るように合図していた。彼女を信用して、安全な場所へ導いてもらうべきだろうか？今は彼女を信用するしかない。

私たちは彼女の後を追って長い廊下を下り、路地を抜けた。廃倉庫のどこかで安全な場所にたどり着くと、ほっと一息ついた。それからロボットを一目見ようとした。このロボットは、まるでロボットのような形をしたヘッドセット、ウサギのような両耳、そして腕と脚を覆う太いロボットの手首と足首から判断すると、とても親しみやすい印象だった。目は真っ黒で、青い光が二つ点滅している。このキャラクターについて何と言ったらいいのか分からないが、とても可愛らしく、知的で、そしてなぜかとても現代的だった。

「ありがとう」シラは息を整え、落ち着きを取り戻しながら言った。「あの奇妙な妖怪たちから、かろうじて逃げられたわ」

「妖怪？」ロボットは尋ねた。その目は混乱したように、半分楕円形から完全に楕円形へと変化した。「変な言葉を使ったけど、大丈夫だよ。足に手錠をかけられているみたいだった。じっとしていろよ。」

彼女は腕に装備したレーザーを私たちの手錠に照射しました。手錠は赤く光り始め、やがて溶けて私たちの手から剥がれ落ち、私たちは解放されました。手錠は外れ、再び動かせるようになりました。ついに私たちは自由になったのです。

「本当にありがとう！」私はため息をつきながら手を動かした。「また手が動いて本当に嬉しい。」

「でも、ここは地球じゃない」と智香は言った。「故郷でも妖怪の世界でもない。一体どこにいるの？」

「落ち着いて、みんな。自己紹介させて。私はメッチャンといいます」とロボットは自己紹介した。「かつては、未来の社会に役立つ発明を発明したエイリアン集団のロボットアシスタントをしていました。」

「発明？」

「ええ。この惑星で最高の科学者たちのおかげで、あらゆるものを作ってきました。ところが、彼らがやって来たんです。オキマという、非常に敵対的なエイリアン集団が襲来したんです。研究所が火事になり、皆が逃げ出しました。中には火事で亡くなった人もいて、私だけが生き残りました。今は指名手配犯です。研究所を破壊して暴走したという噂があるんです。」

「ああ、鯉の尾」智香は息を呑んだ。「それは本当に悲しい。あなたが経験したことを本当に残念に思う。でも、ここはどこ？ 妖怪の世界には見えないけど」

「あなたはウクライナにいます。地球人は立ち入り禁止ですが、そこは奇妙な生き物でいっぱいです。」

「妖怪？」と私は推測した。

「いや。エイリアンだ。」

エイリアン？エイリアンって聞いたことない。トモカが教えてくれたんだけど、エイリアンって宇宙に住む地球外生命体で、肌の色も触手も違うし、頭も目も違うらしい。

「それで、オキマスとはどういう意味ですか？」シラは彼女に尋ねた。

「彼らは戦争のことしか考えていない、獰猛なイカのような種族です」とロボットは説明した。「ご存知の通り、彼らはエイリアンに対して非常に攻撃的で、自分たちと戦わせようとする者を捕ら

えています。科学的な目的でエイリアンを実験に使うことさえあります。それが彼らを強力でユニークな存在にしているのです」

「あいつらの仕打ちを見るのは本当に嫌だわ」とトモカは言った。「ところで、ここはユキア星だって言ってたっけ？」

「素敵な場所でしょう？」ロボットは微笑んだ。目は逆V字型に、ウサギの尻尾は喜びに揺れていた。「ここのエイリアンはみんなフレンドリーだったし、地球人の中にはエイリアンの存在を信じている者もいたけれど、私たちの正体はまだ秘密にされていない。数十億年前のビッグバンの後、地球外生命体は植物から天体ヒューマノイドへと進化した。時々、人間はみんな、エイリアンが平和的にやってくると信じているんだ。」

なんてすごいんだ。エイリアンは何年も前から存在し、人間の目には見えないこの異星の世界を築き上げてきた。私たちは言葉を失いました。突然、シーラは息を呑みました。

「あら、大変！リン！彼女はまだシャドウサイドと一緒に地球に閉じ込められているのよ。戻って救出しないと！」レイカは頷いて同意した。

「リン？」メッちゃんは首をかしげながらビープ音を鳴らした。「他に友達もいたの？」

「はい。私たちが逃げたとき、C.L.Iが彼女を捕まえました。」

「リンがいないと私たちは魔法少女にはなれないから、変身できないのよ」と私は答えた。

「リンはそんなことを私たちに教えてくれなかった」とトモカは言った。「私たちがはぐれた時、どういうわけか妖怪の世界でも人間界でもない、不思議な異星に飛ばされたの」

リンがいなければヒーローに変身できないのに、レイカはうなり声を上げて同意した。重要なのは、彼女を救う方法を見つけなければならなかったということだ。

「とにかく」姉は続けた。「ここから脱出する方法を見つけてくれる？リンを助けなきゃいけないの」

「もちろんできるわ。でも、まずはあなたたちを隠して、周囲に溶け込んでいるように見せないと。私も隠れなきゃ。エイリアンとコミュニケーションを取るために、このネックレスを4つ持って

るの。エイリアンの言語が聞こえるようにね」彼女は青い球状の飾りが付いた銀色のネックレスのようなものを取り出した。「科学者たちが作ったのよ。エイリアンの言語が分からない人でも、彼らの言葉が聞こえるようにね」私たちはそれを取り、彼女たちの首に巻き始めた。ぴったりフィットして、とても淑女らしい。

「ネックレスを付けたわね。あと一つ付け足すものよ」とロボットがビープ音を鳴らした。ロボットのお腹から青いローブが出てきた。それを私たちに渡してくれて、私たちはそれをじっくりと眺めた。

「このローブを着ていれば、君の正体をうまく隠せるよ」とメッチャンは言った。「そうすれば、エイリアンたちは君がここの出身だと分かる。銀河の彼方にあるポータルステーションに行かなきゃ。ポータルに辿り着けるようにね」彼女は振り返り、手を振って私たちに来るように促した。「じゃあ、行きましょう。宿屋を見つけてあげるから、君たちはゆっくりして、友達のところへ行けるようにね」

「本当にありがとう、メック」シラは感謝した。「あの女が何か悪いことをする前に、C.L.I.に戻れるなんて、本当に楽だったわ」

「それはひどいわ」と彼女は息を切らして言った。「もう、ぐずぐずしている暇はないわ。明日の朝、駅に向かわないといけないわ」とメッチャンは言った。彼女は先導してくれて、私たちにウィキアの街を案内してくれた。

辺りを見回してみると、この場所は本当に素晴らしい。どんな奇妙な店があるのか想像もつかない。通りには、私たちとは違うユニークなエイリアンの生き物が溢れている。エイリアン風のお菓子やぬいぐるみなど、エイリアンのおもちゃ屋さん、自分の姿が映る鏡の家、そして自分の姿と向き合うとエイリアンの服が違って見える不思議な鏡の家、エイリアンのお菓子屋さん、奇妙な魚がたくさんいる水族館、エイリアンの保育園など、本当に不思議な場所だった。まるで未来にいて、エイリアンが人間と同じように働いているかのような、不思議な感覚だった。地球の人間とは違うけれど、この場所は本当に奇妙で未来的だった。

智花はもうウィキアのことが好きになりつつあると言っていた。でも、白原のこととなると、姉は刻一刻と心配になってきた。顔のほとんどが不安で歪んでいる。「リンのことが頭から離れない」と彼女は言った。「C.L.I.がまだリンを捕らえているのよ。きっと拷問を受けて、よほど怖かったんでしょうね」

「大丈夫よ」と智香は彼女を安心させた。「C.L.Iに私たちの居場所を教えさせられるわけじゃない。それに、妖怪界に戻ってから彼女を助けてあげるから」

それがシラにとって最大の懸念だった。リンは拷問を受けるか、もっとひどいことには実験台にされるかもしれない。だが、そんなことは問題ではない。重要なのは、一刻も早く妖怪の世界に戻らなければならないということだ。

メッチャンは、今夜泊まるエイリアンの宿を見つけたと言っていました。部屋も決めてくれて、列車の切符も買ってくれるそうです。私たちの部屋には、奇妙なアメーバと頭に泡のついた海綿がいっぱい入った魚の巣と、円形のベッドがありました。エイリアンの街が一望でき、飲み物の自動販売機もありました。なんて素敵なんでしょう。未来的で、夜は活気があって綺麗です。

「ポータルステーションに侵入すれば、しばらくは待てるはずだ」とシラは言った。「そこに向かったら、リンを救出してシャドウサイドを阻止する」

哺乳瓶みたいな飲み物を取り出し始めた。中に奇妙な紫色の物質が入っていた。エイリアンのジュースだと思う。それに、奇妙なタピオカみたいなものが入っていた。ベリーかな？「どれくらい？」

「オキマは私たちを見つけたら攻撃してくるかな？」トモカは心配そうに尋ねた。「メッチャンが侵略者について警告していたのは知っているけど、ポータルステーションまで案内してくれる偵察船があるよ。」

「その通りだ」レイカがベッドにうつ伏せになりながら、シーラは言った。「リンを救うまでは準備万端だ。リンを救ったら、シャドウサイドとその計画を阻止する」

宿を出た翌日、エイリアン高速道路を少し走ってウキアン駅へ向かいました。メッチャンは、ポータルステーションへ行ける駅を見つける必要があること、そして他のエイリアンに気を付けることを教えてくれました。

「ポータルステーションまで連れて行ってくれる偵察船は見つかるはずだ」とメッチャンは小声で言った。「誰とも話さないし、目を合わせないで」

「エイリアンは誰も友好的じゃないのは分かってる」とトモカはささやいた。「でも、私の計算では、私たちは危険にさらされているかもしれないわ」

辺りを物色していると、メッチャンは固まってしまいました。顔を見てみると、目は針のように小さく、ローターは震え止まりませんでした。

「どうしたの？」と私は尋ねた。

よく見てみると、メッチャンがその場に凍りついていた理由が分かりました。トカゲのような頭、触手のような髪、タコの脚、サメの歯を持つ、奇妙な異星生物の群れが見えたのです。

メッチャンを追っているのは、きっとオキマスだろう。「そこのお前ら！」と叫んだ。「ロボットを渡せ、さもないと撃つぞ！」

「私たちを通り抜けなきゃ！」シラは叫んだ。

「待って！」姉が戦う前に、私は姉のローブを掴みながら叫んだ。「リンはいない！ 彼女がいないと、私たちは勇者姿に変身できないのよ！」

「マナコの言う通りだ！」メッちゃんも同意した。「逃げなきゃいけなかったんだから！心配しないで！私が何とかするから。」

頷きながら向きを変え、群衆の中を走り始めた。オキマたちが攻撃を仕掛けてきたが、その隙を縫うように走り抜けた。追ってくる触手トカゲのエイリアンからいつまでも逃げ続けるわけにはいかない。振り返ると、オキマの警備員たちがまだ追いかけてきた。群衆の中を走り抜け、彼らにぶつかりながら、

「どこに行けますか？」と智香は尋ねた。

シラは見回し、そう遠くないところに建物を見つけた。駅か倉庫か。もしかしたら、警備員から隠れられるかもしれない。「ここへ、みんな！」

私たちはシラの後を追って部屋に入り、一目散にドアを閉めた。窓から警備員に見られないよう、慎重に地面に伏せた。窓から光が差し込んだ時、私は口を覆って静かにしていた。

近くでは、シラとトモカがまだ震えながら、寄り添って歩いていた。後ずさりする足音が聞こえ、沖間隊の警備が既に解除されたことがわかった。私たちは無事だと安堵のため息をつき、地面に崩れ落ちた。

「きっと大丈夫よ」とシーラは言った。「オキマたちは通り過ぎて、メカちゃんを助けてあげるわ」

「忘れないで、リン」と私は言った。

しばらく座ったままでした。最初は、ゴロゴロという音が聞こえて体が震えていることに気づきませんでした。それから、まるで重力に振り回されるかのように、突然宙に浮いていることに気づき、衝撃を受けました。私たちは皆、飛んでいたのです。宙に浮いていたのです。

「何が起こっているんだ？」私は叫んだ。

智香は窓辺に浮かんで行き、空が鮮やかな青ではなく黒くなっているのに気づいた。「宇宙にいるの？」彼女は驚いて息を呑んだ。

ようやく、何が起こっているのか、そしてなぜ私たちが飛んでいるのかが分かりました。あの構造物…それは貨物室で、船のものだったのです。

私たち全員が彼女の側に集まると、シラは「宇宙？」と尋ねました。

「私たちはきっと宇宙船に乗ったのよ…」と彼女は息を呑みながら説明した。「そして私たちは列車ではなく宇宙へ運ばれているのよ…」

突然、肺が弱くなるのを感じて、喉を押さえました。呼吸が苦しくて、周りの空気がどんどん薄くなってきました。本当に、本当に…「みんな、私だけ？それとも息苦しくなってきた？」

シラ、レイカ、トモカは困惑した顔で私を見た。「どういう意味？」シラはもがき、喉を押さえて息を切らした。トモカも同じように息を切らし、レイカも息をするたびに咳き込んだ。まるで溺れていくようだった。水中に長く潜っていて、声も出せないような感覚だった。「ああ、だめ…息ができない…」

「この部屋には空気がないんです。

口を覆い、むせ返り、窒息し始めた。肺が痛み、視界がぼやけてきた。「どうすれば…どうすれば…できる…？」

「息を…しないで！」トモカとシラが同時に言った。私も目を閉じ、息を止め始めた。姉たちも同じように息を止めた。ウミガメは何時間も息を止められるが、ミュータントDNAのせいで数分しか続かなかった。このまま走り続けて、この貨物室に来なければよかったのにと思うばかりだ。だが、私たちは運命づけられていた。宇宙空間の貨物船の中で、息もできない運命だ。ゆっくりと深い眠りに落ちていくにつれ、私はもはや意識を感じることができなかった。

第11章

シラの視点

どれくらい眠っていたのかは覚えていませんが、最後に聞いた時は、姉妹と私が貨物室にいて、酸素不足で船首から突き落とされたのでした。頭は真っ白になり、体が動かなくなっているのを感じます。目が覚めることも、呼吸することもできませんでした。肺が弱すぎて、息を吸うことができませんでした。

足音が近づいてくるのを聞き、意識を取り戻して息を止めようとしたとき、背の高い生き物たちが一団となって私を見下ろしているのが見えたような気がした。何を言っているのかは聞こえなかったが、何かつぶやいているようだった。

「この中に密航者がいる。もし貨物室に侵入していたら、バブルコンバーターを持ってきてくれ。」

視界がはっきりしてくると、触手のようなものがマスクのようなコンバーターを顔に巻き付けるのが見えたような気がした。私は深く息を吸い込み、他の姉妹たちも息を吸い込んだ。目はまだ閉じていたが、皆呼吸が戻ってきた。しばらくして、少し目が開いた。彼らは私たちを持ち上げ、背中に手錠をかけ、連れて行き始めた。

その間、メッチャンは船に忍び込み、捕らえられたに違いないと思った。彼女は中央基地の部屋で、オキラ提督の前にひざまずかされた。

「メッチャン、ずいぶん時間が経ったな」と彼は言った。「君と科学者たちに兵器の開発を依頼した時、君は逃げられると思っただろう。君は反逆し、自分がウキアの研究所を破壊した張本人だと思い込んで逃げ出した」

「研究所から逃げ出して以来、君を捕まえようとしていたんだ」と警備員は言った。「だが、君には普通の市民としての権利を与える。そうすれば、この惑星で逃亡ロボットとして生きることはできなくなる。影に隠れるのではなく、普通に生活できる。」

「そう思う？」メッチャンは目を大きく見開いてビープ音を出した。「それはとても親切だけど、私は悪のための武器は作れないわ。それが破壊をもたらすかもしれない。何百万人もの罪のない命が失われることになるわ。」

オキラは怯えたロボットを睨みつけたが、通信機のビープ音が聞こえた。ガントレットを見ると、映像が浮かび上がった。「すみません、提督。偵察船の貯蔵室で何か見つかりました。」

「まあ、いいものにならなきゃ」と彼は唸った。バブルスクリーンが作動し、そこにはオキマたちが捕らえられた、ぐったりとした4人の我々を折り畳んでいた。

「私たちが中に入ると、意識を失って横たわっている奇妙な異星人のウミガメを発見しました。」

メッチャンは写真をよく見て、恐怖に目を見開いて息を呑んだ。「ウミガメ娘だって？！」

「これらの生き物を知っていますか？」

「はい！どうか彼らを傷つけないでください！」と彼女は懇願した。「彼らはただの無害なハイブリッドよ。ミュータントの軍隊を作ろうとしているシャドウサイドを止めるために、故郷に戻ろうとしていただけなのよ。」

「心配するな！」道化師の頭巾をかぶった別のロボットの明るい声が響いた。「奴らを生き返らせてやる。実験体として、そして戦士として！」

「そうだな、あの娘たちを生かしておこう。お前たちは武器の開発に取り組め。もし拒否すれば、仲間は処刑されるぞ」

私と麗華、智香、真奈子が部屋に連れて行かれると、彼らは私たちの服を脱がせました。青銅の鎧の胸当てと、絹のラッシュビキニを着せられましたが、着心地が悪く、服はひどく部族風に見えました。

彼らは私たちを力で空中に浮かせ、「スパイラルインプラント」と名付け、四つん這いにさせました。肩には奇妙な螺旋状の模様のタトゥーが彫られていました。本当に痛くて、皮膚が血で沸騰し、体がびくっとしました。

螺旋状のインプラントのせいで弱り果て、全員が地面に倒れていた時、彼らは私たちを持ち上げ、ゆっくりと牢獄に入れ、奇妙な機械に縛り付け、足首と手首を掴んだ。そうすれば、私たちも実験台であることを沖間一行に見せることができる。

腕や足をひねったり動かしたりすることはできなかったが、頭はまだ動かせる。周りには、実験や、これから直面するであろう戦争に備えて、同じように機械に縛り付けられた囚人たちがいた。私たちもようやく意識を取り戻し、ようやく意識を取り戻した。混乱しながら、手錠をかけられた手を見つめ、動こうと必死に抵抗したが、その手は私をしっかりと掴んでいた。

麗花は腕を動かそうともがいたが、無駄だった。「手錠が固すぎる」と私は言った。「私たちはここに閉じ込められているんだ」

私たちは長いため息をつき、頭を下げて、これからどうなるのかと考えた。私たちは沖田たちの実験台に過ぎなかった。リンがいなければ、自由になって変身することもできない。一体私たちはどうなるのだろう？戦争に駆り出されて、まるで実験台のように扱われるのだろうか？

「生きて出られる見込みはない」と声がした。左を向くと、もう一人の囚人らしき人物が見えた。巨大な毛皮の房、巨大な髪、大きな耳、そして房のついた長い尻尾を持つ、奇妙なエイリアンだった。「もう救えるものは何もない。戦争と拷問だけだ」

「あなたは誰ですか？」マナコは尋ねた。

「私はズブニア出身のフリアン、プリズムです」と彼女は自己紹介した。「私たちはかつて、暖かい小屋ときれいな水の中で暮らす平和な異星人でした。そんな時、オキマ族に襲われたのです」

「彼らが原因だったの？」と智香は尋ねた。

「はい、彼らはとても冷酷で、異星人を捕らえて強力な武器に変えてしまいます。私たちは逃げようとしましたが、彼らは私たちの家を破壊しました。」

レイカはうめき声を上げて逃れようともがいたが、無駄だった。「力を無駄にしないで」プリズムはため息をつき、ゆっくりと頭を下げた。「オキマたちがカメラ映像であなたの動きを見ているわ」見上げると、天井にカメラが設置され、黄色い目が左右に大きく開いて私たちを監視していた。

「それで、彼らは私たちに何をするつもりなの？」私は優しく尋ねた。「殺すつもり？」

「いいえ。あなたはこれから宇宙の凶暴な怪物と戦い、サーカスのような芸をさせられるでしょう。時には幻覚を見せて奇妙な気分にさせられることもあります。かつてオキマたちは宇宙各地や様々な惑星で彼らを捕らえ、戦士へと変えていました。あなたはブラッドクローと対峙することになるでしょう。警告しておきますが、彼は非常に敵対的です」とプリズムは言った。「彼はあなたと同じように巨大な亀ですが、触手と黄色い目を持ち、あなたよりも大きくなっています。弱点を見つけるかもしれません。それは彼のむき出しの心臓です」

「そうですね、アドバイスをありがとう」と私は優しく言った。

「お姉ちゃん」マナコが突然鼻をすする音がした。振り返ると、妹が泣き始めていた。大きく潤んだ目から涙が流れ落ちていた。「お家に帰りたい」

"あまりにも！"智香は鼻をすすった。「リンが恋しいよ。

妹たちが泣いていることに驚いた。それだけでなく、麗花も泣いている。彼女は泣いてはいなかった。涙さえ一滴も出ていなかったのに、今は泣いている。妹たちはきっと妹たちの気持ちを理解していた。家に帰って凛に最後にもう一度会いたいけれど、ここから出られない。私もそうだ。涙が止まらなくなってきた。

「お願い、やめて」私は鼻をすすりながら言った。「もう、あなたたちのせいで泣かされてる」唇を噛んだ。傷だらけの目と澄んだ目に涙が流れ落ちた。絶望を感じた。こんなところに閉じ込められていては、世界を救う術などない。

沖間警備員が現れるまで、どれくらいそこにいられるか分からなかった。彼は私たちの顔を見上げた。涙で顔が濡れていた。

「君たち起きろよ、女の子たち」と彼は言った。

スイッチを引くとガラスの檻が開き、機械は私たちを解放した。再び動けるようになったが、まだ奴隷のままだ。看守が私たちを前に押しやり、私たちは自分の独房のある場所を振り返った。

「生き残ってね！」私たちが移動すると、プリズムが私たちに呼びかけました。

彼らは私たちを闘技場へ連れて行き、武器として槍を渡して、闘技場の真ん中に引きずり出した。まぶしい光に目が細くなり、痛みを感じた。辺りを見回すと、闘技場の中にいるのがわかった。ここに来るのは初めてで、たくさんのオキマたちが私たちを取り囲み、皆の視線もオキマたちに囲まれ、じっと見つめていた。

リングの中央には、奇妙な道化師のようなエイリアンロボットが浮かんでいた。「素晴らしい、壮観なサーカスアリーナへようこそ！ 私はピロエアン、リングマスターです。今回のメインイベントでは、敵は4人のチャンピオンと死闘を繰り広げます。これは世界で最も血に飢えた、残酷なサーカスショーになるでしょう！」

"サーカス？"マナコが私にささやきました。

皆様、世界で最も凶暴なモンスターをご紹介いたします。彼は皆を虐殺する恐ろしい獣です！ブラッドクローに拍手喝采を！

門が開き、迫り来る敵が私たちの前に現れるのを見守った。心臓が張り詰め、これからどんな敵と対峙するのか覚悟を決めなければならないという思いが伝わってきた。彼は私たちよりも大きく、背中、腹甲、尾には甲羅をまとっていたが、その顔は鋭い棘で覆われ、怪物のような顔をしていた。目の右側は黄色、反対側は赤かった。大きく開いた口からは鋭い牙が何列も突き出ており、両腕には長いオキマの触手が振り回されていた。

「諦めるな、女の子たち」と私は言った。女の子たちに獣に攻撃するように合図し、私たちは獣の触手と噛みつきをかわしながら突撃を始めた。飛び越えて槍を振り上げたが、ブラッドクローがそれを掴み、向こうへ投げ飛ばした。私は後ろに下がり、そして倒れた。間一髪で素早く身をかわし、立ち上がると、レイカと他の女の子たちがその醜い背中に飛び乗って引っ張った。

しかし、あの怪物のような獣に私たちは圧倒されてしまった。「あいつは強すぎる！」マナコは傷だらけで叫んだ。「どうすればいいの？」

何をすればいいのか分からなかった。ブラッドクローはあまりにも強くて、触手で私たちを刺し貫くことができた。

見上げると、トモカはブラッドクローの体に何かが映っているのに気づいた。胸には青い心臓がむき出しになっていた。プリズムがブラッドクローの弱点は心臓だと教えてくれたのを思い出した。トモカは残っていた槍の残りを慎重に掴み、胸に突き刺して傷を負わせた。苦痛に咆哮を上げながら、堕落した獣は足を引きずりながら門へと戻っていった。我々は勝利を確信していたが、オキマ一家はブーイングを浴びせた。それは我々にとって、決して良い褒め言葉ではなかった。

「おや、どうやら女の子たちは凶暴なカミツキガメを倒したようだな」とピロイアンは言った。「なんてすごいんだ？ ベタベタした汚水の塊と化していたかもしれないのに。」

かなり自信があったけど、新しいことはきっと拷問になるだろう。沖田たちは一日中サーカスの芸をさせられて、食事はたった一度しか出なかった。本当にひどい。ちゃんとした食事も摂れなかったせいで、私たちはガリガリに痩せ細っていった。観客に見せつけるように怪物と戦わせられたり、幻覚を見るための機械で奇妙な液体を血液に注入されたりもした。

言葉では言い表せない。まるでおもちゃみたいで、感覚がひどく乱れていた。支配されているように感じるから、その部分がずっと嫌だった。プリズムは、警備員に薬を飲まされたがあり、

食料不足で痩せ始めたと説明していた。目の下にクマができ、体内の栄養が失われたことで筋肉が萎縮し、奇妙な液体の幻覚から逃れようとしても動くことさえできなかった。

幻覚を見始めてから、実験されている夢を見続けることもあった。目はすっかり眠く、頭の中は果てしない夢でいっぱいだった。妹たちがまだ幼かった頃の夢を見た。母と暮らし、繁栄し、失われた人間の貴重なものをたくさん集めていた、我が家のジャングルでの夢。

毎日、私たちは拷問を受け、モンスターと戦わされ、パフォーマンスをさせられ、大量の薬を投与された。オキマスは私たちを監視し、実験し、奴隷にされた。時々、母やリン、メッちゃんのことを考え、いつまで大丈夫だろうかと自問した。世界のこと、シャドウサイドを止めなければどうなるのかと考えた。

目が覚めてその効果が消えると、私たちは再び監禁された檻の中に戻った。

「あなたたちは生き残ることができて幸運だったに違いない」とプリズムは言った。「そして何とか諦めなかった。」

「どうして私たちが必要なのかしら？」と私は尋ねた。「何が起こっていたのか、そもそもどうやって私たちを捕まえたのか、全く理解できない」

「ここ数日、何も食べていないんです」とマナコは弱々しく目を伏せながら言った。「私たちを見て。すごくお腹が空いているのよ」

「ああ」プリズムはため息をついた。「妖怪や宇宙人の多くが魔法の力を持っているのは知っているけど、君たちは本当に特別だ。あの青い髪の女性は君たちを利用しようとしたんだ。スーパーソルジャーに変えて、力を奪おうとしたんだ」

「シャドウサイド？」と智香は推測した。

「それだ。彼女は地球上のすべての人間を滅ぼそうとした。人間は複雑な生き物で、みんな善良なのよ。」

「気づかなかった」と私は呟いた。警備員が再び立ち上がるのを待つ間、私たちは待った。彼らは再び私たちを解放し、再びアリーナに戻った。今度はオキマの兵士たちと対峙していた。

サーカスにどれくらいいたのか、思い出せない。数日？数週間？それとも数ヶ月？シャドウサイドがまだ邪悪な計画を実行中であることを、私は今でも強く願っている。

「さあ、みんな」とピオンは切り出した。「今、我らの最弱の少女たちが沖軍と対峙する。果たして誰が勝利するのか？ これから始まるのは、これまで見たこともないような、血みどろの泥沼バトルだ。

戦闘が始まる前に、奇妙なことが起こった。戦闘の最中にポータルが開き、黒い鎧を着た兵士たちが突如現れ、私たちを包囲し始めたのだ。

「ちょっと待って」ピオンはショックで顔を歪めながら繰り返した。「こんなことが起こるはずじゃなかった」

兵士たちを見て、私たちは恐怖に息を呑みました。彼らは私たちを捕まえようとしたまさにその兵士たちで、今ここにいるのです。一体全体、どうしてこんなところに現れたのでしょう？

「動くな」と看守長が警告した。「君をC.L.I.に連れ戻し、再び排水装置にかける」

またか、と私は恐怖に震えながら思った。私たちはもう終わりだ、この闘技場からは逃げられないと悟った。突然、メッチャンがバルコニーから現れ、兵士たちに向けて銃を乱射し始めた。彼女は私たちの方を向く前に、兵士たちを全員射殺した。この日が来ることは分かっていた。彼女は私たちを救い、この恐ろしい悪夢から救い出すために来てくれるのだ。

「今すぐ行かなくちゃ！」と彼女は叫んだ。

今がチャンス！出口に向かって走り始めたけど、出口に行こうとした麗花、智香、真奈子を警備員が取り囲んだ。まるでネズミのように完全に閉じ込められた妹たちを、警備員が取り囲んだ。

「女の子たち！」私は叫んだ。

「もう行ってくれ！」智香は必死に叫んだ。「大丈夫だよ。」

「あなたはシャドウサイドを止め、妖怪の世界でリンを解放することができるでしょう」とマナコは付け加えた。

「あなたを置いて行けない！」私は必死に叫びました。残った目には涙が浮かんでいました。

「他に選択肢はないよ！」メッチャンは私の腕をつかみながら言った。

鼻をすすりながら、私はメッチャンに残して廊下へ出て行こうとした。「待って！メッチャン！プリズムを連れ出さないと！」

「プリズム？」メッチャンがビープ音を鳴らした。「プリズムって誰だ？」

「彼女は新しい友達だから、ここに置いていくことはできない。」

メッちゃんは断れないけれど、私たちは急いで独房へ向かった。警備員を数人倒し、キーカードを下ろしてプリズムを解放した。

「何が起こっているの？」と彼女は尋ねた。

「私とメッチャンがあなたを解放するわ」と私は彼女に言った。「でも、後ろにいる姉たちは警備員と戦うために残るわ」私はプリズムを掴み、全速力で列車に向かって走り始めた。

列車に乗り込んだ時、私は姉妹たちのいる場所を一度も振り返らなかった。私たちは安全だった。列車は母船から離陸し始め、生き残ったのは私とメックとプリズムだけだった。

逃げられてホッとしたけれど、妹たちはまだ閉じ込められていた。列車は私たちを沖間宇宙船から遠くへ連れて行き、私たちが遠くへ来る頃にはどんどん小さくなっていった。

プリズムは長いため息をつき、前足で額を拭った。メッチャンは安堵のため息をつき、目を閉じた。「本当に運が良かった。もしオキマ宇宙船に残っていなかったら、あの警備員に捕まっていたかもしれないのに。」

「でも、わかってないじゃない！」私は怒鳴り、相手の注意を引いた。頭を下げ、両腕を押さえた。「姉さんたちはまだ闘技場にいる。私は失敗した。」

「何とかするよ」とメッちゃんは言った。「君の妹たちとリンを救出する。作戦を考えられるのは少なくとも僕たち3人だけだ」

「どうしていいのかわからない」私は泣き言を言い、目から涙があふれてきた。「もし姉妹たちと一緒に逃げられなかったら、こんなひどい目に遭うことはなかったのに」

「心配しないで」プリズムは彼らに言った。「私は彼らを信じている。彼らは、あの冷酷な女が世界を破滅させようとしているのを止められるよう、あなたが事態を正してくれることを期待している。」

「でも、一人では無理だ」と私は答えた。「シャドウサイドは強すぎて、一人では倒せない」

「必ず全てを正すと約束する」とロボットは私に約束した。「シャドウサイドを止めて、妹たちを救出する。皆が君を英雄として信じるようになり、妖怪界は救われるだろう」

C.L.Iとシャドウサイドから姉妹たちを救える可能性がまだあると信じ、私は少し微笑み始めた。しかし今は、全人類と世界を救うことだけが私の唯一の希望だ。

第12章

メッチャンとC.L.I.ビルに戻ってきてから、ずいぶん時間が経っていた。ポータルを出て、出発点、リンが宇宙冒険の前に捕らわれた場所に戻ってきたばかりだった。マッシュルームヴィル、ヨバイヴィル、ココヴィルと長い旅路だったが、ようやく到着した。

同じ場所に戻ってきてホッとしたけど、だんだん怖くなってきた。リンはまだ中にいるから、急いで助け出さなきゃいけない。

「もう行かなきゃ」とプリズムは言った。「自由になったんだから、住む場所を探さないと」

「お大事になさって」メッチャンは言った。プリズムは頭を下げ、新しい場所を探しに出て行った。彼女がいなくなった今、私たちは頭上にそびえ立つ建物を見上げた。私の思考は次々と駆け巡った。姉妹たちは取り残され、捕らえられてしまった。今、姉妹たちを救うために、私だけが立ち向かわなければならない。

暗い灰色の雲が空を覆い尽くしている。心臓はドキドキと鳴り響き、冷たい空気に背筋が凍りつく。塔の上を見上げると、空にそびえ立つその暗いシルエットが見える。

「もし中に入ってリンを救えたら」とメッチャンは話し始めた。「君も魔法の力を取り戻せるかもしれない。でも、建物の中に入るのはとても危険な作業になるよ」

「簡単じゃないよ」と私は言った。「単独任務だからね」

「心配しないで」と彼女は言った。「できる限り案内します。セキュリティと建物をスキャンしたので、通り抜けられるかもしれません。そうすれば、セキュリティカメラとレーザービームをハッキングして停止できます」

うなずきながら塔を登り始め、通気口までたどり着いて中に入った。中に入ると、メッチャンがカメラと照明を消して仕事を終えた。天井を這いずり降りていくと、メインロビーに出た。

少なくとも警備員は気を取られて、何が問題なのか確認する時間ができた。私は剣を掴み、廊下を歩き始め、カメラをすり抜けてレーザートラップに遭遇した。

一歩間違えれば死んでしまう。梁に当たらずに通り抜ける。私たちがここに来てから、警備員は警備を倍にしたに違いない。捕まって血を抜かれるわけにはいかない。

通り抜けると、廊下へと向かった。リンと妹たちが無事だといいのだが。科学者たちが彼女たちに何をするか、誰にも分からない。動き出すドアを勢いよく開けると、数人の警備員が、まだ容器の中に閉じ込められたリンらしき女性を守っているのが見えた。彼女はまだ生きている！

「下がってろ」と私は警告した。「リンのためにここにいるんだ」

「本当か？」警備員が冷笑した。「ハイブリッドを捕まえろ」警備員たちがこちらに向かってきたが、私は抵抗した。拳で殴り倒し、飛び込んで頭上を飛び越え、蹴り飛ばして部屋の向こう側へ投げ飛ばした。警備員たちは壁に激突し、小瓶を割って床に倒れた。わざとやったわけじゃないが、証拠を全て隠蔽しておいたおかげで、誰も邪魔をしなくて済んだのは良かった。

警備員の一人が麻酔銃で私を撃とうとしたが、私は身をかわして彼の股間を蹴り、化学廃棄物のように叩きつけた。毒の液体が彼の全身に広がり、彼は悲鳴を上げて溶けてしまった。彼はぐったりと力を失い、頭を垂れた。

兵士全員を倒したのを見て、私は安堵のため息をついた。妖精の守護者を救えたなんて、本当に大成功だ。捕まるかと思ったが、生き延びて彼らを食い止めることができた。リンの方を向くと、彼女はガラスに手を置き、小さな虫のような羽を羽ばたかせながら、外に出してくれと懇願していた。少なくとも彼女は無傷だった。

「リン」私は声をかけた。「大丈夫？」

「大丈夫よ！」ケージの中から声が聞こえてきた。「この容器から出して！」

それを掴んでカプセルを引き抜き、リンを解放してから地面に叩きつけた。カプセルはガラスの破片に砕け散り、床に散らばった。

「戻ってきてくれて本当に嬉しいわ」と彼女は微笑んで言った。「みんな死んだと思ってた」彼女は飛んできて、私の胸に抱きついた。離そうともしなかった。友が自由になったことを嬉しくて、涙がキラキラと光るのを感じた。「本当に大丈夫なの？」

「大丈夫よ」と私は彼女に言った。「あなたを助けるために、ここまで戻ってきたのよ」

リンは顔を上げて、誰もいないことに気づいた。困惑した表情で私の方を向いた。「ちょっと待って、お姉さんたちはどこなの？どうして一緒にいないの？」

頭を下げた。頭の中で記憶が蘇ってきた。姉たちのことを何て言えばいいのか、全く分からなかった。気持ちを落ち着かせ、冷たく胸が張り裂けるような声で言った。「あの人たちは捕まったのよ。私を救うために、彼女たちは犠牲になったの。全部、あの警備員のせいよ」

「C.L.I」妖精は息を切らして言った。「でも、どうやってここに来たの？」

「なんとかウキアから逃げ出したんだけど、オキマスに捕まってサーカスの競技場に送られたんだ。それで僕は数人の友達と逃げたんだ」と私は説明した。「姉の分は助からなかったんだ」

「ああ、大変。これはまずい」彼女はパニックになり、私の腕から飛び出した。「妹たちが捕まったら、世界を救うのはもう無理だ。シャドウサイドが世界中のミュータントを解き放ち、人類を滅ぼす前に、妹たちを救わなければならなかった。まずは変身しよう」

リンの助けのおかげで、スーパーヒーローの姿に戻ることができた。最後に変身したのは本当に久しぶりだった。魔法の力もドレスも、何もかもが恋しかった。変身を終えると、リンと廊下を下り、階段を上っていった。一歩一歩、頂上へと登っていった。

「ところで、どうやって私を見つけたの？」と彼女は私の方を向いて尋ねた。彼女は私がなぜここまで来たのか分からず困惑していた。

「そうよ」メッチャンは私の手首に装着した通信機から声を上げた。「シラと彼女の姉妹たちが捕らえられる前に、ウキアで彼女らと友達になったの」

「ねえ、それは誰？」リンは困惑しながら尋ねた。

「心配しないで」私はリンを安心させた。「メッちゃんは友達よ。命を救ってくれたし、この建物を通り抜けるのを手伝ってくれるわ」

「そうよ。私を助けてくれたのはシーラだったの」と彼女は言った。「今度は私が皆さんを助けるためにお役に立てているの」

メッチャンが味方でいてくれて嬉しくて、私は微笑み始めた。彼女は廊下のずっと先まで案内し、警備員や罠が隠されていないか警告してくれた。彼女は彼らの注意をそらし、廊下のカメラを破壊し、レーザービームを停止させた。

廊下を進み続けると、扉の向こう側らしき場所に辿り着いた。その部屋に入るのは嫌な予感がしたが、この部屋の向こうにどんな秘密が隠されているのかをどうしても知りたかった。

中に入ると、メインの研究室にいた。研究室は奇妙な液体のポーションでいっぱいで、中には近くの何かと繋がった青い粘液の大きな容器もあった。私は驚きと同時に言葉を失ったが、リンはここに閉じ込められたことでまだトラウマ的な心臓発作を起こしていた。

見渡すと、黒いボディスーツを着た3人が排液機に縛り付けられていた。顔は白い悲しい顔の組織、おそらくマスクで覆われていて見えなかった。

これらの姿には、どこか見覚えのある匂いや存在感があるような気がした。まるで私の世界にいた頃の森の匂いと同じだった。辺りを見回すと、部屋全体が静まり返り、私のそばにいるリンは、羽を羽ばたかせ、恐怖で目を大きく見開いて、とても不安そうだった。

そこには誰もいない。機械の中にいるのは私と、あの謎の3体の体だけだった。顔を上げると、青い血が満たされた容器へと繋がるチューブが見えた。そして反対側では、奇妙な紫色の物質が体の中に注入されているのが見えた。智香が話していた、奇妙な精神支配血清、紫色の粘液のことを思い出した。それは、レイカがココベリーで見つけたミューエックスだった。

「やっとここに来たか」と声が返ってきた。その返事を聞いて、私は驚いて顔を上げた。シャドウサイドは私がもうすぐ到着することを知っていて、ついに私を見つけたのだ。

「シャドウサイド！」私は囁いた。「私の姉妹はどこだ？何をしたんだ？」

「わからないの？目の前にいるのに。」

三つの姿がまだ機械の中にいる場所を振り返る。シャドウサイドが続けると、リンは不安げなすすり泣きを漏らした。「私の護衛がお前の姉妹全員を捕らえ、血を全て吸い尽くし、私が開発した精神血清で置き換えた。今や彼らは世界を征服するための完璧な兵士だ」

「この魔女め！」私は叫んだ。血中に怒りが渦巻いていた。「自分が何をしたのか分かっているのか！？」

しかし、冷酷な女は気にしなかった。「私が話すわ、お嬢さん。私の計画はほぼ完了。世界は永遠に私のものになるわ。そしてあなたを捕らえて、奴らの仲間にすることができるわ」

シューという音がして、姉たちの吸引が終わったことに気づいた。私とリンは身構え、身を守る態勢を整えた。ストラップとマスクが解放され、二人は機械から出た。

よく見ると、姉妹たちの変わり果てた姿に恐怖を覚えた。肌はひどく青白く、まるで蚊に刺されたように血を吸い尽くされたかのようだった。髪は短く刈り込まれ、そよ風に揺れる美しい髪はもう見られない。真奈子の輝く金色の瞳は鈍い金色に染まり、無表情だった。智花の眼鏡は外され、青い瞳は輝きよりも暗く鈍い。麗花の赤い瞳もまた鈍く、その表情には何も感じられなかった。

彼女たちはもうカラフルな服を着ていませんでした。3人とも胸にC.L.Iのロゴが入った黒いジャンプスーツを着ていました。それが彼女たちがプロジェクトH.Y.B.R.I.D.の一員である証です。

姉妹たちが洗脳されているなんて信じられず、涙が目からこぼれ落ちていくのを感じました。姉妹たちは皆、いなくなってしまったのです。

「今、分かったか？」ヨルヒが尋ねた。「奴らの血を吸い尽くし、精神血清を注入した。奴らは私の所有物全てを聞き、今や私の実験台、私の兵士となったのだ！」

喉の奥に塊が詰まったような感覚に襲われ、私はすすり泣いた。姉妹たちが私の方を向いた。シャドウサイドの命令で魔法戦士に変身できないのは分かっている。魔法の力がなくても、彼女たちはまだ戦える。

「戦え、兵士たちよ」シャドウサイドは命じた。「そして、この愚かな娘はさっさと消えろ」

その後、フィードバックは遮断され、私は洗脳された姉妹たちと戦うことになった。

「シラ」リンが声を張り上げて、私の意識を茫然とさせた。彼女の声は悲しげだったが、決意は固かった。「他に選択肢はない。姉妹たちと戦って、彼女たちの支配を取り戻すしかない」

「私…もう戦えない！」私は叫んだ。涙がこぼれ落ち、絶望した。「自分の姉妹とは戦えない。私には強さがない！」

「そうしなければならない！さもなければ、シャドウサイドに世界を乗っ取らせてしまうのか？」

ため息をつく前に、唇を力一杯噛んだ。他に方法はないのかもしれない。拳を握りしめ、脳で操られた姉妹たちを睨みつけた。攻撃を開始し、姉妹たちの攻撃をことごとくかわしたが、何度抵抗しても、彼女たちは私を地面に叩きつけた。

床に倒れた瞬間、甲羅が破れるのを感じ、血を吐き出した。弱々しく頭を上げると、洗脳された姉妹たちが近づいてくるのが見えた。傷つけることはできないが、起こさなければならない。彼女たちは私の姉妹なのだ。

「あなたと戦いたくない」と私は懇願した。何度試みても、彼らは襲いかかってきた。私は傷つき、殻は割れ、血を吐いた。私は弱り、傷つき、姉妹たちと戦うことができなくなった。私が姉妹たちを振り返ると、冷たい目が私の魂の奥深くまで見つめていた。もう無理だ。姉妹たちとの戦いで、私はすでに弱っていた。しかし、母の言葉を思い出し始めた。

「シーラ、君は時に英雄の心を持つかもしれないが、強い。ただ生き続けるだけだ。」

いや、戦い続けなければならなかった。姉妹たちが疲れ果てていく中、私は必死に立ち上がり、予想以上に激しく、力強く戦い始めた。真奈子を押さえつけ、ひるませた瞬間、智香が飛びかかって蹴りを入れ、麗華が顔面を掴んだ。蹴りで真奈子を吹き飛ばし、素早くかわして姉妹全員が隣り合わせになったことを確認した。そして、とどめのパンチを放ち、三人を地面に叩きつけた。

どれくらい前から怪我をしていたのかは分からなかったが、兄妹たちに勝ったことは分かっていた。彼らは立ち上がることも、動くこともせず、じっと動かなかった。リンが妹の傍らに浮かんでいるのを見て、私は小さく息を吐いた。

「血は抜かれてしまった」と彼女は心配そうに言った。「シャドウサイドはきっと粘液を携えている。彼女にその粘液を注入させて、人類をミュータント兵士に変えて自分の命令に従わせるわけにはいかない」

「リン、見て！」私は叫んだ。リンは私の視線を追うと、確かに、奇妙な黒い結晶体が姉妹たちの体に現れたのが見えた。「一体何が起こっているの？」

「彼らは彫像、水晶の彫像になってしまいます。大切な分子を含む血がなければ、彼らは死んで結晶になってしまうのです…」

本当に打ちのめされました。ただ妹たちを救いたかっただけなのに、もう手遅れです。「もう方法はないのでしょうか？」

「きっとそうだ」とリンは言った。「彼女たちの血を戻して、シャドウサイドを殺さなければならなかった」

「そうしなかったらどうなるの？」私は心配しながら尋ねました。

「それなら、彼らを救うチャンスはない。これからは俺がお前と戦う。下がってろ」リンが流れ始めたので、私は数フィート離れた。すると、リンは翼を保ったまま、花の勇者姿で元の姿に戻っていた。髪はふわふわになり、頭にはティアラを飾っていた。彼女の完全な姿を見ることができたことに、私はとても驚いた。

「さあ、急ごう」とリンは言った。

階段を上る途中、私は通信機を取り出し、ロボットの友達に言いました。「メッちゃん、他の妖怪を全員解放して、研究室から避難するように伝えて。」

「心配しないで」とメッチャンは言った。「今行くよ」

ビープ音が鳴り、メッちゃんが出てきたことがわかった。私は気持ちを落ち着かせ、最後の戦いが待ち受ける階段へと向かった。

第13章

リンと屋上に着いた時には、既に嵐が迫っていた。空を見上げると、頭上には怒りに満ちた暗雲が広がっていた。もうすぐ雨が降り出し、全てが劇的なものになるだろう。屋上に着いてから見上げると、シャドウサイドがいた。彼女は巨大なアンテナのスロットに、世界を洗脳し変異させるのに十分な量の粘液を仕込んでいた。

深呼吸をして、拳を握りしめた。「シャドウサイド、もう時間切れだ」

シャドウサイドは振り返り、私の方を向いた。彼女は嬉しそうではなかったが、私が通り抜けたことに感心していた。「よくここまで登ってきたな。私の兵士たちがお前を倒せると思っていたのに。もう手遅れだ。スライムがスロットに注入された今、地球中に広がり、全ての人間を私の兵士に変えてしまうだろう」

「正気じゃない！」リンは叫んだ。「スライムを放出したら、人間は皆死ぬ！」

「それが問題だ」とシャドウサイドは答えた。「人間は存在せず、あらゆる動物がモンスターになる。少女の頃から、人間が存在しない世界を夢見てきた。そしてハイブリアが発見された時、初めて計画を立てた。粘液を使って軍隊を作り、生き残った者全てを滅ぼす。それが私の夢だ。すべての兵士が私の命令に従うディストピアの世界。そして君は私のミュータント兵士になるのだ」

「いや…」リンは息を呑んだ。「そんなつもりなの？！正気じゃないわ！人間にも感情はあるのよ！」

「人類ってなんて弱い失敗作なんだ」シャドウサイドは私たちを睨みつけた。「弱さゆえに数人が死ぬことなど気にしない。お前たちの哀れな姉妹たちが洗脳されても構わない。今のところ、彼女たちは役立たずだ」

「そんなことはありえない！」と私は怒鳴った。「あの粘液を盗んだら、お前の時間は終わりだ」

「それなら、まず私を通り抜けなきゃ」と彼女は怒鳴り、ポケットから妹の粘液を注射器で取り出し始めた。

彼女がそれで何をするつもりなのか、私は一歩下がって考えた。彼女はそれを自分の皮膚に注入し、私たちは息を呑んだ。彼女は痛みに呻き、地面に倒れ込んだ。私たちは衝撃を受けながら見守っていた。粘液が彼女の体内を巡るにつれ、彼女は変異し、形を変え始めた。

リンと私は、彼女が見たこともない何かに変貌していく様を恐怖に震えながら見守った。彼女は巨大化し、黒く細い体に針のような四本の脚を持ち、腕の触手は長く、鋭い爪が体中を這っていた。目は真っ赤に染まり、青い水晶のような鋭い歯は、どんな嘴でも噛み切れるほど鋭かった。肩からは鋭い刃が突き出ており、触れるのも刺すのも危険なほどだった。私は恐怖に震えながら見つめ、心臓がドキドキと高鳴った。シャドウサイドが体の内外から恐ろしい怪物へと変貌を遂げたのも無理はなかった。

「それはズルだ！」リンは叫んだ。「治癒して、自分を内側も外側もモンスターに変えたのよ！」

「その通りよ。こんな変人に台無しにされるわけにはいかないわ！」シャドウサイドは声を歪めて繰り返した。「そして、あなたが最後に捕まったのよ！」

唸り声を上げてから、シャドウサイドに攻撃を仕掛けた。私のような力を持つ者でさえ、彼女は実に巧みだった。彼女は闇魔法を繰り出し、私めがけて撃ち落とした。私は素早く回避し、水属性の攻撃を繰り出した。シャドウサイドは私の攻撃など気にせず、あっさりと回避し、咆哮を上げながら触手を私めがけて放ってきた。

それは不可能だった。彼女はもはや私の力を感知することはできなかったが、私の力を吸収する力は持っている。水の力がほとんど蒸発していくのを感じ、私は苦痛に呻いた。ナイフを握りしめ、シャドウサイドに突進し、触手の一本を切り落とした。彼女は苦痛に咆哮し、触手を伸ばして私の首を掴み、屋根の縁まで投げ飛ばした。リンは素早く駆け寄り、私を安全な場所まで引き上げると、邪悪な怪物に襲いかかった。

「私たちを止める術はないわ！」と彼女は叫んだ。「人間は普通の人間よ。彼らがいなければ、世界は終わりよ。」

「あなたは間違っているわ」と彼女は冷笑した。「人類は失敗者よ」彼女は私の妖精の友達を突き飛ばした。彼女はアンテナに激突し、血を吐きながら肋骨を押さえた。

必死に避けようとしたが、彼女に蹴り倒され、舗道に叩きつけられて殻が割れてしまった。背中がひどく痛み、立ち上がるのに苦労し、ぐったりと左右に揺れていた。

翼を広げ、彼女に向かって飛びかかり、必殺技を繰り出し、殴り倒した。シャドウサイドは怪我もダメージも負っていなかったが、彼女は私を圧倒し、蹴り倒して皮膚を切り裂いた。私は痛みに叫び、腕を掴み、翼を脚に巻き付けた。私は打ちのめされ、死に瀕していた。

シャドウサイドはあまりにも強すぎた。彼女は私を打ち負かし、私は地球を彼女の破滅から救うことができなかった。私は地面に激しく叩きつけられ、血を吐き、無数の切り傷を負った。立ち上がって、あの恐ろしい女に反撃することさえできない。彼女はあまりにも強く、私は結局彼女の兵士になってしまうのだ。

「シラ！シラ、早く！」リンは懇願した。彼女は私のそばに駆け寄り、肩を揺すりながら目を覚ますように懇願した。「諦めちゃダメよ！みんながあなたを頼りにしてるのよ」

「もう弱りきってる」私はすすり泣き、出血で目がほとんど閉じない状態だった。「シャドウサイドを止める術はない。彼女は勝った」

リンの泣き声が聞こえたような気がした。小さな妖精の目は涙で覆われ、恥ずかしそうに顔を下げ、すすり泣いていた。「本当にごめんなさい。あなたを守りたかったのに、できなかったの。私がしたのは、あなたを捕らえさせることだけだったの。」

「それは違うわ」私は小さく呟いた。旅を始めた日から、ほとんどの記憶が蘇り始めた。「あなたに出会った時、あなたは私たちに変身するためのブローチをくれた。妖怪の世界に入り、旅の途中でたくさんの友達と友達になった。あなたは私たちに世界を救うよう励ましてくれた。おかげで、私たちはここまで彼女を止めるために来られたのよ」

その言葉がゆっくりとリンに伝わり、彼女はゆっくりと頭をもたげ始めた。まさか？シャドウサイドがゆっくりと私に近づいてきた。

「お前は本当に弱くなったな。お前たちを全て枯渇させ、世界を完璧な領域に変えてやる！」

「大嘘つき」私は呟き、ゆっくりと階段を登った。勇気と決意を振り絞り、勇敢さを保とうとしたが、あの魔女が何を言おうと関係なかった。「あなたはただの奇人変人。みんなのことは気にしない。自分のことしか考えていない」怒りに満ちた短剣を魔女に突きつけ、私は涙を流した。「そして、あなたのせいで全てが破壊されたのよ」

シャドウサイドは私の言葉に衝撃を受け、やがて私を包み込むように輝き始めた。戸惑いながらも下を見ると、その輝きが私に希望を与え、私を強くしてくれているのがわかった。あれは私の決意だったのだろうか？

振り返って、リンは肩越しに崖の脇に何かを見た。

「妖怪のシラ！」と彼女は叫んだ。「彼らがあなたに希望を与えているのよ！」確かにそうだった。見渡すと、海岸や街で数人の妖怪たちが輝きを分け与えてくれ、私の力をはるかに強めてくれた。彼らはシャドウサイドを倒すために、私に力を分け与えてくれているのだ。輝きが私を包み込み始め、リンは私が彼女が期待していた何かに変身するのを見ながら、後ずさりし始めた。

光を受け入れ始めた私は、ヒーローの衣装が白と青の忍者衣装に変身するまで、その輝きを堪能し続けた。キラキラ光るスカートと青いスカーフが調和し、伸びていた髪型も元に戻った。目の前にあるものが信じられなかった。私は新たな超能力へと昇華したのだ。

「さあ、お前を追放する時だ」と私は宣言した。私が彼女の闇の攻撃をかわす前に、シャドウサイドが攻撃を始めた。翼を広げ、力強い蹴りとパンチを数回繰り出し、円を描くように回転しながら彼女の頭を殴りつけた。

周りの皆が応援してくれ、私はさらに強く、さらに勇敢になったように感じた。空中を飛び回り、全力でシャドウサイドを攻撃した。腰の粘液小瓶に意識を集中させ、ナイフを抜き始めた。翼で闇の魔法を防いでから、身を振り下ろした。シャドウサイドは私が攻撃するたびに苦痛に呻いた。それでも私は集中を失わなかった。小瓶を掴み、ナイフをしっかりと握りしめた。

集中。

強くなりなさい。

忍者のようになりましょう。

急降下し、シャドウサイドに突撃を開始し、心臓を完璧に狙った。刃が彼女の心臓を貫き、腰から粘液の入った容器を何とか掻き出した。シャドウサイドは恐怖で目を見開き、粘液が急速に流れ出ていくのを感じた。粘液は彼女の胸から流れ落ち、彼女は人間と怪物の間を行き来するようになった。「やめてぇ！何したんだよ！」

彼女はまっすぐ私に向かって突進してきたが、私は何度も何度も殴り続け、一撃ごとに彼女は痛みに叫び声を上げげた。彼女はよろめきながら後ずさりし、徐々に力が入らなくなり、ようやく私は彼女を建物の縁から蹴り落とすことができた。彼女が叫び声を上げて転落死したのも聞こえなかった。崖下の釘に突き刺さり、命を落とした音も聞こえなかった。

全て終わった。シャドウサイドは正式に串刺しにされた。

「やっとやったね」リンは微笑んだ。私は妖精の友人の方を振り返り、疲れたような笑みを浮かべた。ついに勝利した。シャドウサイドの破壊を阻止し、妖怪界を救ったのだ。

「何とか手に入れた」私は地面から粘液を掴みながら言った。「でもまずはこの建物を燃やそう」

リンはうなずき、階段を下りながら、私はメッちゃんに呼びかけた。「メッちゃん、この建物を燃やしちゃうよ。安全な距離に離れて。」

「その通りだ」メッチャンはうなずいた。

研究室に戻りながら、研究室中に撒き散らせるオイル缶を探し始めた。誰もこのプロジェクトの残骸を集めないようにするためだ。これは破壊しなければならない。作業が終わったら、食料庫から出て2本のワイヤーを溶接し、研究室で爆発を起こして火を放つ。炎に包まれれば、C.L.Iの建物は瓦礫と化すだろう。

頂上を目指し始めた。私とリンは丘の頂上まで飛び降りた。メッちゃんがそこにいて、妹たちを研究所から無事に救い出してくれた。ため息をつきながら、C.L.I.その建物が燃え落ちるのを見守った。カナコの命の仇は取ったし、今度は妹たちを救わなければならない。

「わかった、シラ」メッチャンは、結晶化しかけている姉妹を地面に下ろしながら言った。「注射器を彼女たちの血流に注入するだけ。生き返らせるためにアドレナリンを少し入れたんだ」

注射器を取り出し、妹の腕の血液に滲出液を注入し始めました。効果があるか確認するために待っていましたが、結晶化した物質は妹の腕を覆い続けました。

「効かなかったの？」リンは困惑した様子で尋ねた。唇を噛んだ。目は青白く染まり、心臓がドキドキと高鳴った。どれくらいそこに立っていたのかは覚えていないが、何が起こっているのかは分かっていた。

「ああ、だめだ」メッチャンは息を呑み、なぜそれがうまくいかなかったのかという恐ろしい状況を悟った。「彼らを救うには遅すぎると思う」

恐怖で目を見開いた。「まさか！そんなはずはない！」私はレイカ、マナコ、トモカの元に駆け寄り、泣き始めた。「みんな、だめ！戻って！」と叫んだ。しかし、もう手遅れだった。彼女たちは完全に結晶化していた。私とリン・メッチャンは、姉妹たちを見下ろしながら、静まり返った。私は身動き一つせず、声も出さなかった。姉妹たちは…すっかり力を奪われ、結晶と化していた。私はついに膝から崩れ落ち、顔を覆いながらヒステリックに泣き始めた。

「違う…」リンはためらいながら、何が起こっているのか解決策を探そうとした。「全部シャドウサイドのせい！彼女があんな風にしたんだ！まだ解決できる！」

「リン」メッチャンは悲しそうにビープ音を鳴らした。「仕方がないと思う」

私は打ちのめされた。あれだけの苦労をしてきたのに、彼らを失った。私を生かしてくれたのに、今や搾り取られ、洗脳され、結晶に変えられてしまった。私は頭を下げ、妹の脇腹に抱きつき、鼻をすすりながら言った。「戻ってきて、レイ、T、マナコ。お願いだから戻ってきて…」

涙が溢れ、心から泣きじゃくった。姉妹たちを救う術などない、と心底分かっていた。シャドウサイドから世界を救い、カナコの仇を討ったのに、今、私にとって大切なもの、姉妹たちを失った。

大人になったあの日の思い出が頭をよぎった。私はマナコにとても優しく、野菜やベリーを抜くのを手伝った。トモカはこの本を見つけた時のことを教えてくれて、テクノロジーとは何かを教えてくれた。レイカは時々かなり辛辣だったので、私とはあまりうまくやっていなかった。今、彼らは私を逃がしてくれた。そして、私を生き延びさせるために、自らを犠牲にしてくれたのだ。

どれくらい泣いていたのかわからなかったが、小さな割れる音が聞こえた。顔を上げると、妹の結晶化した体の周りに小さな亀裂が広がり始め、そして亀裂は大きくなり、崩れ始めた。亀裂から光が漏れているのが見えたような気がした。そして、気がつくと白い光がゆっくりと結晶化した石を溶かし始め、妹たちも溶けていった。

妹たちが咳き込み、私は息を呑んで後ずさりした。呼吸も体も動き、皮膚も元通りになっていた。生きていたのだ！

「ねえ……シーラ」マナコは目をこじ開けながら弱々しく呟いた。

「お姉ちゃんたち！」私は喜びのあまり叫びました。二人を腕に抱き寄せ、大きな希望に涙を流しました。近くにいたリンとメッちゃんは、妹たちが生き返ったことにとても驚いていましたが、何が起こったのか全く分かっていませんでした。もしかしたら、私の愛が二人を生き返らせたのかもしれません。「信じられない！生きてるの！もういないと思っていたのに！」

「わかってる」とトモカは言った。「何が起こったのかは覚えていないけど、最後にみんなが覚えていたのは、みんなすっかり疲れ果てていたってこと。でも、何かが私たちを元気づけてくれた。それがあなただった」

姉妹たちに再会して、こんなにも嬉しくなったことはなかった。麗香、智香、真奈子を抱きしめ、涙がこぼれ落ちながらも、嬉しそうに笑った。彼女たちが生きていることが嬉しくて、笑いながら泣いた。

「お嬢様、あなたは勇敢な英雄だったから、その報いを受けるに値すると思います」とリンは微笑んだ。

「ありがとう、リン」私は微笑み、涙を拭った。泣きすぎで目が赤く腫れていた。レイカが肩に手を触れたような気がした。見ると、姉たちが微笑んでいた。私も微笑み返したが、その時、メッちゃんがC.L.I.の煙を吐く残骸を見つめているのに気づいた。

「すごく寂しくなるわ」と彼女は言った。「でも、あなたたちと一緒に来れば寂しくないと思うわ」

「もちろん、できるでしょう」と私は言い張った。「あなたは私を助けてくれて、妹たちを救ってくれたのに」

「メッちゃんが助けてくれたの？」マナコは尋ねた。

「ええ。母はそうしてくれたの。そして私たちは力を合わせ、何とかやり遂げた。私たちの世界は私たちのおかげで安全なのよ」と私は言い聞かせた。姉妹たちは皆、大喜びしていた。彼女たちは手を伸ばして私を抱きしめ、その満面の笑みに私は涙が止まらなかった。初めて、母の

言う通りだったと分かった。私たちは偉大な英雄になる運命にある。私たちの強さ、私たちの隠密行動、私たちの魔法の力、それが私たちを私たちたらしめている。

シャドウサイドから世界を救い、全ては平和になった。ここまで静かに来られたのはスピリットワールドのおかげだと感謝した。こうして初めて、私たちは魔法の力で結ばれたチームになった。「さあ、家に帰ろう、みんな」と私は優しく言った。

希望を捨てずに世界と妹たちを救ったことを、私は確信していた。今、私たちは再びチームの一員になった。妖怪界を救い、私たちを必要とする妖怪たちを助けた私たちのことを、お母さんはきっと誇りに思ってくれるだろう。リンとメイちゃんの方を見ると、二人とも微笑み返してくれた。そして、海から太陽が昇り始めたのを見た。

オレンジとピンクの光が冷たく暗い空を照らし、温かい大地を照らしていた。友達や姉妹たちを見渡すと、私たちが世界を災難から救ったことを実感した。母はきっと誇りに思うだろう。もしカナコも、もしまだ私たちを見下ろしていたら。

私は優しい笑みを浮かべ、私たちがハーフハートマジカルくノーハイブリッド、世界を悪から守る伝説のウミガメであることを皆が知りました。

著者について

2010年代後半頃、作者は4匹のウミガメを描きました。全員女忍者です。こうして、呪力を持つハイブリッドくノーが誕生しました。描く時は、頭が大きくてヒレも大きいイメージでした。どれも見た目が変だったので、水かきのある3本の指と小さな牙を口に描きました。

最初に頭に浮かんだシラハラを描きました。彼女には傷跡があり、それが彼女のトレードマークになっています。私は彼女に小さな青い髪、ピンクの目、そして水を操る力を与えました。彼女は勇敢で強く、チームの中で最も自立したリーダーとして描かれています。彼女はもともと魔法の力を持つ予定でしたが、もし彼女を魔法の戦士にしたらどうなるかと考え、実際にそうしました。彼女は漫画やアニメに登場する魔法少女をベースにしています。まず第一に、彼女はハイブリッドになる予定で、水に触れると翼と魚の尾になり、乾くと足に戻ります。彼女は水中で呼吸することができ、水滴を操ることができ、空を飛ぶことができます。その時、私は彼女に白い王女を意味するシラハラと名付けました。

次にトモカを作りました。彼女はグループの中ではオタクっぽいウミガメでした。眼鏡をかけ、長い黒髪を描き、超能力をルーツとする超能力を使うようにしました。彼女はアホロートルのエラを持つようにし、気分によって色が変わります。彼女は家族の中では賢くて天才的な存在で、発明が大好きで、優しいウミガメでありながら、とてもシャイな性格です。彼女の名前の意味は
彼女は素晴らしい友達で、私は彼女を一番上の子にするつもりでしたが、真ん中の子にしました。

レイカは次女になります。赤い目を閉じ、黒髪を短く描き、炎の力を持たせました。完全に口がきけないので、話すことはありません。名前は「美しい花」という意味で、気分によって怒ったり、
グループの短気な妹。

ついにマナコを描きました。この子たちの中で一番可愛くて、ふわふわのオレンジ色の髪で、一番元気な子です。名前は「愛しい子供」という意味で、彼女がどれだけ可愛くて子供っぽいのかを確かめるために描きました。生命力を使うようにし、動物とお菓子作りへの愛情を表現した性格にしました。

私は陸と海のカメへの愛と日本文化への愛を呼び起こし、世界を感動的な物語に形作りました。